

川柳塔

昭和六十三年三月一日発行 毎月一日発行
 創刊大正十三年 通卷七一八号



日川協加盟

No. 718

三月号

高橋操子 喜寿

句碑建立十周年

句集『万年青』刊行

記念川柳大会

日時 昭和62年5月17日(日) 12時半開場
会場 高石市羽衣 新東洋 宝の間

南海本線羽衣駅下車西へ徒歩5分
司会 板尾岳人・河内天笑

お話

展示

十指

過去

少女

空港

八起

万年

賞

秀句

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

賞

岩田美代追悼句会

日時 昭和62年3月22日(日) 午前11時開場
場所 西方寺(富田林市富田林町)

近鉄南大阪線「富田林西口駅」下車8分

お話 岩田美代さんの想い出 山本規不風

宿題と選者

珈琲

月曜

鰯雲

綺がすり

祈り

鼻緒

藤田 泰子選

里 小路選

高橋千万子選

小出 智子選

西尾 栞選

阿部 柳太選

会費 無料

□投句先

〒584 富田林市南大伴三三三

池 森子

主催 岸和田川柳会

主催 富柳会

た
だ

西 尾 朧

詩人、河野進氏の「母の詩」という詩集に「ただ」と題する詩がある。

た
だ

もつとも大切なものは
みなただ

太陽の光

野や山の緑

雨や川の水

朝夕のあいさつ

神への祈り

そして 母の愛

私はこの詩を読んでハッとした。

今まで、こんなわかりきったことがわからなかった愚かさに愕然とした。

日の光、甘い空気、澄んだ空、野山の

緑、静かな夜、星のまたたき、青い水、

清冽な流れ——これほど私達の心を豊かに

にするものはない。

然し、私達は「豊かさ」を求めて、反

対に空を濁らせ、緑をなくし、喧ましい

夜をつくっているのではないか。

何よりも、人間の心を温かく満たす朝

夕の挨拶や、思いやりといったわりの言葉

や、神仏への祈りや、そして親子、夫婦、

兄弟、友人の情など等自然への感謝だけ

でなく、共存する人間への愛の心をも次第になくしてきているのではないか。

人々は最も大切なものは、みな、ただということ忘れている。そして、その最も大切なものは、みな、ただという真実を、そして感謝を私達は忘れていないのか。そして、より多くのお金をかけて、大切なものを失いつづけているのではないか。神罰、仏罰を心配するものである。いや、自然冒瀆の罪は既に私達は受けている。

路郎先生の句に

それが世の中ですとはけちなこと

資本家はキヤラクターまで買ったが

春の草代議士などに踏まれるな

幸福は金庫の中になかりけり

座右の句

人はみな善なり向かい合ったとき

(緑之助)

私の句

叱つても母の温みに縋りつく

小白金 房子

川柳塔 三月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

ただ

茴香の根の下から

西尾 栞 …… (1)

川柳塔 (同人吟)

八木 千代 …… (2)

自選集

西尾 栞 …… (4)

■川柳太平記 (106) 川柳の群像 松尾馬奮

東野 大八 …… (32)

■連載 誹風柳多留廿六篇研究 (三十丁)

黒川 紫香選 …… (34)

水煙抄

藤井 明朗 …… (36)

秀句鑑賞 [同人吟]

大矢 十郎 …… (31)

愛染帖

橘高 薫風選 …… (53)

へ女性コーナー 茴香の花

小出 智子選 …… (56)

■同人アンケート 私が川柳を始めた理由と契機

…… (58)

茴香の根の下から

八木 千代

今年の私は茴香の根の真下にいるような気分を持っています。だから花や葉先にまで気を配りつけている根の震えも伝わってきます。

もともと根というものはいつも土の中に埋まっていて、ひとりぼっちで働く宿命にあるのですが、吸収した土の養分を惜しみなく花茎その他に送りつけることによって花々の呼吸と一体にもなれ、自らがひらく大輪にもまして深いよろこびを得ることもできます。

実は茴香の花の選者としての現実におそれをおぼえています。これは智子さんと同じきもちだろうと思います。長年月かかって塔の歴史は層の厚い女性作家を育て上げました。

そのしつかり耕してある土と可能性にあふれた花芽の数々まで添えて任せていただいたのですから。ためらいと責任感の交錯するなかで、今じぶんに出来ることは何だろうと、いっしょうけんめい根の下で考えています。

とにかく土にまみれて勉強して茴香を生かし香りたかい開花を待った上で、当然のことと

宮尾あいき・吉田笑女・朝山千世子・中原みさ子・宮崎シマ子

内芝登志代・後藤正子・西口いわゑ・山本玉恵

レジャー白書から

「お水とり」と「お水送り」

松岡三吉氏を悼む

松岡三吉さんを悼む

87年新年おめでとう会

初歩教室

「芸」

一路集「運」

「靴」

柳界展望

本社二月句会

各地柳壇（佳句地10選／奥田みつ子）

■3月各地句会案内

91

■編集後記

93

竹内紫鑄……(62)

布施幸子……(63)

川竹松風……(65)

赤川菊野……(65)

阿萬萬的……(68)

福本英子選……(70)

榊原秀子選……(70)

林はつ絵選……(71)

……(72)

……(74)

……(78)

座右の句

栄光の日も一日は二十四時

私の句

北国の旅の終りに引く御簾

(蕉風)

山口高明

して次の世代の根になってくださる方へ渡すことができるように努めて、それから先は人間のことですから間違いをおしえてくだされば改めながら自然のなりゆきに任せるしかないと思うようにして、自分の肩の重圧をとる方向に訓練しているところです。

一年交替という事にしても、連作の土地は育ちがわるいように、新しい養分を吸いとして思うぞんぶん花々のいのちを咲ききるための配慮かとも私は解釈しています。

二人の句風のちがいを気にかけていられる向きもあらうかと思いますが、それは句作には残りの時間を大切におもえばおもうほどじぶんの音色を澄ませるしかないのですが、個々の声に音域はあっても別のパートの美しさにも憧れるのです。堂々と自分の句を突きつけて下さい。公平な眼を保ちつづけようと、恥をかくことでいろいろな方の選を受けようと風にさらされている私たちです。

始まったばかりの女性コーナーにはまだ定型はありません。智子さんは産みのくるしみの真つ最中なのです。

どうぞごじぶんのためにも根を強くさせてください。風通しのわるいところには陽も当たらないと自分にも言いかけ智子さんをも励ましつづけようと思っています。次の根にもなる気で咲きつづけてくださいように。



西尾 葉選

大阪市 津守柳伸

水割りの孤独女に隙がない
一日のノルマに北の風ばかり
美代ちゃんが嫁入りをせぬ風のなか
運勢の白に油断をせぬように
割り勘のギョウザが憎い月曜日
休日のドラマ寢床を愛し抜く

松原市 谷垣史好

春めいて石段一つ踏み外し
公民館の初の仕事はお葬式
てんとう虫も二、三匹なら可愛いが
細木数子の目の中に見るカスピ海
返本の山など見たくありません
わめきちらして まだ日は暮れぬ

年 竹原市 小島蘭幸
の 始めのプランに高野山を置く

白髪となりぬやさしい眼となりぬ
ふところに数珠ありまっすぐに歩く
男がひとりめしを炊くのも喜劇だよ
宴のあとの皿が一枚もどらない
遠い風景ばかり見ている二階借り

岡山県 土居耕花

按摩機よお前はハイと言うてくれ
歯並びを見ながら小言聞いている
焼く時に悪口だけは聞かぬよう
二次会で借りているのと差し向かい
坊さんに水子ミズコと驚かされ
神様が正直過ぎて役立たず

桜井市 岩本雀踊子

人間が円うなったとおだてられ
傷なめて女が明日を考える
西成にしがみついている命

七十八回目の正月の猿芝居
屈辱を背負ったままの蝸牛
臍の緒の答をくれぬ義母の愛

弘前市 波多野 五楽庵

及落がいつも気になる絵馬の群

ジョーカーをすんなり引いてしまふ指

朝霧のような対話になる夫婦

ひよつとこの裏はあなたに見せられぬ

野次とばす事も上手な臍曲り

番号の近い籤から泣かされる

兵庫県 遠山 可住

掃くだけの埃が立たぬ老夫婦

まわれ右出来たあなたに従いて行く

真つすぐな大根街の子に持たす

黒豆はいいけど炊いたのが欲しい

一番高い山が少年待っている

ホームごたつ老いに二つの指定席

倉敷市 小野 克枝

暁天に向つて走る子を離し

まっ先にかかる電話と決めて待つ

値切っただけの客にも笑う夫婦離

青春の刺が笑つて虹になる

風探す自由を持たぬ風車

年寄りの無理を許して朝の膳

豊中市 安藤 寿美子

意地になつてゐるわけでなし寒椿

三日間ちゃんと日記を書きました
振袖を見ていてお顔見てません

半衿もつけられず娘文学士

満二歳しんといかわい生きものです

バーゲンに行く気力今日ありません

大阪市 西出 楓楽

テーマなど持たず明日の米をとぐ

才媛でないが利口に生きた老母

つながらぬ夢をいだいていて寡黙

欠け茶碗おまえも耐える役どころ

道化師を見て心から笑えるか

人の世や裏ばなしには裏があり

倉敷市 野田 素身郎

除夜の鐘妻はまだ割烹着

初売りへ買う物もなし金もなし

結局は去年と同じ寝正月

職員一〇〇人軍歴あるのは僕一人

冬枯れの校庭松葉杖一人

来るまで待たねば財布は妻が持っている

和歌山市 西山 幸

どこまで愛どこから憎の返し歌

今日も今日とてひとり暮らしの戸が軋む

頼もしい味方とおもう落し蓋

是か非かを問うコーヒーがほろ苦い

言い勝つて吹雪の返り討ちに遭う

喪の席でとても尊大ぶる家紋

春風の中を散髪して帰り

八尾市 高杉 鬼遊

やよい三月入院の友ふと想い

死ぬよりもエイズにかからないように

悪口を肴にうまい酒を酌む

あきらめの悪い男にパチンコ屋

赤信号渡る勇氣はもつてない

伊丹市 榎谷 寿馬

あれこれと言われても賀状温かし

究極は一升瓶にある宇宙

惑う朝靴まで二足出してある

自分だけ美味くやっている真面目

症候群の中の一人と安堵する

日本列島の向きと同じに横になる

島根県 堀江 正朗

抹茶から続く汚れない話

手さぐりの口は三つ四つ先走り

相づちを打ちつつテレビ見えません

吹雪く音妻といっしょに聞く安堵

眠いのは何処かで逆な血が騒ぐ

六十年昔の絵だけくる暇

島根県 堀江 芳子

思惑へ人間ばんざい字が書ける

針仕事言訳上手に聞いている

追加した分だけお喋りさせる酔い

とうさんの知らない花を活けた悔い

春やがて雪美しく眺めおり
知らん顔してた息子の聡い耳

米子市 林 瑞枝

山里に声のあふれる四季の詩

はつかほかの話題を伴れてくる風よ

傷派手に赤いワインを召し上かれ

森番の冴えた耳から春がくる

薬の馬いつも花野の夢に覚め

優しさに討たれて酒を酌ぎこぼす

八尾市 宮西 弥生

黄昏で敵も味方もないネオン

三月の女で軍備などもたず

神さまに泣きごとを吐く夜がある

矢面に立つのはいつも独り者

一粒の健康剤があるラッシュ

未完の絵の中で重なる誕生日

奈良市 宮口 笛生

十二月の酷六百の年賀状

一年の充電をする寝正月

朝酒のうまさ覚えた三ヶ日

これ以上望み御座無候新春

逆縁に泣く葬列の粉吹雪

長生きの婆さんが居る囲炉裏の火

和歌山市 福本 英子

亡弟の子科練祭に

両の掌を合せば遠く海の音

炎えつきて水平線へ身をまかせ

それからの海の青さは信じない

ポストへの往き来に逢うた温い雪

二十五日にくれるケーキは善意だな

ワープロの年賀ばかりが増えてくる

寝屋川市 宮尾 あいき

七草がみんな揃うた散歩道

散歩道寒さ知らずの犬の恋

孫の笑顔で我家の朝の幕が開く

パパ似かな決して祖母に似るまいぞ

風は早起き正月休みの戸を叩く

鐘溶かす情熱女はかくし持つ

富田林市 藤田 泰子

向い合う型で椅子を置いておく

告白をしそびれたまんま磯伝い

あせらないことにしている鳩時計

余白なしもう失敗は許されぬ

娘が来ると父と母との面かぶる

しっかりと瞳を見開いてみてる夢

近江八幡市 前川 千賀子

ふる里の遠さよ七草揃わない

人の世の噂に兎の耳が病む

芝居なら助っ人の来るこの辺り

実のない男を憎めぬばたん雪

雪しきり折りの言葉が響かない

満たされた愛に忘れた花言葉

尼崎市 春城 年代

老夫婦ふたりっきりの欲はなし

酌み交すとき心から味方です

真紅の薔薇を贈られてから香に嗜せる

掘りこたつ冬には冬のたのしみ

予定表に斜線を引いて病んでいる

いつからの賀状一会の友である

松原市 佐藤 藤子

モチーフをつないで息をととのえる

叔父さんと同じ夫も五十肩

幸せごっこ夫婦茶わんが欠けている

掃除機に吸わすきのうの夢のあと

佗助が咲いて近況たずねあう

野辺送りその日も風呂がわいている

寝屋川市 稲葉 冬葉

三ヶ日いのしか蝶も飽きてきた

捨身になって自己嫌悪から覚める

外孫がわたしに投げる変化球

その時が亀の青春だったのさ

少年の胸ポケットにある童話

卯の年へ結婚願望強くなり

大阪市 北 勝美

湯の花を入れる子がいて老いの幸

七十五歳妻の背中を撫でている

ここに來てどつと出て來た手の疲れ
神仏へ心経の声かすかなり
おおっぴらに風呂へ一緒の病む妻と
病む妻の嫁に感謝の声素直

松原市

小池 しげお

十万円金貨マル優から減りぬ

老眼鏡でカラオケ稽古しています

内需拡大コートは長く袖ながく

ヘルスメーターお姑さんを追い越した

墓参り株でもうけた河内弁

たんまりと遺産がはいる喪主のバラ

岡山市

嘉数 兆代賀

五百羅漢訪ねる亡母に逢えそうで

金のない者同士ウマが合い

口下手な女でおじぎばかりする

惚けまいぞばけまいぞと惚けていく

薬灰の温さでこの世終りたし

東大阪市

森 下 愛 論

お神酒もう下げて飲んでるお元日

お年玉強盗狙う世となりぬ

持つものは持ったが二号だけ持たず

群集の一人となって歩く地下

川柳塔皆勤

皆勤賞年間賞へ励みつゝ

平田市

久 家 代仕男

汐は満つ思考錯誤のはてに満つ
公約の反古一票は俺も入れ

減税の節に残るゴロタ石

北風が唸るポプラが空を掃く

退屈を知らぬ倅せ持つている

柳井市

弘 津 柳 慶

パチンコ台最後の一発強く打ち

雨男団体旅行にひやかされ

舌たらずの歌へ一家の大拍手

お年玉を貰うまでのおじいちゃん

すすはらいして元旦へ腰をもみ

熊本市

有 働 芳 仙

本当の愛のことが辞書にない

その辺で人生論は打ち切ろう

名講義時々入歯の音がする

美しい不倫を信じてくれますか

雪しんしん地の温もりや藪柑子

堺市

中 川 滋 雀

ひのと卯六十二年が廻り出す

老人にまだなり切れぬ血が騒ぐ

少年の壮志は豆の木だけでない

有るところにないので困る妻の留守

のんびりと然しもの憂い妻は留守

島根県

西 村 早 苗

シクラメンとっても見事よひとり部屋

三面鏡へ別れる心閉じこめる

出迎えの傘の向うに糸の雨

妥協せぬ女の長い赤い爪

寝台車哀しい美貌に逢う

島根県

小砂白汀

イエスマンばかり揃えて横倒し

鳩一羽歩きドラマの間をもたせ

雀でも来てくれ老妻ぼけはじめ

ようそろようそろ風は南へ廻ったぞ

正座して疲れ胡座してなお疲れ

島根県

榊原秀子

正月の空高く揚った風の意地

礼節を忘れてしまっている虚栄

言動が思慮の深さでまげられぬ

従うていれば平和な夫婦船

ふるさとよひたひた潮の香が寄せる

島根県

錦織文子

まだ老父の暮しに生きてる火吹竹

軍歌しか知らぬ夫に酌いであげ

耐えて耐えて閉じてるふすまの重いこと

真相が聞きたい郷里の糸電話

言い合った寝顔へ女の悔いがある

美禰市

安平次弘道

違反にはふれずタルマに目を入れる

ここだけの話はじつとしておれず

とまり木で夢は語らぬ方がよい

利口ぶっているから口が重くなる

因果とは哀しきものよ血の絆

米子市

小西雄々

如月の風に触れたい墓参する

弥陀の瞳にひかれて背く気にさせず

贈答へ心こめたに値踏みされ

世渡りが下手で手荷物ばかり増え

毒舌のベストセラーを読みなおす

米子市

林荒介

福耳と呼ばれた亡父の椅子に立つ

逃げ水を追ってしまっている私

わたくしの指にもやはり疵がある

花道の傘が隠している時間

脱ぎ捨てた影がわたしと重ならぬ

米子市

田中亜弥

行き先は知らぬが船を描きつづけ

仏の灯もとめていまだ旅つづく

保護色で枯野のなかに佇ちすくむ

再会は明日ねむれない眠れない

仏心にひたつて数珠がはなされぬ

米子市

青戸田鶴

芹なすな七草がゆの誕生日

ふりむけば私を叱る風の音

古い茶碗のもつ静けさはなんだろう

シクラメン買って明るい冬にする
憎らしい言葉オブラートで包む

米子市 野坂 なみ

今朝起きて洗面器にうつる私を見

今し方仲間と乗った初春のバス

冬木立夢の証文買わされた

雑踏にすぐ紛れ込む青大将

どんな時でも踏台となる母の椅子

和歌山市 若宮 武雄

身の上は似たり寄ったり吹溜り

千両万両庭にはたんと有りますが

喪の窓へ後れはしまい春の風

男やもめへしつこくまとう隙間風

春めいて肌も艶めくさるすべり

和歌山市 堀端 三男

串柿の蒂だけ残る小正月

一期一会いま初がまの湯がたぎる

福笹をしつかりもって肩ぐるま

目覚しのネジを捲かない三ヶ日

増税元年金暮し脅かす

和歌山市 松原 寿子

ひとりの譜へおんなごろを閉じ込める

あなたの掌におんなの素顔おいてくる

夢醒めて絵の切れ端を握りしめ

分析をすると素敵な愛かもね

恋文に揺れて眠りに着けるなら

和歌山市 神平 狂虎

川はひと筋春の心になっていた

勾配がとっても急な恋の坂

海に來たのにふたりに座る場所が無い

濡れた瞳で僕を視つめる冬の星

雨が止む頃には手紙書き終える

和歌山市 福井 桂香

愛を訪ねて今年も海に出てしまふ

ユーモアの峰打ちになら切られたし

指切りをした分小指悩み出し

御神火の怒りをよそに咲く椿

構造不況もぐら叩きの順がくる

唐津市 仁部 四郎

2キロほど先へ登ったラブソング

うぬぼれている間に影が痩せ細り

筋道の立たぬカネならあると言う

学歴の値段を君は笑えるか

春が来る齡の話は小休止

唐津市 久保 正敏

目移りが六十路の彩を決めかねる

初めての振り袖嘘の街へ出る

背信の美女を讀んでいるドラマ

キャンドルに灯をつけ過去に目をつむり

ホステスの酒量が解る鍵の穴

唐津市 浜本久仁於

寒菊は逞し白にある決意
早ばやと暖冬異変の梅で飲み
六十の坂にもあった迷い道
風が耳に残して行く旅愁
新しい暦で父と母になる

唐津市 田口虹汀

片袖を濡らす相手のいる傘寿
母連れて登る晴天鏡山
こけしにも対で並んで見たい欲
雪景色足は炬燵へ入れたまま
柳にも一本芯が有りました

名古屋 越村枯梢

寝ては夢起きても夢と惚けはじめ
冗談を言う程ゆとり持ってない
子の遺品手編みのセーター温う着る
福耳も貧乏耳もあって暮
一握の冬陽を貰う吹き溜り

下関市 石川侃流洞

アポロから兎のロマン風化する
クラス会暮しの落差ふと感じ
アルミ貨が陽の目を浴びて募金箱
古希の手に息子の温いお年玉
ご神火は荒れても故郷住むところ

倉吉市 奥谷弘朗

後を押す妻が頑張る気にさせる
夢のある内が花だと言ってやり

節約で足りる暮しが性に合い

親しさかやっぱ隣に来て座る
威勢よく切った啖呵を後で悔い

東京都 増田次章

税務署もサービスマンの笑顔見せ

言訳を練った相手は留守でした

裏切った方が苦しい裏事情

手も荒れて心も荒れて単身赴任

国鉄の暖房なぜか強すぎる

松原市 玉置重人

すぐ背伸びしたがる男の悪い癖

ひとときの画廊で私をとりもどす

銀シャリの悲しい夢を見た虜囚

ぜんざいの餅が焦げてる小正月

賽銭を覗いて帰る戎さん

京都市 都倉求芽

早春の風に色めく石仏

粕汁を濃いめに妻の留守の夕

売店にずらり殺人新刊書

気短かが自動点火を抱いている

滲むまで相手の胸に筆を止め

京都市 松川杜的

八十の祖母も腰紐赤を選ぶ

人も石も無言化野に雪が降る
何はともあれ七回目の回り年
初神楽巫女もさやかに白い息
三ヶ日カラスの声を吉と聞く

鳥取県 川崎秋女

ここに根を下ろしてからの松の意地
松枯れて実家への道を見失う
木が三本寄ると鎮守の森となる
振り捨ててすつくと立ったポプラの木
もう春だネ笑い袋を縫っておこう

大阪市 河井庸佑

日本の広さ感じる春だより
無駄口をたたける口は持っている
兄弟が受験気になる春となる
慰留してくれると信じて席を立つ
三浪に正月が来た春四月

大阪市 江城修史

人生の所詮はひとり黙すのみ
負け犬へ聞かす根性物語
木枯しよいつの日逢えるちぎれ雲
無為無策視野に山茶花散るばかり
木枯しが果たせぬノルマの背を押す

大阪市 天正千梢

不発弾つめるに艶小さすぎ
惰性のこわさ合掌に教えられ

歩き疲れてにがい水の味おぼえ
在位六十年寒ボタン咲きそろい
色即是空食欲は別にあり

大阪市 神夏磯道子

七草粥この幸せがつづくよう
スケジュール詰った中の診察券
音痴節太鼓をたたく妻がいる
歩道橋よつぽど暇な人だろう
客ごとにおんなじ事を言うて吞む

大阪市 本間満津子

正月呆け頭の蓋を開けたまま
ゆっくりと時計が廻る昼の風呂
お年玉貯金にすると蛙の子
正月の広場に子供の影見え
お賽銭百円たこ焼き二百円

大阪市 黒田真砂

貧しいが心を満たす子が三人
便利さに馴れて手をぬく夜の膳
時々はうれしい夢も見る枕
昨日の事もう忘れてる老いの坂
忘却の彼岸にあった愛の花

大阪市 藤田頂留子

冬將軍氷河時代を読みふけり
善根の芽からチャンスの花つばみ
称賛のひとこと自信つけてやる

喜んでもらえたささいな事やのに
にくい程出るパチンコの両どなり

竹原市 森井菁居

長女成人式(一句)

別居して赤飯が無い祝いごと

大学へ戻る短き冬休み

五十とや長き旅路へ出直すか

倅せはきしまず回る夫婦独楽

新年の抱負に曇り空はない

今治市 越智一水

芽ぶかんとする老木へ抱く望み

夕焼が詩集のように広がりぬ

ふだん着のような話で徳を知り

嫁った娘が茶の間でよく食べよくしゃべり

家族解散あ父の恋母の恋

岸和田市 福浦勝晴

愛してる甘えてもいる拗ねている

牛乳をテリアと二人で分けて飲み

お好み焼き二人がかりで裏返し

官能の海とはポルノ大袈裟に

怪ッ体なやつとウマ合うコップ酒

兵庫県 辻文平

糸切った風の自由な宙返り

石蹴って男波紋を読んでいる

相槌の重さを夫と流す汗

忘れたいことを日記のページ
蛇口全開今日のいくさを考える

東大阪市 斉藤三十四

盛装は急に言葉もあらたまり

反省をすると元気が湧いてくる

杯の来る迄待てぬ外野席

初日記今年は国旗立てましよう

盛り場の懷手は邪魔がられ

東大阪市 崎山美子

とびだしてみればとなりへ来た歳暮

歳末の街にまごつく白い杖

花の香がそつとはげます試歩の杖

中流の悩みの種がつきまとう

たよりない男が妙に気にかかり

西宮市 林はつ絵

豪邸には不思議なほどの寒い部屋

熱っぽく無縁の値札読んでいる

ときどきはおんなの袋空にする

ひぎにのる猫と冬の陽分ち合う

山茶花の花芯にそそぐ陽の情

西宮市 草刈墮駄

自画像を描くに絵の具色不足

空中の歪み飛行機に乗ってみよ

釈迦もまた無政府主義者の偉大なる

美しい詩など書けるか兎小屋

浅草のあの天井が口に合い

堺市 高橋 千万子

樟 岩田美代さん

あなたとの出合を閉じる読経聞く

横断の主婦たくましい十二月

せめて花千両万両活けて足る

海老もらい今更ヒゲの長さ見る

目立たない男が目立つかくし芸

堺市 柿花 紀美女

大地打つ鉄有難し古稀の春

置炬燵あの子この子へ毛糸玉

一年生兎も亀も並んでる

ガスの栓気になり駅から電話する

深夜便妻子の写真立てである

倉敷市 稲田 豊作

訥々の私へ妻は機関銃

大安日同じ誓いを読んでいる

長いながい投資だったなあ花嫁姿

軽はずみすまいぞ歳を笑われる

神の聞く貧しい声よ労働歌

松江市 舟木 与根一

暖冬で寝正月から落ち着かぬ

白いもの混じりお多福品が出る

親睦という麻雀に遊ばれる

出世などあきらめている向う傷

おふくろの味が冷蔵庫で消える

松江市 柳 楽鶴丸

煙草にはなかなか書けぬ三下り半

完璧すぎたアリバイで疑われ

これが魚の王様ですか稚魚の群れ

いやいややと小芋逃げまわり

留守番電話に切替えてする昼寝

出雲市 原 独仙

二ヶ月の逃げ脚老いを連れてゆく

一日中炬燵抱いても腹が減り

死して尚艶聞多い人でした

両隣り男やもめと未亡人

わが庭も春呼ぶ山茶花沈丁花

高槻市 辻 白溪子

補助席の幹事は世話が行き届く

立話だんだん実が入り熱が入り

京料理皿で食べさす味を持つ

タレントの端くれ物真似少し出来

留守頼む隣がペット預けに来

尼崎市 春 城 武庫坊

多摩陵が見えかくれる冬の雲

川枯れて逃げ足早い冬の雲

モノクロの被写体になる冬の雲

大正の顔に息切れなどはない

コーヒーでおさめる下戸の憂き話

今治市 矢野佳雲

人生論人と同じの筈がない
一列で歩む掟は蟻だけか
門限を妻もちよいちよい遅れだし
押せ押せのムード女が強くなる
分校の兔可愛い名を貰い

富田林市 田形美緒

ふる里は雪国ですの色白で
筆まめになろうと思う初硯
振り袖を纏うて女が匂いだす
子の夢に夢を重ねる春弥生
赤白黄服んで明日も恙なし

羽曳野市 佐野白水

補聴器のポリウム上げる良い話
食管を知らずスーパールの米を食い
自由米の謂れを知らぬ新人類
N T Tも金貨も当らぬ良い新年
孫の友にタコ焼取られた初詣で

寝屋川市 江口度

内職の小銭も貯めて祖母達者
製図板機嫌いい日も悪い日も
好奇心強い先祖のいた兔
かぐや姫きつと卯年の生まれだろ
雪割草新春の陽射しを知っている

八尾市 宮崎シマ子

チャネルの違う家族を母東ね

隣の子の晴着一式胸算用
同病相憐れみながら二人部屋
万歩計しばらく止めて立話
日帰りの小さな旅は梅を見に

守口市 羽原静歩

煩惱の虫ぞろぞろと河川敷
早春の聖書机に伏せて留守
春愁のちいさきものに反故の籠
土筆摘む母娘に煩惱などはない
時よ止まれ伊予路の春のシルエツト

倉吉市 渡辺独歩

除夜の鐘一〇八国会糺す音
草萌えて地方候補は胸にバラ
東京の雪で列島冬に入る
黄砂降る北京のデモの匂いして
追儺豆アメリカ産とは知らぬ鬼

鳥取県 新家完司

ジングルベル別れ話は似合わない
おもいでを肴にするとすぐまわる
嘘をつく前のカラスは白だった
働けぬ男に苦い酒がある
腕の中いとしいものが冷えてゆく

宝塚市 丸山よし津

年賀状友の再婚告げて来る

おもちゃ屋で万札払う馬鹿らしき
パンダの名十大ニュースに載る平和
謎解きの楽しさで見る写楽の絵
赴任地の梅林を訪う初老ひとり

豊中市 田中正坊

長男婚約(二句)

春や春うちの太郎が嫁もらう
ときどきは別コース行く通勤路
人間不信ペットフードがよく売れる
自分史の序曲軍歌と労働歌
いくたびか修羅場くぐってきた無口

京都市 山本規不風

怖ろしいと思う指切り寒椿
恋も好き冒険も好き沈丁花
凍蝶を抱く温室の寒牡丹
喉元を過ぎた不義理の薔薇の棘

弘前市 田中叶

冬の火事ある日私の子が生まれ
長男が生まれた日から死を思う
キヤラメルを鉄砲で撃つ大人の恋
どうしようもなく黒人の歯が白し

芦屋市 竹中綾珠

かくし芸芸能人の咽喉仏
三ヶ日すぎラーメンがほしくなり
戎さんの土産に金太郎飴お多福飴

松の内あつと言う間に過ぎて行き

仙台市 川村映輝

騙されてやったら他人まで騙し
人権を無視して動物愛護する
わが子より金が欲しくて保険かけ
若いと言われても鏡納得せず

笠岡市 松本忠三

元旦を避けて天寿を全うし
三カ日明けて火葬場フル回転
お裾分け産地直送ごあますの
交通が渋滞でしたよく有る手

町田市 竹内紫鏑

セカンドライフそれまでよりも読む英語
早起きにひいきの一人女性アナ
パロディーを療友卵の殻に書く
一世紀親子の無口引き継がれ

榎原市 岩井本蔭棒

水干と木履を脱げばただの人
これという足跡もなく今日暮れる
放蕩児老いて他人の恩を知り
実直が馬鹿らしくなる靴の泥

和歌山市 内芝登志代

じいさんの代から大事な得意先
女ひとりけなげに生きる低い腰
実年へ階段高く見えてくる

賑かな未来図となる子沢山

和歌山市 牛尾 緑 良

小道具につかう涙が溜めてある

末席で人を見る眼が出来てくる

結び目のひとつひとつで妻と逢う

噂話が吹きたまってる主婦の耳

和歌山市 天 満 三千代

土にいどむ成るにまかせてうろたえず

健康のよろこび採果の手がはずむ

みぞれ降る炎えにもえてる寒椿

孫一人増える卯年の春であり

和歌山県 寺 田 裕 美

頑張りますなんてマイクをごまかされ

掘った溝埋める言葉を温める

手を打って結んであの日をふり返る

抱かれるために真っ赤に咲いたバラ

大阪市 西 森 花 村

絵馬上げて飼馬料です忘れてず

考える人サルマタを替えとなり

流れよる椰子の実此処らで根を下ろそう

俊寛の役がやりたい不精者

大阪市 長谷川 春 蘭

老いの部屋趣味三昧を飾りつけ

神詣で出来てよろこぶ足達者

毎日の妻の友なり鯨尺

老友に昔も今もある節度

大阪市 大 塚 節 子

毛皮着て中流意識確認し

新成人今年は少ない丙午

卯年古い良い事ばかりでないそうな

客席も舞台も晴れた初芝居

大阪市 吐 田 公 一

こんないい露天風呂あり過疎の村

外聞も恥も捨てててゐる親心

北方領土平行線は崩れない

山の美と恐さ知ってる登山靴

米子市 石 垣 花 子

嫁ぐ娘よピアノを乱打せぬように

謎解けぬままにトンネル抜ける汽車

ぬるま湯の中で理想追いつづけ

籠の鳥山のきびしさもう忘れ

米子市 菅 井 とも子

里の茶碗まだ私を待っていた

置き手紙今朝の一言詫びておく

ほろ酔いになるとなぜだか子へ電話

流し雛祈りも乗せて夢のせて

米子市 政 岡 日 枝 子

友達の僕には夢を教えない

明日を見る窓はくもらせないように

春が来る頃には知恵の輪とけるだろう

子にわたす童話の舟は沈ませぬ

米子市

寺 沢 みど里

行き詰る思案吹雪の中あるく

鳥取県

中 原 諷 人

寿司飯の艶へ真冬の風おくる

草鞋編む若い仁王の旅立ちに

調律を終えたピアノが他人めく

藁苞の温みしみじみ寒牡丹

米子市

澤 田 千 春

これからも世話になりますめし茶碗

春一番なつとくのいく面を買う

銀色のカモメが呼ぶよ朝の海

めし茶碗かえてステツプしたい春

鳥取県

清 水 一 保

竹光と言うな刃こぼれせぬ強み

惚れ切つて仰げと冷やか寒の月

古農具亡父が拳で拭いた汗

冬眠の歌が聞えて来ると春

鳥取県

金 川 満 春

平穏な正月福祉の灯の温さ

灯を消して今日も安堵のいい寝息

喜寿過ぎて門松成程一里塚

お迎えが何時来てもよい喜寿も過ぎ

鳥取県

森 田 熊 生

焦点をつく発言に子供の眼

念に念押す性格でケチにされ

くもり後晴れ人間が丸くなり

玩具屋の前は関所で孫を抱き

幸せの何故幸せか解けぬまま

それぞれの四季の日差しに文がある

西宮市

野 呂 鶴 汀

五線譜にひと夜ひと夜の下駄の音

夫婦茶碗を滌ってくれた寒の水

お婆ちゃんまでが草餅つくれない

急ぐ旅の国有鉄橋ゆるる風

鳥取県

中 原 汲 香

おごそかに年流れきて白寿まで

春一番新人類になりました

春場所を観ているうちに日が沈む

水仙の香りを抱いて子育てに

鳥取県

土 橋 螢

合掌すると霜焼の掌が痒くなる

念仏を唱え人間やめますか

さよならの手紙書かないことにする

怒るでも笑うでもなし煙草吸う

鳥取県

森 山 盛 桜

朧月キザな男を演じ切る

峰打ちのお情けと居る軋む椅子

掃き寄せた破片がボクの顔になる

耳垢を落として因果など思う

秋晴れて薬師如来に会いに出る

西宮市 奥田みつ子

満月に向って歩き出す枯野

八尾市 山下みつる

オアシスは誰も知らない森の中

人間をみつめる犬の哀しい眼

おろかさに向き合っている二日酔い

妻が待つのはのほのぬくい道を行く
ばやく程力不足を感じさせ
長い袖着たいきせたい親子像
ダブルのオーバーヤングに見直され

西宮市 西口いわゑ

旅おわるほのかな恋よさようなら

大和高田市 岸本豊平次

広辞苑しらべた余裕黙ってる

手洗いの鏡へ女隙を見せ

礼状がワープロで来る世相なり

尼崎市 奥山美智子

正直なうさぎの耳が長すぎる

なにもかも鏡に言っている安堵

死ぬ時に人間何を考える

ひと言を抱いて燃えてる寒椿

唐津市 浜本義美

止まり木に汚職へ遠い顔並び

出来すぎた嫁に姑疲れだし

円高で靴が履けない明日の地図

税革の蔭で軍靴の響く音

松江市 恒松町紅

母親がまた口を出す見合席

単細胞がうっかり乗った口車

ふる里は雪しんと老いふたり

軍拉の輪を抜けだせぬ風見鶏

最高の生涯緋毛氈の上にある
お正月国旗はためく風がない
恙なし古曲芸能の三ヶ日
いさかいの声は木魚の音で消え

元日の主役にされる年賀状

姫路市 人見翠記

豊栄会記念大会

忘年会三回目から逃げ口上

欲もなく色気もなく日々是好

十三回忌急に亡夫が近くなり

頭かず揃った今夜は湯豆腐で

箕面市 坪田紅葉

公園の裸木寒い風に逢う

凧上げる童に明日の風がある

高石市 浅野房子

公園の裸木寒い風に逢う

凧上げる童に明日の風がある

飲み込んだ言葉の重み胃にもたれ
陽だまりで編み棒弾む沈丁花

浜田市 佐々木 裕

反骨は撲られ強い元二等兵
ここまでが限度さわらぬ神で置く
好奇心そつと手にとる試供品
手心に馴れた暮らして豚になり

浜田市 中川 幸一

首伸ばし縮めて鶴のものの想い
よろめいて一夫一婦に弓を引く
ロボットのストの要求ネジひとつ
ああ言えばこう言う奴が今日は留守

出雲市 吉岡 きみえ

のり遅れつるべ落しの陽に迷う
ねむれぬ夜枕に罪はないものを
忘れ物にくい男の後を追う
ワープロに愚痴ありつたけき叩く

出雲市 園山 多賀子

岩田美代さんを悼む

師走風川柳の灯を一つ消す
鯨尺捨てない針の春衣
一陽来復島の椿は今盛り
自分史を未完のままでは綴じられぬ

出雲市 園山 よし子

万札に手荒いレジの街師走

肩寄せる夫婦の好きな鍋たぎる
忘年会事故の相手も吞んで居る
台所母の唇に赤はない

神戸市 仲 どんたく

先立たれ段取り狂うて来た余生
御先祖を質に取られているお布施
取扱い注意で越した百八つ
ジバングの黄金の国のうさぎ小屋

神戸市 山口 美穂

白椿きっぱり妬心はないと言う
椿の紅風花舞うて思うこと
夢いくつ香氣漂う水仙花
ワイングラス夢なら覚めじと願うても

大阪市 坂口 公子

テレパシー臥せると子らがやつて来る
結び目に愛と憎とをからませて
スイッチオン眠る時間が惜しくなり
倒れてはこれまでかなと又思い

西条市 片上 明水

候補者へ夫と違う旗を振る
冬の酒春の企画を語り合う
地下足袋を日々履くひとは父と母
布靴の日課に慣れた定年後

和泉市 西岡 洛醉
ストレスの胃壁も僕と泣いてくれ

かくれ宿変哲も無い妻を連れ
五十九歳春遠からじ公私多忙
忍ぶ恋それは艶歌ですおんな

岡山県 小林 妻子

年金も貰わず輪禍の生贄に
まあまあ年だと思ふ餅が掲げ
這う程に悲しい老母は二度童子
正月は休めと雪も如才なし

岡山市 井上 柳五郎

去年今年の一点凝視鶏の声
命ある句命ある句とて年があげ
神様へ数え年にて祈禱され
新春の旅隣も帰った灯がこぼれ

島根県 石田 清泉

チビツ子の大賞母のものでない
「お年玉迂濶にのれぬ敵がいる
二人三脚まだ続きそう古稀の春
上げ底をして中流に来る増税

福岡県 横地 雅風

退官の人相を変えた花の鉢
暖冬で晴耕雨読の梅鉢
正直は暦か自然か寒の花
人微力神は雷鳥を白くする

倉吉市 野中 御前

千鳥足妻は他人の目で迎え

凍魚の目怒り心頭凍てついて
風向きへいつも素直な母の目よ
我が輩は猫嫌いな人と好きな人

河内長野市 井上 喜醉

葉ボタンが耐える初雪音もなく
逆らわず時の流れへ浮く余生
十字路で風とぶつかる神経痛
表彰状たった一枚父の過去

玉野市 小谷 仙山

大らしい犬で首輪が似合わない
一人ぼっち雪は右から左から
はでやかに咲いて厳しい冬のバラ
成程と妻のぐち聞いて餅こがす

寝屋川市 岸 野あやめ

会うことは絶えて佛のみ賀状
平凡の二字が老後のマスコット
暗号で株の損など書く手帳
ホステスにくらしがあつて早出の灯

高槻市 竹内 花代子

お向いのブザーへ吠えてるマルチーズ
市場箏琴の音聴いてる松の内
線香の年玉貰う月参り
もう一度生き返った亡夫で夢の中

岸和田市 古野 ひで

風邪如きに負けてはならぬ食欲よ

自画自賛おせちのお重に心満つ
女ひとり涙はらはら貝になる
淡々と乳房を手術すると言う

高知県 小澤 幸 泉

貸本屋おやし決まってハゲている
ピーポーに乗せて生活の後始末
自分史書くふるさとのあたたかい
たった10cmの雪全国版にさわがれる

宇部市 平 田 実 男

久々の賀状はたちの顔で来る
日の丸を建てると思想疑う目
正妻に座る頃から地味を着る
衰弱が日増し重たいドアを押す (母入院)

羽曳野市 田 中 隆 二

いい出会いあるかも知れぬ初春の酒
つながりを大事にしたい玉子焼
窓際で椅子取りゲーム見てるだけ
全集を揃え定年近くなる

富田林市 松 本 今日子

追い込まれないと書けない年賀状
粕汁の色に染まって夫婦箸
ひよっこりと電話して来た雪の朝
ああ慕情そんな佳人が一人逝く

ああのベッドこのベッドにもない子宮
寝屋川市 平 松 かすみ

二、三キロ痩せてくるくる腕時計
計画ヘリズムが狂う流行風邪
主婦らしくなって時間へ腰を上げ

岡山県 直 原 七面山

流行に取り残されて母は老い
豊作の国に住んでパン暮し
帰宅して捨てた小猫に迎えられ

倉敷市 藤 井 春 日

酌む酒のコップの底に故郷がある
嫁ぎ行く日もま近く父無口
墨染めの衣を脱いで先斗町

岸和田市 清 野 こう

十一月二十七日夫入院

天地に今日生かされている祈り
注射で明け注射で暮れて今日終る
看病も今は倅せ紙おむつ

岸和田市 原 さよ子

忙しい疲れをよそに又肥える
テレビゲーム孫と本気でやっている
赤丸をつけて退院待つ息子

岸和田市 芳 地 狸 村

ことわりも情けがこもる大阪弁
大阪の町に合ってる好きやねん
お揃いの袋でもらうお年玉

島根県 梅 みどり

亡姉の来ぬ初春噂して寒に入る
残された思い出きれいな詩となる
あら玉の命あらたな鏡ふく

島根県 松本文子

ぼけた振りしている老母を追い越せず
忘れたい過去にくすぶる噴火口
耐えねばと思う兎の眼も赤い

島根県 岸本輝水

カラカラの道に戸惑う初もうで
初春や家計簿へ念をおし
秒針がやたらと急ぐ年のくれ

島根県 松本はるみ

束の間のキッスみていた戻り寒
ねっとりした男が聖書売りにくる
日当りの縁で仏具の磨きもの

出雲市 石倉美佐子

大望を鰐の背中に懸けて跳ぶ
あと一歩正直者が馬鹿をみる
遠い日の別れの雪は胸に降る

出雲市 板垣夢酔

宿の下駄火遊びしたい音で鳴る
旅人になる日の駅は他人めく
げんこつで物言う父はもう居ない

米子市 光井玲子

晴着きて今日のわたしは落着かぬ

ふたりして同じ願いの鈴鳴らす
堪忍袋つくろいながら生きてきた

米子市 金山夕子

つかの間の晴れ間にピアノよく響く
泣き顔を月に預ける冬のバラ
紅蜀葵中途半端な風はない

大阪市 中西兼治郎

富士山も火をふく前科もつており
運のいい奴だと努力口にせず
謝近火御見舞だけのピラですみ

大阪市 古川美津枝

金余り死角をねらう目なし帽
迂余曲折赤い財布を持ってみる
趣味嗜好程よく合っている他人

大阪市 北山悟郎

黒字国質素を死語にしてしまう
三ヶ日しまりの抜けた顔ばかり
裏切られ薬にして又裏切られ

大阪市 町田達子

ふと思う街の孤独の過しかた
雑念をシャットアウトへ除夜の鐘
野うさぎも白兎も虹の橋渡る

静岡市 渥美弧秀

忌が明けて姉の姿はもう見えず
形身わけ亡姉の想いがまた募る

終章に近く夫婦の幾山河

静岡市 永倉 僕 川

内孫と外孫泣いて初笑い

幸せは祖父母交えて祝う屠蘇
茶の間から冗談も出る赤い顔

高知県 赤川 菊野

言論の自由か嫁の怖い言
檀山の特急便が突如来る
旅に出る今の自分を消したくて

高知県 中内 朱坊

南国の土佐一月に咲くレンゲ
暖冬に過剰野菜の値が狂い
前職の意識が邪魔なコップ酒

唐津市 筒井 朴竜

正月へ吾子の帰省の兎小屋
初簪映ゆ明神へ雪うさぎ
追い追われ烏兎忽々に五十路坂

唐津市 山口 高明

獄窓の月見は何時も暈かぶり
ストリップ裸恥じらう楽屋裏
蠅叩き持てば女房の鼻へ逃げ

唐津市 桑原 掬水

鉢かかえ日照追って春を待つ
ゴルフ場狭い日本だ気にかかる
お年玉貰うは権利やるは義務

七尾市 松高 秀峰

二度の職元課長が邪魔をする
足音を殺して二階へ上る母
先輩に一步譲って見直され

和歌山市 山川 克子

お互いに相手の出方待っていた
も一人の自分を忘れてはいかん
そんな事おまへん僕も泣きました

和歌山市 後藤 正子

書きかけの便りが渴く春の風邪
冬から春へ愛の言葉を溜めておく
生き方の一つをライバルからもらう

兵庫県 脇田 米朝

拗ねているそやかであんた好きやねん
負けて勝つ妻が持つてる押しボタン
前向きに考えますと放つとかれ

兵庫県 中田 白李

皿割った音は一枚だけでない
そのうちに空気に税金かけますよ
企みは抱かず球根買ってくる

兵庫県 藤後 実男

話好き友を一駅通過させ
山びこがもう聞こえない過疎を去り
薬包紙鶴になつて回復期

大阪市 板東 倫子

接点の無いまま続く美辞麗句
幼な顔残し背丈は親を越え
耳年増ばかり住んでる兎小屋

大阪市 塩田 新一郎

円相場年金暮しもしやしやり出る
肉食った舌が動物愛護論

破顔一笑こんな言葉も知ってるが

岡山県 二宗 吟平

髪的事若いとはめて皺言わず
吟詠を習いオームになりきれず
相部屋の一夜の鍵を信じ合い

岡山県 岩道 博友

初詣で帰りは孫が主導権
カラオケの順番損したように言う
酒一本配達頼んで犬を連れ

鳥取県 林 露杖

御来光火袋閉じて三原山
師の軸をかけて迎える新春の床
まだ消せぬ火を抱く七十一の新春

米子市 茂理 高代

静かです一針ごとのざんげろく
澄んだ目でみつめられたら狂えない
何不足あるのか犬が走らない

神戸市 山片 紀雄

黙って腹のふくれる独り言

帽子着て出かける女は翺ぶ構え
人並みと言われて自分を殺してる

羽曳野市 中村 優

袴を脱げば得意の演歌節
善悪の悪買うて出た父の鞭
泣く涙持っていますぞ中国孤児の記事

姫路市 大原 葉香

線路保守もうつるはしの歌聞けぬ
ファッションの帽子女にある不遜
黒髪が豊かで不倫考える

羽咋市 三宅 ろ亭

犬猿の相手に杯を差すときも
灯油焚け焚け円高のメリットぞ
不夜城の温泉街に雪しきり

岡山市 行吉 照路

勝ち戦さてこれからの手をこまね
手ごたえは腹に納めてはけておく
水平線セールス鷗になりたい日

倉吉市 淡路 ゆり子

春だ春だと庭の雀がさわぎ出す
書く程に読む程に生き恥さらす
老松に亡父を重ねて悔いつのる

奈良県 宮川 古都路

名人芸仕事の仕事教えてる
板たたみ作務の朝は寒に入り

百ハツ神も仏も眠らせず

寝屋川市

堀江光子

出雲市 竹治 ちかし

クリスマス歯医者 of 帰りにキーキ買う

父の搗く餅有難し里帰り

助六の目許涼しいちぎれ風

鳥取県

松下 たつみ

境界でもめて隣が遠くなり
頭数だけは標準家庭です
子供部屋与えて居間の隙間風

弘前市 斉藤 荔

打ち返す波は持たないお人好し

外灯の明りのとこだけ雪が降り

ビー玉の光と妥協は許されぬ

貝塚市

行天 千代

余る程有るのに金貨並ばせて

福笑い飽きて蛸やきに寄つて来る

初こよみ今年も呆けずに過したい

豊中市

上田 登志実

垣根ごし隣に貰うた梅の花

春浅し蓄はちゃんと自衛する

玄関に女の靴が溢れてる

姫路市

丁坪 サワ子

待合室博学となる井の蛙

ダイエツト三日で崩れたお餅腹

胃腸薬のお世話になった三ヶ日

交野市

山本 テルミ

いつの日も騙されるのは小指だけ

山茶花の首をかしげてこぼれけり

改まる年へ仮面を脱ぎすてる

古釘に願ひあらたな初暦
明日からは早起き妻の寝正月
受験娘の笑える春よ早くこい

西宮市 瀬尾 六郎太

人の世や天の摂理が右左
執拗な雪雪雪の奥信濃
アメとムチ使い分けてぞ活かす道

倉吉市 渡辺 菩句

ふとんはかほか草ばかばかの春がある
絵かき唄うたつて兎描いちゃった
誰もおらぬここの地蔵になつてみる

大阪府 鍛原 千里

風花が舞えば故里唄になる
編針は貴方の愛に答えてる

大阪府 渡部 さと美

エリートの子無しを他人惜しむなり

偉い嫁さん親類じゅうが無口なり

姫路市 松浦輝月

茶柱を信じて受験の子を送る

知っていて知らぬふりする粋な人

姫路市 釣遊光

蟹喰いに来いよと誘う友が無い

粋な音締問えば喜寿のお爺さん

出雲市 入澤壽恵

あり余る自由に生きて淋しがり

雪化粧してこそ秀峰晴れ姿

出雲市 小白金房子

暴落の野菜手古摺る市場出し

四十頭の牛を飼う

難産の子牛生ませて冬の汗

出雲市 小玉満江

ユリカモメどうして風に逆らうの

忘年会輪からはずれた泣上戸

富田林市 片岡智恵子

くすぶった言い訳聞いている火種

賽銭ばこ外国コイン増えてくる

茨木市 井上森生

一年の計あたためている露天風呂

石も木も語ろうとせぬ冬の庭

島根県 藤原鈴江

パントマイム見せる仔猫のシルエット

輪の中で話題の隅にいるひとり

高槻市 川島諷云児

言い勝ってみても詮ない夫婦箸

足代の値上げが老いを閉じこめる

豊中市 奥田満女

愛嬌がよくてお悔み苦手です

啓蟄へあわてた虫が風邪を引き

吹田市 茂見よ志子

せめて初春背筋伸ばして歩を運ぶ

湧水を羨望してる河童あり

鳥取県 さえきやえ

NTTのくじがはずれてホッとする

のこり火を抱いて兎はジャンプする

岡山県 山本玉恵

生きてゆく運命に恋の風車

良妻賢母で通した姑のオシメ縫う

川西市 松本ただし

タバコの灰延びて他愛ない話

息抜いた隙流れ矢に狙われる

鳥取県 羽津川公乃

雪月花雪の白さを信じよう

雪しんしん独り住まいに春遠し

富田林市 新開千代子

一等で走って来たのは隣の子

逃げる事出来ない老いを趣味へ逃げ

自選集

市川鈴魚

訣れの絵鳴咽の中に画いた亡妻
軽いジョークで他人は通げる道がある
借りた金返せば猫も髭がある
花の希いと冬北風は喋らない
逢うて来たおごり車窓は目をつむり

本田恵二朗

亀を見ると兎無性に眠くなり
月を見ると兎翔んでみたくなり
もち米を背負って兎月へ飛び
もち搗きの支度忙しいママ兎
月よりの便りおもちが搗けました

工藤甲吉

減税が増税となる阿呆らしさ
すってんてんすっからかんに冬は来ぬ

織女から年に一度の年賀状
十二月八日生まれで生き残り
ふところにもぐり込んでるこすい奴

大矢十郎

ライバルの汚職がバレた朝の風
病人へ薬局効かぬ薬なし
原因はテレビ少女の死が続く
こことこここ言いに擦す実印
金の成る教訓金貸しの事務所

野村太茂津

兎跳びまだまだいける当り年
やるっきやない私の好きな流行語
理性ない私語は聞かない父の耳
愛籠めて父は毒舌吐き通す
兎跳び稽古つづけて二百回

長野文庫

パソコンを買えと子供の知恵を借る

子供には子供の知恵があるものよ

日給制休め休めと仕事なし

労基法日給制は辛いこと

労資法辛し働かしてくれず

山内静水

元旦の顔たしかめる初鏡

賀状までワープロになりにけり

なんぼうになつても裏布はおんないろ

極楽はここに夫婦で坐すみ堂

去る者は追わぬ裏口開けてある

藤井明朗

喜寿米寿祝う目出たい新春の句座

マイク持つ音痴の歌へアンコール

仕事まだゆるめぬ決意初詣

旧人類負けては居れぬ職を持ち

風止んで雪降りそうな二人酒

水粉千翁

おめでたくへつろう妻にしてやられ

こいつがと思う金婚へ指を折り

おかめとも言われかぼうてくれる芸
茶をついでやってまだまだ照れる癖
めがね拭く前向きの手をつなぎつつ

高橋操子

反対は心に止めてないデイト

もう早う嫁つてしまいと月に言う

みつを吸う蜂にも花の好ききらい

忘れずに帰つておいでと鮭の稚魚

生きがいを感じ多忙な日々の喜寿

八木千代

毬をかくまうほど大空は甘くない

書き直すページもなく雪の章

糠床もちよつとやすんでいる真冬

春の絵の下絵は箱に溜めてある

春の扉に油を差しておこうかな

小出智子

四面楚歌湯呑みに冷えた茶が少し

あまりに遠い道で途方に暮れている

貧すりや鈍する通してくれぬ改札機

北の風夫に言えぬこともあり

唯一の味方炬燵があたたかい

月原宵明

うだつ上らぬ男ワサビが鼻を抜け
素うどんの七味多目に雪もよい

遠吠えをするしか雑魚に術がない

悪友と別れる屋台星を賞め

強引と遠慮すき焼向いあう

金井文秋

ファミコン雑誌活字離れの児等が買ひ

人材は要るがいらぬ唯の人

詐欺商法釣りの感覚しか持たず

親切の受けっぱなしにある重荷

老いなのか睡魔とても弱くなる

尼 緑之助

寒の雨背筋に冷えが這い上がる

騒音は一億二千の急成長

乱世の序曲にニュースもつれ合う

悠久のテノール波打つ大黄河

宗達が見せる豪快足の裏

藤村 女

平凡という仕合わせを忘れまい

つりしのぶ人の哀れに時雨さく

シャネル五番女の夢を転がせる

風采はゼロでも晩成を母信じ

巢立つ娘に贈る言葉をよっている

正本水客

すれすれに流れを歩く冬の径

北風の笑顔に会うてうろたえる

口下手の約束をして雨になる

叩き台にされて愈々無口なり

負けたなと嬉しい父になっている

黒川紫香

窓を拭くビルの高さよ昼の月

花街を真面目な顔で昼歩く

外は春孫が誘いに来てくれる

便り来ぬ日の焦燥と寂しさと

かたくなに方向音痴が来る喫茶

橘高薫風

サッチャーとアキノの違いほど違い

六十をいくばく夢も裏返る

写経して二月彼岸の日の光（大覚寺）

寂庵の庵主の笑いと微笑仏

白頭巾白涎掛け雪仏

— 同人吟 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

藤井明朗

一時帰休 風が冷たい歳の市

野田素身郎

低成長時代となつて、不況円高が続く。一時帰休に現われている経済界の不況の波は限度に近い。世相を突いてそつなく表現力はさすがである。

別々の想いで食べる夫婦箸

西出楓楽

人生の喜怒哀楽を体験をして、一息つくとも年になつていた夫婦。老後の問題もきびしいものがある。これからも平坦にはゆけないと別々の想いもする。情感のにじみ得て共感、核心を突いてくるから外される

稲葉冬葉

あたりを構わず、得意気な人物がいる。結局人に嫌われて孤立になつて敬遠されるといふ、近年こうした人物が多い気がする。こころすべきことである。人情の機微をついてい

る。

新人類雄も負けずに化粧する

岩井本蔭棒

現代の風潮について見事である。平和日本の流行にしてはわびしく思ふ。男女同権が、男性を弱くする世相への一矢と見たい。

着道楽浮いた噂がつきまとい

高橋千万里

小銭を貯めた男女の人間模様をさりと詠いあげてうまい。そしてドラマが生れて男女の葛藤がみにくく、またはほえむ人生が展開するのである。平易ながら共感する句。

カタカナラッシュ旧人類を襲います

石川侃流洞

カタカナ語の流行は年々多くなつてきて、読みにくいものがある。流行語まじしかり。これも時代の波とはいへ、旧人類はまごつく事が多い。老いも勉強時代となる世相をうたいあげて的を得て好きな句である。

火の国で火を噴く歴史繰り返し

石垣花子

島国日本の宿命を負つている。近くは三原山の噴火、また地震国でもある。平和に酔つてばかりはおれない現実を注視したい。

巡る四季素直に妥協して生きる

江城修史

修練を積んだ人柄をしのばれる。何事も円満に、人の意見は素直に参考にする位な太腹は持ちたいもの。一方に偏した妥協はどう

かと思われるが、助け合いの人生である以上ひとりよがりにはゆるされない。「素直に」が焦点。リズムもよく、見習うところ人生訓でもある。

不覚になる程酔うたら悪女かな

吉岡きみえ

この頃の女性にびつたり、ワイン、ビール党の多くなつた、強き女性の出現に男性もたじたとする。女性の進出もめざましい現代である。何事も程々がよく女性の酔う姿もなまめかしいが反面、狂女にも見えるかも。下五「悪女かな」が焦点で、世相諷刺してひかれる句。

木枯しに風の姿を見てしまふ

北勝美

秋、冬の風は強かさをもっている。風の姿を見るは、表現のうまさにも感服。情景も鮮烈で、風も変化するきびしさとぬくもり詩情味もあつて好きである。

真実味ある句として推したい。

金婚の舟で漕ぎ出す海がある

錦織文子

黙んまりの冬木立から抜けてくる

春城年代

金の要る話へ聞かす咳払い

中川滋雀

耳鳴りがとんとん昔語りかけ

堀江正朗

気がつけば優越感が宙に浮き

久家代仕男

つながれてないで老いる夫婦岩

田中正坊

風止むと權がだんだん重くなる

田中亚弥

川柳太平記

(106)

川柳の群像

松尾馬奮

東野大八

「明治十九年五月十五日三戸町に生る。柳

号馬奮・本名松尾庄次郎・昭和三十六年青森県文化賞受賞・昭和三十七年三戸町表彰条例による善行表彰授与・昭和三十八年青森県表彰規則による褒賞授与・本吟社創立四十年を記念して各地柳友の協賛を得て建之・昭和四十年六月二十日・三戸川柳吟社」

これは青森県三戸町城山公園に建立された松尾馬奮の句碑の碑文である。句は

叱つては見たが子供は俺に似る 馬奮
花崗岩の頑丈な二重の台石の上の、長方型の黒石に、奔放な毛筆の筆致そのままに小気味よく彫られている。この句は楳元紋太が、馬奮作品五百句を清書したなかから選ばれた

ものである。

この句碑除幕式には、川上三太郎、白石朝太郎はじめ、みちのくの柳人多数に、馬奮をめぐる地方各界有志が参加し、当日開かれた記念句会と併せ盛大を極めたとする。

馬奮という変った柳号の由来は、路傍に落ちてゐる馬糞でさえ世のため人のために役になっている。自分も無力ながら大いに発奮してわが郷土の人たちや社会のためになることを誓ったということからきたものだそう。

彼は三戸小学校を出ると、地元の三戸銀行に勤め、精励格闘して十年後に同行支配人となり、同行が青森銀行に吸収合併後の昭和21年に退職。直ちに三戸信用組合の再建に尽力

し、同組合専務に就任したのが昭和30年3月で晩年まで地元金融業界のため努力した。

川柳は明治44年東奥日報柳壇投句にはじまり、大正15年、長谷川霜鳥等と三戸川柳社を結成。「みちのく」の小林不浪人等の協力を得て三戸川柳社の礎石を築いた。昭和29年青森川柳社に加盟。不浪人、後藤蝶五郎亡きあと、みちのく川柳界に尽粹し大久保彦左の役割で東北柳界を刺戟、中央柳界からも「陸奥の快翁馬奮さま」として親しまれた。

この「陸奥の快翁」なる呼称の名付親は大山竹二で、竹二句集には「陸奥の快翁」と題する連作二十五句がある。昭和36年8月20日馬奮さま喜寿祝賀会には、竹二はあや子夫人と心楽しく参加したもの、その喜びのあまり祝辞の演壇で絶句した程である。

「青森の奥昭二様と主人は同年輩でもあり兄弟の交りでありましたように、馬奮さまとのまじわりは、馬奮様からは父としての愛情でありました。私たちからは馬奮様は、子としての交りで、肉親以上のつながりでした」(「馬奮句集」後記「肉親のまじわり」大山あや子記)

奥昭二という青森のこの川柳人は、いわば川柳に限らず馬奮さまの秘書的役割を演じた

人物らしく、竹二の作品に傾倒していたが、竹二の没後、まだ竹二が袖も通さぬ英国製の生地で作った洋服を、あや子夫人は形見に昭二に贈っている。「馬奮句集」にその昭二の書いた思い出の記がある。

「昔々、馬奮さまが複写紙をつかって句会案内を書いた時代があった。ある時「ホルモン」という題を知らせるのに、一流の速写で書いたので受取った方は「なんもん」と読み違い、一生けん命「難問題」と取組んだ一件が笑い話となって残っている。

翁の字は非常に乱暴で粗末に見える時もあるが、やはり文字も句も釣り合って一流だワイと認めざるを得ない。不肖の後輩どもは句会の席で「馬奮さまの句は近頃非常に進歩してきた」などと言ったものだが、いま思うと思えば上りも甚だしく、すべて我々の手の届かぬ位置にいたことを思い知らされ、じくじするものがあるのである。(以下略)

馬奮句集はA4判、青地木綿張りで麻糸つづり和紙に約百句を取め、版画に写真版が十頁ついているが、これらは句碑建立と、喜寿祝いのスナップである。句は一頁一句の毛筆がき複写である。昭和四十二年九月の出版である。昭和四十一年九月に句集「命の値だん」

を出しているから、これで二冊目の句集となる。この二冊目の句集は「馬奮句集泥足」となっており編集は坂本雨山。

馬奮は句碑を建立した四十年六月の三月後の同年九月十九日下顎癌で死去。享年七九。三戸町の長栄寺に葬る。閑嘗皎柳馬奮居士。

○アゴガンにされてポバイの馬奮さま
この句は「川柳ねぶた」誌に載せられた雨山の追悼句である。

「私が竹二さん(昭和37年11月没・享年54)が亡くなられた事をお知らせした時のお手紙にも馬奮さまはとても悲しんで、飛んで行きたい思いを述べられ、その後、墓参りに青森から来神された程の御親交があった。馬奮さまを陸奥の快翁と名付けた名付親は何を隠そう竹二さんで、そのことを大変誇りに思っておられた事である。(中略)

馬奮さまは働いては、地元信用組合を復興し、その長となり川柳では青森県の文化賞を与えられ、町内にあっては、身をもって善行運動に励まれる等々、全く精力的な、東北人の典型を見る思いであった。

眼をしばつかせて語られる一語一語が、川柳を思ふ一途な話であり、その円頭白髪と共に、今こうして筆を執っている眼の前に、

うつつとしてちたつくほど印象的な方であった。特に喜寿のお祝い以後は、二度も拙宅に立寄られるほど可愛がられたので、尚更に慕情となるのである。作品に見る馬奮さまも良寛さまの様に淡々として、技巧よりも真情で貫く方であったから、名吟で埋まるようなタイプとは違うが、亡くなる寸前まで、作り書く、実行型であった。

○こんどは忘れまいポストまで掴み 馬奮
○大漁旗いよいよ岸が近くなり
等には特に好きな作品である。

馬奮さまとは、敬称の意で誰言うことなく青森地方ではこう呼ばれた。最後には句碑まで建てて貰われて、子福者であったので、数え切れぬほどのお孫さんに、わいわい言われてこの世を去られた、全く善根のお蔭とも言えよう。もっともそのコースはいつも平坦であったわけではなく、北海道で小商人になり苦労された時代もあり、馬奮手帖その他にあるメモも庶民精神そのもので、それが川柳に結びつけた因縁だと思ふ。「ふあうすと」湯川銀界悼文

★今回は「山路閑古」

誹風柳多留廿六篇研究 (三十丁)

502 鳥籠のたかハ二羽ぎり跡かたへ

本多『川柳吉原志』の頭註に、「川柳に高尾を二代切りとするは如何たる訳にや」とある。

よくわからない句だが、駄労解を試みると十一代高尾のうち、大名に身請され、後世迄その名妓振りを喧伝されるのは、仙台、榊原両高尾の外なく、後にも先にもこの二人だけである、との意となろう。

石田成『賛。駄労解に非ずご名解とします。八木『高尾が何代いたか、というような考証は極めて困難なことである。余程細見類を揃えないと実情がつかめない。

南『賛。事実はとにかく、川柳に登場する高尾太夫は二人限りで名跡が絶えたということ。多田『賛。ご名解。

503 罪てなひ虫を花よめころす也

本多『「罪でない虫」は、

堪忍の虫をころすハ罪でなしの句に言う「堪忍の虫」であろう。主題句は姑の嫁いびりを詠んだ句である。

句意は、嫁いで間もない花嫁が、姑の嫁いびりに対して、一にも堪忍、二にも堪忍と、姑にさからわずじつと怒りを押し殺して堪えている。

美しく堪忍袋嫁はぬひ

九七 40

本多正範・石田成佳・大屋六郎
八木敬一・鈴木 黄・石田晋一
南 得二・小野真孝・多田 光
故岡田 甫

破るなよ堪忍袋知恵袋

二二四 86

石田晋『「虫を殺す」の成語あり。意味は怒りを押える、腹立ちをがまんする、である。多田『賛。

504 たたかれて痛くないとて悲しかり

本多『曾参の故事を詠んだ句であろう。

曾参は、父の杖に打たれながら、その老いて力の衰えたのを嘆いたという。

この孝の杖については、孔子から、もし父の杖に服し、打ち殺されたなら父の悪名を立てる事になる故、これ以上の不孝はないときつく戒められた。

多田『曾参でも一般的でもよいと思ってい

したが……。

505 子を持てしとハおそひおもひ付

本多「子を持てやうく見へる山と海」(四七三五)で、いま子を持つ親となつて、わが子に手こずり、ようやく親の心労がわかる。それならもつと親の言うことを聞いておけばよかったなどと思ひ付く。

子を持つてやうく親のはかがしれ

拾十 26

子のだだに亡きたらちねの恩を知り

八九 36

石田晋「賛」

親の恩園がぬけてからかみしめる

三六 38

鈴木「賛」

孝くのしたい時分におやハなし

二二 23

多田「賛」

506 いつちいい事といまさかなとを出し

本多「いまさか」は今坂餅の略。「餡を包んだ小判形腰高形の餅で、紅白にわけ、白餅には赤小豆澁餡、紅餅には白練餡を包む」(「広辞苑」とあり、七五三の贈答用に用いら

れた。

句意は、「今日は誠にもつてめでたい吉事、どうぞ召し上つて下さい」と客に今坂餅などを出してもてなしたというのである。七五三に用いたと言うが、七五三の祝いとするだけの証がないので、何かの吉事・祝事とだけしておく。

代みやくが来たでいまさか引こませ

一一 15

いまさかの赤イをえつてしかられる

安四智 9

八木「縁談か」

石田晋「縁談説賛」

多田「賛」今でも祝い事の程度やお客の種類によつて出すものを加減する。

507 そんならしのび爪でもに振こまり

本多「しのび爪」は忍駒からの造語。忍駒とは、「さみせんをしのび」までひいている」(洒落本「総籬」とあるように、三味線の音調を落して弾くための特殊な駒。

句意は、嫁に琴を所望したが、なんととしても首をタテに振らない。「それでは忍爪でよいから是非」と無理強い。三味線なら忍駒もあるが、琴に無縁な忍爪を持ち出され、ます

ます嫁が困惑するとの意。

南「賛」

忍びづめでもいいハなと嫁をせめ

安五義 1

多田「賛」姑に対する遠慮からであらうか。

508 白むくのすみ末世迄落ぬ也

本多「赤穂義士の討入りに炭部屋へかくれた吉良上野介を詠んだ句」。

白むくも黒むくになる最後也

三七 2

白むくを着てすみつこにかくれてる

二二 23

句意は、討入りにいかに気も動転したとは言え、恥も外聞もなく炭部屋へかくれ、一命を助からんとのみするなど、吉良の往生際の悪さ、その汚点はすえの世迄拭われない。との吉良への嘲笑である。

八木「賛」白むくの寝巻姿で炭小屋へかくれたという。白むくに炭の汚れがつく、それが

取れない。吉良の汚名も全くそのように末世まで落ちないのである。

多田「賛」同じような句ですが、

真白な夜に真黒な所へ逃ケ

五四 20

水煙砂

黒川紫香選

藤井寺市 赤木和子

みかん二つ分のおねしよを陽に当てる

孵化させる気で抱いている還らない日

辻褄を合わせて淋しかり小指

緞帳の上がることなき夢芝居

ぐれてやろうか濁り水に身を沈め

堺市 桜沢あかり

失せ物はこっくりさんの知らぬこと

先生の気合いで咲いたバラ一つ

陽溜りに座れば解ける縄れ糸

切り捨てて末尾に欲のかげらなど

白鳥に憧れているトウシューズ

富山市 舟渡杏花

六道の辻で東西迷う足

白壁へへのへのもへを書く謀叛

落日を招く扇のギンギラギン

血統書きき耳などは立てぬ猫

転がり切れぬ坂へかすかに百八つ

八尾市 高杉千歩

ピエロ描くジントのひびき近くなる

ゆびきりげんまん言い出しつべがまだこない

捨台詞しつかと聞いた自動ドア

せめて息子の足引つ張らぬように生き

あさき眠りあれば亡母の手花手桶

熊本市 永田俊子

葉牡丹が互い違いに抱く禍福

欲のない男で本音ばかり言う

手袋は落ちてもつかむ形をし

生真面目でいつも風呂しき持ち歩く

廻りつつ野心をみがくコマの芯

熊本市 宇野昭代

ミステリー好きな女の長い爪

泣き声に負けてチャンネル切りかえる

お隣へ行く気軽さでバスポート

一族が揃うと祖父の唄が出る

遮断機に焦る心を見透かされ

熊本県 大川 幸子

影消えた時から急ぎ足になる
春の足音ルンルン気分をやってくる
ばらの意地枯れてもトゲは朽ちさせぬ
どこまでが程ほどなのか酔いつぶれ
おしゃべりの時間は得意おちこぼれ

名古屋市 藤井 高子

風甘し少女の髪にそよぐ日は
すこしずれた時計を好む待ち合せ
六法全書頭上にかかげ冷えている
実年となつて尻尾を意識する
旅先でふらふら揺れるループタイ

佐賀県 寺中 三枝子

エンゼルに貰うプランに花が咲く
微に細に噂を運ぶ白い風
どうせ濡れ衣あなた道草してみない
物心両面間に合せます愛します
非を隠す男の淋し高笑い

久留米市 鶴久 百万両

人間不信春の穂高が俺を招ぶ
北へ帰る鶴に訣れの詩をつづる
銀嶺を越えると雪おんなに逢える
サラブレットのような候補が風に乗る
破魔矢研ぐ野心を風に見抜かれる

今治市 野村 京子

喪があけて女の部屋の赤いバラ

さいはての駅へ無口の二人降り
泣けばすぐ許してくれる父の墓
あのあたり母が住んでる流れ星
恋ひとつ女が途中下車をする

岡山県 黒住 美穂子

家族皆思い思いの初詣
さわやかな家族よく鳴る母の鈴
母の胸家族みんなの港です
人生の節目に揺れる赤い薔薇
鳩時計愛の行方を知っていた

竹原市 信本 博子

初雪や燃える心にすぐとける
恋しさに行ったり来たり星月夜
好きだからいつも最後に妥協する
寒椿熱い想いも言えぬまま
今日は又何見て何を聞くだろう

長岡京市 木本 如洲

しあわせは働く妻のまろい膝
仕事場をきれいに拭いて大晦日
結論を胸に持つてる寒い椅子
陸橋は浮世の距離を持つている
毒舌の方がここに傷がない

高槻市 笠嶋 恵美子

寒行の一路に椿紅を増す
眠りから醒めれば春の陽の匂い
春うらら眠り足りない昼の月

張りつめた空気知らぐ巫女の舞
ほとほと流れに添うて老母の杖

高槻市

河瀬芳子

かわらけのようなあなたの頭蓋骨
独り寝の気楽さ本を積み上げる

ストーリーの真ん中に亡夫座らせる
好きなだけ泣いたら鱗落ちていた

ラーメン屋のマッチで灯すお線香

羽曳野市

吉川寿美

掌にのせた初春を病夫と語り合う
手のうちの駒は病夫に見せられぬ

不覚にも枕ぬらした朝の夢
いたつきへ女ひとりの力瘤

許すことばかりになれた坐りだこ

西宮市

紀市郁栄

看護婦の声から病棟動きだす
妻でないひとがからだを拭いてくれ

あの人もこの人も病床で読む賀状
手術ひと月髭を剃り歯をみがき

二十一時消灯のチャイムは鳴らず

尼崎市

森安夢之助

待ったかと飛び込んで来た春の風
蟹鍋を食べる時だけ黙っている

競争率どうあろうとも子を信じ
鰯を買う羞らいはない鰯好き

頑張れば何れ天国へ着くだろう

不特定多数へエイズ色をなす
傷口の深さを歌う影法師

繕った嘘が命を取りに来る
燃り戻す空気が化粧する

マナ板の音が余裕を忍ばせる

和歌山市

桜井千秀

満開の梅へ晩鐘余韻引く
ままならぬ思いはペン画の線に埋め

透かし絵のどこかに私の影がある
ぶっちゃけた話に情け欠けている

再評価視点の位置は斜めから

西宮市

松本一郎

障子張り簾笥の位置も変えて初春
電話一つかからぬ静と寂の日よ

幸せは今朝も厨で米を研ぐ
二日酔反省ネオン灯るまで

初恋のひとほのぼのと古希となる

吹田市

井上照子

花にふれ愛確かめる朝の庭
花占い来ないと出ても彼を待つ

闘いの宣誓ひびく青い空
口紅をひいてにこっと写す顔

父の目に叶った夫で平和な日

袖にした彼が輸血の血をくれる

鳥取県

太田幸枝

尼崎市 児玉歌子

点滴と母の涙が落ちている
人恋うて大正琴に指が向き
火のくるま背負い自家用走ります

いわき市 新井 泰子

方言を使いこなせずよそ者で
叱咤した後の寝言に耳をたて
酒が飲めたら流してみたいことがある
マンガ読む作家志望の新人類

大阪市 上田 柳影

洗濯板の様に瘦せてる友の背を洗う
雑巾を洗うバケツになりさがる
その通り描けば怒られそうな顔
夢抱いて降りたは春の上野駅

守口市 森川 まさお

正月の公衆便所で待たされる
初夢で孫とブランコ乗っている
はや三日仕事のつづき思いだす
初出勤の車に道をゆずられる

東予市 小山 悠泉

夕焼へピッチを上げるコンバイン
後指が恐い杜宅に住み慣れる
裏話聞かされ腹の立つ人事
間違いの電話他人の音で切れ

尼崎市 山田 保蔵

正月に帰れと義姉がひらかなで
定年が余裕ないまま攻めてくる

気が弱く空気のような妻と居る
英会話どなられました青い目に

竹原市 石原 淑子

虹追うた家出のインコ寒からう
ストレートに言えない質の苦労性
タンポポと丸い風に逢いました
好きなのよ切れたまんまの糸電話

熊本市 黒田 緑

紅梅の寒振り切って孤高たり
正月の神に背いてまた馬齢
合板の天井何も語らない
生活の染みた茶碗の割れた音

和歌山市 田中 輝子

話し好きな人と夕日を見て帰る
悪友の一人に肩を叩かれる
裁かれてからのヒールは低い目に
口紅の薄さ失意の日が続く

茨木市 堀 良江

走っても走っても逃げられぬ夢
どこからとなく寄ってくる街の風
初芝居今年はレビュー見えています
おみやげの地酒すすめて旅話

京都市 松川 芳子

試着室うぬぼれ鏡置いてある
来し方の私の影が薄すぎて
それなりの言葉を選んで友見舞う

一筋を違えてからの迷い路

尼崎市 野瀬昌子

赤い靴穿いてちよっぴりリッチです

ひたすらに待ちつづけてる母の背

雪故に捨てた故郷で初滑り

だからとてすぐに別れはいわないで

京都府 木村たけし

腰かける落葉の音に冬がある

働いた父に玄関の灯が温い

秋灯や坐り直して手紙書く

二階から降りると噂逃げてゆく

尼崎市 鈴木良征

フィナーレを飾ることなき馬の脚

ルンペンが糖尿病をやむ平和

飽食の猫が鰯をもて余す

羽衣を盗られて帰る旅費がない

尼崎市 丹下玉子

春風に情けをもらう喪の女

卯の年だ私も跳んではねましよう

絵ハガキにはのかな愛を匂わせる

午後からはパートに出かける姑である

倉敷市 田辺灸六

自分史の歳時記秋の彩深め

杓子定規な男が目盛り読んでいる

盃に酌む友情がこぼれそう

また拝む数珠を温めて喪の女

唐津市 相葉あき

山好きの亡夫が登った山を見る

水面に出れば相手が居なくなり

磨いても夫の行く先言わぬ靴

芸の無い男で箸を離さない

豊中市 小林一夫

病院のスリッパ薄し初氷

不器用に生きて花の絵描いている

玄関に花あり花のあたたかさ

玄関の花に気付かぬ客と座し

滋賀県 安田志津

気の楽な黒子ですつと居たかった

乗り継ぎの切符一人で買う寒さ

器用より努力の汗をほめてやり

冬日和手袋なしの寒の入り

寝屋川市 宮崎菜月

冬の陽は石と石の間をくぐる

三度目は決意してます糸切歯

愛された日もあるドレスみつめてる

憎しみを越えて平和の白い薔薇

鳥取県 土橋はるお

もらい泣きしたハンカチを洗っている

立ち話の袋の底が抜けている

気がつけば亡父のルールに乗っている

約束がチヨコチヨコダブル花時計

岡山県 矢内寿恵子

まだ青いりんごを街の灯におくる
万燈の中の一灯回向する

波風を立てぬ暮しの知恵比べ

叶わないまでも背伸びの旗を振る

熊本県 高野 宵草

宇宙まで私のものよビル背伸び

元朝は基本どおり歯をみがく

裾模様ぞろぞろホテルも吉日よ

足組んだヒールに紫煙からみつき

西宮市 秋 元 てる

津軽線ひと駅毎に海の色

じつくりと聞けば薬になる話

待針をちよっとおさえて電話口

肩の荷を下すつもりで金を出す

大阪市 山 田 妙 子

年明けて老眼鏡の話など

恩師逝く雪しんと降る中を

一ページめくると吉が続いてる

初春や夢とくじには乗ってみる

兵庫県 東 浦 砥 代

いつわりの笑顔ばかりを持ち歩く

逢いに出る指には弱い化粧箱

鏡から追えども鬼が出てゆかぬ

願いあるときだけ坐る仏間の灯

旭川市 朝 倉 大 柏

栄光の汗は拭おうともしない

遮断機の向うに深い秋の空

ふるさとが余り静かで寝つかれず

守口市 結 城 君 子

一本の虫歯に師走狂わされ

初夢の電話がつづく老姉妹

新年の歩幅が違う孫の決意

石段を見上げたまままで待っている

米子市 門 脇 晶 子

雪の戸のとける日をまつ白うさぎ

私の肩に一羽の鳩がいる

心のすみに母の手紙がおいてある

日のおたる縁側にいた子猫たち

米子市 川 上 より子

肩を組む雪の連山ひと許す

わたくしの隣のはっ葉が炎えている

わら灰でほっかりと焼くいもの恋

おごそかで姑の陣地に入り難し

岡山市 千 原 理 恵

訣れとは悲しきものよ冬暦

単身赴任鍵よお前もさみしいか

小休止少し濃い目の茶を入れる

子宝がささがる報せ初春うれし

大洲市 横 田 放 人

泥つきにこだわって老母芋を買う
みんなみな味方の顔の祝い客

いびきまで夫唱婦随で今日終える
背をしゃんと伸ばして迎う初日の出

尼崎市 的場 十四郎

紫の帛紗に包む重い義理

あれからは一つの影がつきまとい

睨めっこ向い合ったら孫に負け

一人寝の寒さになれて月を見る

佐賀市 古川 一徳

愛を積む母にへだてのない祈り

ジキルとハイド終着駅で目を覚ます

実年の峠で詩のシミが増え

愛情の拳骨父に死語となる

貝塚市 池田 寿美子

折々に僻地の一筆暖かく

水仙の花心にふれて独り生き

三番街若い気持を取り戻す

おもいつき裏にメモする箸袋

尼崎市 佐藤 美代子

行間へジョークも入れて友のふで

人並みに門を構えてすきま風

ドヤ街へ田園調布からハガキ

借金とり閉めだすドアも出来ました

兵庫県 奥野 テル

新鮮な野菜山辺の無人売り

中年の恋むらさきの花暦

涙もうい鬼が節分嫁に行く

母さんの匂いが温い絹小袖

広島県 流 奈美子

亡き父母の在す仏間の温かさ

わんぱくが来てから二階よく揺らぎ

そえ寝してママもたっぷり午睡とり

土が好きやがては帰る終の宿

米子市 小村 てい子

二つ三つ軽い嘘から出た本音

吊橋やはだしに炎の月がさす

ユラユラと六十年の縄梯子

コトコトと風はわたしを眠らせぬ

広島県 田村 新造

心電図見せられ医者におどかされ

隠しごとした日は妻の目が眩し

鍋焼きを呼びとめている雪もよい

岡山県 清水 悠貴女

おしゃべりな帽子が冬を連れてくる

安らぎの樹がありそつと脱ぐ仮面

親と子が歩幅を合す日の安堵

竹原市 岩本 笑子

ちぎり絵の小さき世界へ旅立ちぬ

生き延びたクモが部屋の主になる

太陽はいじわる雪が解けてゆく

大阪市 亀井 円女

そして春薄い紅ひく六十五

御時世か可愛い悪女が持てるらし

餌付した日から雀も私の子

大阪市 稲本 凡子

血統書残して犬が出する

眼鏡かけると仕事がしなくなり

お返しに困る隣の大家族

堺市 宮本 かりん

寝不足の解消をする美容院

風船が割れて罵声が飛んで出る

粗品進呈ちらしに乗っていく私

岡山県 福原 悦子

だまし船何度も乗っている母で

仕事終え帽子をとれば父の顔

気安さはみかんで足りる女客

静岡市 三浦 つね

肩こると按摩の上手な孫が居る

必需品買ってから出る探し物

獅子舞の中の男は器量よし

福岡市 吉川 一郎

気まぐれな人気者の渦で溺れてる

B面に淋しがり屋の深い溝

逢えば又恋しさつのる駅に降り

尼崎市 吉永 伊三郎

蹟いた石も痛かる我が涙

晩酌のおいしいうちにたのんまず

気に入れば油断だらけの雄と雌

尼崎市 中澤 向西

背が高いだから大仏座ってる

新聞紙破るのが好き二つの児

千鳥足あれからどこへ行くのだろ

和歌山市 森

ひたすらに炎えていびつの壺ができ

銭湯へ行った娘の長いこと

冬の月無駄な焦りを論される

富田林市 大澤 三四子

若い娘が泳げば滴もピンク色

風止めば世間話が耳につき

隙間風吹いて消えそな心の灯

出雲市 久谷 まこと

磨いても俄仕込みの顔写る

子の寝顔明日の父を信じてる

吠えかかる犬も鎖の長さだけ

堺市 山本 半銭

父が逝く

葬列の傘音もなく雫する

葬儀屋の声遠く聞く白い花

家政婦も涙をくれる白い布

十和田市 阿部 進

古里の土から民話掘り起し

全力をださせる知恵を妻が持つ

ダスキんに慣れて雑巾しほれない

新発田市 上鈴木 春枝

手作りのおせち眺めただけの子等

目の位置にあわせトイレの暦貼る
お喋りの相手が欲しい置こたつ

河内長野市 大西文次

八つ当りしたりされたりしてるドア
珈琲館の前でとまった万歩計
運天にまかせその他は妻まかせ

京都市 森川春子

点滴に外の景色は目に入らず
孫とするトランプ本気になってくる
種明かししながら孫に手品見せ

高槻市 芦田静江

楼上に昇るときれいな夕茜
残る日を知るかのように老母語る
老いやよりリーダーシップにある驕り

(前月分) 吹田市 栗谷春子

自尊心自分がバラであることに
長電話挨拶だけで終りけり
糸切れた風船わたしの物忘れ

吹田市 栗谷春子

しゃべる間もあらずうどんであたたまり
銭太鼓穴道湖は又霧の中
留守ひとりそつとピアノにふれてみる

山口県 高崎雀声

団地内噂が回覧板と来る
元日の朝のやる気は三日まで

十二月晴れ着姿の雑誌来る

兵庫県 森脇和子

ありがとう又行くからねと糸電話
幸薄い母も女の薄化粧
七彩の手まりへ弾む母の詩

尼崎市 尾宮弘治

靴音でテレビドラマを切り換える
孫からの手紙がまさか英語とは
出稼ぎの土産ささやか無人駅

寝屋川市 太田藍子

ふんふんとほろ酔い気味の腕まくり
忙しい人で要件だけ電話
似顔絵に嫌いな部分が誇張され

唐津市 浜本ちよ

神さまは大みそからニューイヤー
玄関の郵便受へ百度踏む
三カ日庄助さんで居る夫

吹田市 西岡豊

ライバルの対角線でラッパ吹く
ドンヒャラの囃子にのつた有頂天
正論の吹矢トッパに吹きつける

静岡市 澤田きん

どの子にも聞かせた祖母の子守歌
追い越されちよつと妬心が顔に出る
まだ夢の中に出て来た小学校

寝屋川市 立床 晴風

釣銭を握る片手は世辞になれ
母の海慕うて島の娘海女を継ぐ
近所にも未だ恵まれず一軒屋

鳥取県 黒田 くに子

言い訳も器用になつて子がそむく
忙しい割には昼寝長すぎる
昏をうばった時からの夫婦

愛媛県 八塚 三五島

首輪の無い犬が車道をのし歩く
傷心へ特効薬の友がいる
煩惱を分析するとみんな欲

鳥取県 乾 隆風

憎めない嫁はんな下着洗つて
春一番夫婦喧嘩をもつて逃げ
ばた餅も初めの一つうまかつた

静岡市 久保 きぬ

敬礼をしたくなるよな髭をおき
ひと言が多くて味方一人消え
叱られて軽い嘘つくイヤリング

島根県 小田川 智重子

息子からコレクトコールで便りくる
南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏に吸いこまれ
小雪舞う亡父は雪好きだったかな

京都市 小林 英子

満ち足りた女一人の寒月夜
白熱の駅伝新春忘れそう
いつ来ても涙で終る一心寺

尼崎市 木下 義嗣

約束を守る坂道急ぐ下駄
夕暮れの別れを惜しむ宵の月
子宝に恵まれすぎて苦勞する

島根県 菅田 かつ子

せかせかと活けても春は訪れる
風向きが今朝はどうかと靴をはき
かるたとり笑いころげる老母がおり

大阪市 井上 白峰

悩みごと打ち明けられて悩まされ
ここだけの話が噂の風に乗る
プライドを捨て自由の独楽廻す

静岡市 杉山 やす

嬉しい日逃げないように雨戸しめ
掛けた筈鍵があいてて一人言
バス停へ駆け行く二人他人です

大阪市 今西 静子

寝返って寝返ってまだ恋未練
アベックのムードこわしたバトロール
履歴書の戻らず脈があるらしい

伊丹市 小熊 江美

門越えて犬に許しをこうている

失敗をする度胸が付いてくる
部屋の壁私のすべてを知っている

新潟県 高野不二

酒やめる決意二三日あとにする
一年の計は吞んでるうちに過ぎ
長期予報どうせ忘れてしまっただろ

唐津市 野田旭恒

金釘であつた親父の住所録
彼氏待つ伝言板に恋の歌

年忘れ忘れた顔がやって来る

大阪市 榊本落児

老人の不貞寝話題にされている
鬱の日は海の匂いを嗅ぎに行く
懐メロが好きな男で大正で

和歌山県 森三枝子

翔んでいる妻好調という吾が家
年の暮れなのに女の長電話
物干を一ぱいにして雨模様

呉市 蔵重成人

ムードには弱いネオンが帰り道
口惜しさを二階に連れて行く娘
失望の帽子廊下に捨ててある

熊本市 鶴田謹爾

猿真似がいよいよまい新人類
簡明のひとこと饒舌だまりこみ

追い越して急ぐ要なし八十路

鳥取県 鈴木ふみ子

独活の大木それなりに子を信じ
日曜日ごとに行事が重なつて
初詣で帰る列車に伯耆富士

鳥取県 田村きみ子

白酒を女三代のみ交す
ねこやなぎ春の小川で微笑する
ポケットの小銭で花の種を買う

鳥取県 津村八重子

切手にも父母の香しみた便り抱く
さわやかな空気ジョギング朝に行く
子沢山夫婦そろつてのんき者

豊中市 一瀬福一

判決に涙は遠くすてたあと
流行を転がして行く人の口
本心を包むオブラートが切れている

西宮市 上嶋ふさ子

お母さん頑張っているよと子の電話
帯めるキュツと結んだ母の愛
靴磨く今日も無事にと送り出す

岡山市 池田半仙

考えたあげく商品券にする
枯野ゆく枢佗しい絵ともなる
雪の夜遠くの家が灯が寂し

弘前市 真喜内 實

過疎の村らしく剥がれてゆくりんご

酒呑童子雪切切と増すばかり

子の愚痴をやんわり拾う母がいる

唐津市 浜本 治 幸

裏庭の松もいつしか雪女

いつになく安泰それが不安なり

女だと知らせる為のイヤリング

岡山県 後安 ふさえ

二人して見る今日からの蒼い空(孫結婚)

妻となる人を誘ってみかん狩

道祖神悲しい事故を見てしまい

ロスアンゼルス市 加藤 明 美

定退で急に色艶消えた父

小さな靴大きな夢へ第一歩

愛されて運命はロスの初春の海

泉南市 坂根 流水

残雪を踏んで七時の経拝す

鐘の音は十六谷にしみわたる

宝くじ夢はやっぱり夢でした

大阪府 宮下 とし

宅急便まだほろぬくい餅が着き

老犬も見上げて思考の歩道橋

生造りエラの動きに箸が出ず

鳥取県 乾 喜与志

昨日と同じ太陽今朝はおめでとう

七草粥を味わっている過疎の村

出稼ぎの父も戻っておめでとう

和歌山県 田中 隆 積

合理主義に徹する男の光る汗

信念を曲げずにアメリカで生き抜いた

喜劇など知らぬ日本の働きバチ

東大阪府 大平 太一郎

クリスマスイヴは徹夜で寝正月

誤報して雪にあわ食うお天気屋

三人の真ん中避けて先に逝き

大阪府 富岡 温子

雑踏を離れて墓の前に座し

孫の手もあてにしている煤払い

ストープへ換気の効いた安普請

静岡市 安本 孝平

洋服を野良着にかえて日が当る

場違いの席でオウムの独り言

いい話眼鏡の奥で目も笑う

唐津市 米倉 彩女

花嫁の笑顔見ぬまま宴終わり

ネクタイをはずしてから悪い酒

いくさ場へ靴をみがいて送り出し

羽曳野市 麻野 幽 玄

二上山にはさまれて出る初日の出

家族の協力で守る医者^の指示
古里を語るに河内弁も混ぜ

吹田市 山田里子

見も知らぬ人と会釈のけもの道
彼岸会のお経うとうと亀の背な
青い鳥とまる小枝が折れている

富田林市 楠美子

バラ色に未来を染めた成人^{たち}の日
今更と言われて通うスイミング
賑やかな客は疲れを置いて去り

米子市 大田みさと

一ゼんのめしにであいが盛つてある
めし粒の一粒ずつに主張あり
今ここで言わねば悔いが残ります

静岡市 青柳金吾

病人の気持ち察して言葉選る
家計簿の電話料金妻は無視
何よりの祖母の喜ぶ聞き相手

和歌山県 北山凡太

綺麗でも造花は水を吸い上げず
何事もあなた委せという手管
蒸かし芋出来たところへ孫の声

田辺市 染道佳明

三年目無事故無違反免許証
記念日がいっぱいあるね三月は

逢っていて別れ時間が気にかかる

樫原市 西本保夫

親切心すぐ出す妻が乗り遅れ

悔いの無い道には妻もついてくる

閑あれば糸図をつくりたい我が家

海南市 三宅保

強すぎるから敵にまわさないだけ

思いきりどなれる井戸をつくりたい

青森県 福士トキ

誰よりも星がわたしを知っている

懷手小石に語る愚痴もある

大阪市 吐田純子

たとう紙の晴着にロスの娘を思う

遠い孫のビデオへ抱っこしたくなる

川西市 田中喜俊

初詣で孫の合格頼みこむ

二階からゆっくりおりる姑のうた

愛媛県 石手武

安堵感空気の抜けた貌になり

愛に飢え愛のシナリオ練り直す

印象がよくて媒酌買うて出る

日溜りへ帯をゆるめて我れ老いぬ

八尾市 椎尾公子

孫が来て笑顔がもどる嬉しい日

岡山県 中嶋千恵子

それぞれの彩で咲いてる人生譜

箕面市 椎江清芳

福招く門が開かぬ京の寺

数珠つなぎして保母さん一二三
忠霊塔亡夫に会うごとく詣る

泉佐野市 大工静子

落葉焼く尼僧の姿冬木立

青森県 波ただお

教え子の温情身に沁み涙する

紙すきに似て板のりの出来あがり
綿菓子のようにふわっと波の花

愛媛県 西山えつ美

重そうな雪に耐えてるツバキの葉

八尾市 鷺見章

おおきむこさむ赤い頬っぺが駆ける路地

初賞与孫が小遣くれました
ほろ酔いの父に付き合う枯れすすき

高松市 竹川憲一

冬木立動物園は鳩ばかり

藤井寺市 福元みのもる

マニキュアも服に合わせて染める爪
早春の天神さんに梅が咲き

豊中市 辻川慶子

勉強は塾学校は遊ぶところ
初発車に並ぶは瞑想してる客

岡山県 松本元江

愛のない言葉にも似た風の音

買物が好きな亭主に買いにやろ
テレビにはかわいい兎ばかり出る

静岡市 片平静代

どの辺で向きを変えるの春の風

岡山県 伏見すみれ

NTT株買えず中流改める
根掘り葉掘り失敗談を聞きたがり

和歌山市 青枝鉄治

これしきの土産で無心切り出せず
十万円金貨も宝石箱に入れ

岡山県 江口有一朗

打つほどに老鐘冴える冬の天

賀状出す枚数減らず八十歳
皆揃い家伝の雑煮で新春を

岡山県 牧野秀香

ノッポビルに袈裟斬りされて風怒る

大阪府 島路太郎

中流の幸せいつも酔うている

親方の奢りでのんだコップ酒
病床に何故か忙しい十二月

島根県 喜島ノブ

貰われていく子にはかす赤い靴

久留米市 中垣八十八

いつの日か鶴の故郷へ行く墓参
出席にサイン祝辞の役もお受けする

和歌山県

山田 久子

天高く掃除日和に歌も出る
満足はいかぬが仕事自負を持ち

大阪市

川原 章久

夕暮れは寂しい車券の紙吹雪
痴呆症あんたはんだなと母が言う

大阪市

堀口 欣一

良寛の書をよみながら春を待つ
よかったな名は忘れたがいい役者

唐津市

入江 喜久夫

新年の挨拶ぬきの初電話
宴会で子らが驚く母の喉

島根県

ふなつ 重信

初詣神様だけに本音告ぐ
張りごよみ去年は軽く剥ぎ取られ

岡山県

戸田 種子

とうさんの奉仕日かあさん風邪でねる
運不運一線引いた違いだけ

八尾市

松下 蕉露

呉服屋の娘が毛皮に執心で
昼行燈いざとなつても昼行燈

益田市

里本 たかし

賀状書きながら妻の愚痴を聴く

車椅子磨かれ庭に誰も居ず

鳥取県

西川 和子

木の実ポリポリボトルが空になる
太陽を一ぱい貰う早春譜

岡山県

平田 たけよ

人生の起伏だるまに似た暮し
その時のためにと母は貯めている

高知市

北川 竹萌

温いうちにと出したコーヒに愛の湯気
戦友会まず黙禱で会はじめ

鳥取県

久野 野草

ゆりとばらつばみの孫が春歌う
悔しさがこぼれ時計が二時報らす

泉佐野市

真崎 浪速子

神様も帰る所がある出雲
正月を一人占めして初孫の春

大阪市

平井 露芳

目覚しに喋らせ寝てる子を起し
合唱でや々と第九が盛り上り

呉市

岡田 寿美礼

娘留守つぎつぎ来客淋しさも
お若いと言うて八十はお世辞でも

静岡市

丹羽 定次

お年玉子供によって差が出来る
元旦の計もいつしか年をとり

島根県 岩田三和
気の毒にあかぎれだらけ冬の土
冬もなおハウスの土は休まれず

静岡市 北村かず
霜降りて屋根のはしはし真っ白け
石ころを投げてみたいな思いきり

大阪市 喜多佐津乃

少数の日の丸ゆれる初日の出
ストーブの上でいも焼く匂いかぐ

今治市 渡邊伊津志

打ち水の手法で水墨画を仕上げ
陽炎に揺られ大地が息をする

島根県 森山英子

習字したなどと言われぬ賀状かき
ガムテープ張って耐えてる兎小屋

出雲市 高橋きよし

一枚の日めくり剥いで除夜の鐘
もう一人居るよで居ない影法師

島根県 園山世似

旅先のいずこも鴉黒かった
喪が明けて年賀はがきがどつとくる

吹田市 木原絹

思い出し笑いを映すコンバクト
あの人の自慢話がしとうなり

奈良市 米田恭昌

出番待つ兎が覗く餅つき器
下剋上いつか我もと野心あり

米子市 木村富美子

薬沓をまだ忘れない足の指
へそくりが出来たらミンク買おうかな

豊中市 三宅つえ子

餅搗きの音も聞こえぬ年の暮
煽てられ相好崩す九十歳

豊中市 玉井房子

かるた読み歌に酔うてるお祖母ちゃん
置薬たすかりました日曜日

静岡市 中川みつ

温かい小部屋で二人へば将棋
急用で出会う多弁に逃げ言葉

静岡市 大石たき

久しぶり家族揃った祝膳
兎年飛んで明るくゲートボール

岸和田市 三輪通彦

車内マナー親にしつけを教えたい
パンダ並みの家で住みたい兎小屋

河内長野市 植村喜代

一年の初めと終りで逝く隣人
グループに同じキズ持つ人が出来

八戸市 島田昭治

貧なれど父が好きだと子の世辞か

物欲のために神棚拝む人

静岡市 柳沢たま

老医師が乳房を探る聴診器
会議には必ず一言居士が居る

藤井寺市 菊地繁男

ペダル踏む息も切れ切れ老い悲し
湯どうふの熱さを舌で転ばせる

静岡市 大村美智恵

衿巻は優しい嫁の贈り物
ナポレオン空瓶だけど飾り棚

岡山県 土居ひでの

定年の足音高い初詣
金婚の宝は皺の中に秘め

岡山県 富坂志重

鼻歌のもれるくりやがのぞき度い
おばあさんガラスふいてる年の暮れ

京都市 山脇正之

寝たきりに期日遅れの週刊誌
やっど喜寿傘寿の夫の手を借りる

岡山県 杉本伊久栄

雪の無い正月少し間が抜けて
朝毎の進軍ラッパ母が吹き

奈良市 山村有佳

元日を祝える事に手を合わす
くじ運が悪いと知りつつ宝くじ

忘年会少し音痴で興がわき
福寿草可愛い初春が昨日今日

岡山県 後安江山

第九の名曲音ならみな同じ
まだ不安抱いているのか無口すぎ

和歌山市 三谷周三

天皇を思っておやじ元氣出し
叱られて下にあたってうさばらし

いわき市 新井征次

キリストも神もお釈迦もみな師走
四十年短く長い平和かな

奈良市 井上大

雲海の連峰機上で初来迎
童心にかえり六十路の無礼講

豊中市 額田明吉

若い時買った苦勞の後遺症
一世代保証付家具処分

新宮市 船越正

初春を林をぬけて陽を拝む

大阪市 朝田晃世

心臓で音痴もマイク握りしめ

大阪市 渡部トキワ

◆ジュニアの部

お年玉もっともらってぎんこうへ
マンガ本それには目がないほくでした

枚方市 二宮正彦

愛染帖

橘高薫風選

誤った賀状へ温くし喪の男 伊丹市 榎谷 寿馬
 ギネスブックに載るほど酔つてみようかな 吹田市 後藤 火鳥
 古本屋ベストセラーの無い安堵 吹田市 後藤 火鳥
 九十七母の雑煮の餅きざむ 笠岡市 木山 遠二
 老母看護妻の心を覗きたし 笠岡市 木山 遠二
 寝たきりで渉る年の瀬深かりき 大田市 塩田 新一郎
 九十には恋人がなし長閑なり 大田市 塩田 新一郎
 サルトルを買つて帰りにジャンボ籤 寝屋川市 堀江 光子
 中曽根さんするめもいかにうちですよ 寝屋川市 堀江 光子
 一年がひとときとなる落葉焚き 今治市 月原 宵明
 十二月八日の記事は探すほど 今治市 月原 宵明
 マネキンをもとに見ないガードマン 和歌山市 後藤 正子
 注連飾しても開けない冠木門 和歌山市 後藤 正子
 一枚を脱ぐためらいと憧れと 和歌山市 後藤 正子

期限切れの切符へ今も発車ベル 藤井寺市 赤木 和子
 やつと母の短所がわたしものになる 藤井寺市 赤木 和子
 棘のある花になりたし逆立ちす 弘前市 真喜内 實
 吹雪く日の長さに合った本の幅 津軽好日岩木高嶺の雪景色 尼崎市 春城 年代
 茶の花が夜目にも白い逢瀬かな 吹田市 栗谷 春子
 寒行僧が比叡嵐を連れて来る 吹田市 栗谷 春子
 こもまた伊弉諾の宮雪が舞う 高石市 浅野 房子
 にわか雪夕刊届く冷えに冷え 高石市 浅野 房子
 早春の小径ときめきが埋めてある 友は皆家庭に帰り旅終る 青戸 田鶴
 米子市 青戸 田鶴
 深々とおじぎしたが冬の草 和歌山市 神平 狂虎
 食べる事だけは忘れぬ猫になり 和歌山市 神平 狂虎
 冬の雲に喧嘩の仕方など訊ね 和歌山市 神平 狂虎
 行先は海僕の胸から出る夜汽車 岡山県 清水 悠貴女
 どの彩に染めても私にある匂い 岡山県 清水 悠貴女
 倅せな昔ばなしを持つ帽子 鳥取県 松下 たつみ
 鳥取県 松下 たつみ
 底冷えの世相に黙りぐせがつき 松 かつみ
 百円を言えば小さく見られそう 松 かつみ
 ワンカップ買いにガソリン消費する 代筆は姑の言葉の癖もいれ 松 かつみ
 茅ヶ崎市 山上 元孝
 芒野に一樹を植えて駅とする 米子市 林 荒介
 八甲田虚しや膝抱いて 青森市 工藤 甲吉
 渡り鳥みたいな訣れかたをして 大阪府 小出 智子
 益田市 里本 たかし
 聖堂のキリストが未だグロテスク 唐津市 相葉 あき
 水面に出れば相手が居なくなり 島根県 堀江 正朗
 血圧は正月疲れ孫疲れ 島根県 堀江 正朗
 米子市 茂理 高代
 かるがると自分をのせる棚がある 佐賀市 古川 一徳
 孟に受けた虚勢は飲んでおく 米子市 八木 千代
 受話器持ったままで雨から雪になる 富田林市 藤田 泰子
 みちのくへ林檎の花の咲く頃に 米子市 川上 より子
 舊抱く風船草と菰草と 唐津市 山口 高明
 鯖鮭の好きな女の在所聞く 岡山県 土居 耕花
 鶴鶴の尾にどの歌を合わせようか 守口市 結城 君子
 腰かがめ鈴蘭の鐘きいている 茅ヶ崎市 山上 元孝

初出勤酒焼け雪焼けハワイ焼け

岡山県

黒住 美穂子

偽りの世に黄金の福寿草

高槻市

河瀬 芳子

表札に亡夫生きている新春の家

和歌山市

木本 文子

神様がこわくて真面目なふりをする

名古屋

越村 桔梢

雑兵で終って気楽な煙になり

弘前市

斉藤 晶

雪白し餅白し心も白し

大阪市

島路 太郎

人日の日にねころもば青い空

唐津市

浜本 義美

陽よ月よ暫し足踏みしてくんろ

唐津市

浜本 ちよ

雪が積む品行方正見るように

唐津市

田口 虹汀

麻雀の為に有るよな松の内

岡山県

矢内 寿恵子

ためらい傷幾つ数えた女坂

奈良市

井上 大

十二月金貨銀貨は人の手に

寝屋川市

江口 度

無精者書けないボールペンたまる

唐津市

桑原 掬水

小犬駆け渚に千鳥立つが見ゆ

唐津市

久保 正敏

脱税の秘訣を書いてないカルテ

和歌山市

西山 幸

開くのはいつも聖書のこのページ

雪原を歩く時計のない不安

近江八幡市

前川 千賀子

ライバルの恩は師の恩より深く

藤井寺市

福元 稔

さそり座の運を器用に走り抜け

弘前市

波多野 五楽庵

光るもの隠して姑の田に入る

尼崎市

児玉 歌子

ゆれ動く私が二人いて困る

米子市

木村 富美子

コーヒーが冷めますそこのお二人さん

茨木市

堀 良江

冬の蚊に存分吸わせてやりました

大阪市

亀井 円女

紙びなを折る還暦の指しずか

名古屋

藤井 高子

浪花座に柿落としの寄席囃子

河内長野市

植村 岳代

家計簿の初めに書いたお香典

西条市

片上 明水

春近くポケットの多い服を縫う

熊本県

立道 善太郎

年の瀬も阿弥陀如来は立ちずくめ

鳥根県

小砂 白汀

国鉄に合わなくなった長い脛

平田市

久家 代仕男

春は春らしく貧者の一灯も

寝屋川市

岸野 あやめ

お洒落とはじっと我慢かも知れぬ

寝屋川市

宮尾 あいき

床の間の南天鶴の羽ばたく形して

羽曳野市

田中 隆二

窓際で冷めたい風と温い風

豊中市

田中正坊

ヘルメット脱げば可愛い女の子

唐津市

福島 紀一

つれ添ってきてもちがった暦もち

広島県

森川 抜智

さあ行こか言うて女は一時間

守口市

森川 まさお

どうしても好きになれない文字があり

米子市

寺沢 みど里

正月の仏に赤いバラを買う

西宮市

奥田 みつ子

自己主張靴の大きなリボンまで

西宮市

林 はつ絵

昔ばなし弾んでぎんなん炒れてくる

鳥取県

土橋 螢

蜜柑はまるく友情は美しく

和泉市

岡井 やすお

また一つ生きながらえろくせがつき

米子市

野坂 なみ

創口にもう日の丸が立っている

倉敷市

藤井 春日

ひとひらの花に憐れを寄すも老い

米子市

光井 玲子

大根の白さに迷いふつきれる

尼崎市

春城 武庫坊

三ヶ日すみ中国切手の賀状来る

米子市

沢田 千春

振り捨てた過去がふらつと顔を出す

宝塚市 丸山 よし津
光より影の部分にある努力

静岡市 渥美 弧秀
バス旅行別れの歌が胸になる

羽曳野市 吉川 寿美
男勝りへ縋りがかった均等法

岡山県 江口 有一朗
ヘルと書きラヴと直して十字切る

箕面市 椎江 清
絵の中の河童が水を恋しがり

大阪市 井上 白峰
折れた矢がグラスの底に突き刺さる

島根県 さえき やえ
聞かんふりしてただけです象の耳

和歌山市 福本 英子
救急車へボトリと庭の落ち椿

高知県 小澤 幸泉
妻去んで男三人静かなり

豊中市 辻川 慶子
おだやかな皇后のお顔安堵する

吹田市 西岡 豊
せっかちが話の上を走ってる

兵庫県 北川 とみ子
何かある出会いがしらの長話

東大阪市 大平 太一郎
トランプに良過ぎても負け教えられ

奈良市 米田 恭昌
ライバルに塩を送って遅れとり

和歌山県 三宅 保
もつ一度スタートラインに戻れたら

川西市 松本 ただし

喪中葉書暮を厳しく攻めたてる

豊中市 上田 登志実
罪つくるだけになりそこで言い出せぬ

米子市 田中 亜弥
春の空青いえのぐの出番だよ

岸和田市 原 さよ子
嫁ぐ子に便乗母も選る晴着

愛媛県 藤原 無想
贈られし花の名問えば長寿蘭

堺市 高橋 千万子
もしまさかの長いくり返し

今治市 矢野 佳雲
良心の痛む握手をしてしまひ

大阪市 榊 本路児
貧乏性羽毛蒲団は軽すぎる

佐賀 寺中 三枝子
空気に四季があり母います故郷

岸和田市 古野 ひで
人生を飾る切ない恋もある

唐津市 原野 常善
まだ空にいたがる風を引き下す

唐津市 仁部 四郎
受験子は春一番と四つに組み

和歌山市 玉井 豊太
金持ちはすらすら書いた末払い

茨木市 井上 森生
湯の里の正月芝居は泣き笑い

島根県 ふなつ 重信
初詣この人ごみでは告げられず

福岡市 吉川 一郎
お喋りなテレビ相手に一人めし

浜田市 佐々木 裕
独学の面が自信に満ちて居る

西宮市 瀬尾 六郎太
人車立場変れば邪魔になり

愛媛県 石手 武
片想い同じ時刻に同じ道

岡山県 松本 元江
開く日の夢をかこっている蕾

兵庫県 脇田 米朝
歳時記を皿に盛ってる京料理

和泉市 西岡 洛醉
日向ぼこ孫と日記の真埋め

米子市 門脇 晶子
青い鳥のせた電車がまだこない

豊中市 中桜塚 三丁目13-15
投句先 〒560 橋高薫風苑(ハガキに3句)

橋高薫風苑(ハガキに3句)

NHK川柳募集

課題 「放送」(ラジオ・テレビ)
(アンテナ・その他)

選者 橋高薫風

締切 3月5日

(ハガキに3句以内)

投句先

大阪市東区馬場町3-43 NHK
大阪放送局 さわやか広場係

発表

3月22日(日)ラジオ第一放送
午前10時から

尚香のむ

小出智子選

これ以上こたえは待てぬ仁王門

風向きが変る明日を信じてる

まな板に男の貌を見せた鯉

お喋りな男に聞かす軽い嘘

三人の中に私はいつもいる

新しい風に馴染めぬカレンダー

終章を飾るわたしの身づくろい

シナリオを何度変えても亡夫の影

今年もどうぞよろしく梅の花

ちっちゃな孫私の命引き伸ばす

奇跡まつ昨日も今日も雪が降る

哀しみの極致よ猫の子がうまれ

神さまを味方に生傷が絶えぬ

今日生きて今日の入陽よアリガトウ

木枯らしや過去へ過去へと戸を叩く

据え石のひとつひとつにある自信

きつとまた笑顔で通る道と決め

叱られた山を兎は忘れない

じんわりと重石きかせて安堵する

大阪 清水 康恵

尼崎 春城 年代

大阪 鍛原 千里

高槻 河瀬 芳子

寝屋川 宮尾あいき

鳥取 川崎 秋女

岡山 嘉数兆代賀

和歌山 寺田 裕美

鳥根 松本 文子

鳥取 さえきやえ

堺 宮本かりん

ケースから出せば不倫をする瞳だな
途方にくれて一気に森を駆けぬける
漬物石が辛抱しろと言うている

倅の脆さを知っているポルシェ

小雪ちらちら熱の子に勞られ

それは月の心くぼりの月見草

桜餅母とおんなじ笑い皺

紫が少しまじった未完の絵

核家族会えばクイズが解けてくる

天井の暗さ真意がとどかない

ひとつ荷を残し花野を後戻り

お多福の面をはずした風当り

わたしとのいくさが続く日記帳

七草がゆ下手な思案はあすしよう

招かざる客が運んで来たチャンス

まっ白い靴に私が裁かれる

家事万端手抜き術が長けてくる

幸せに氣付いてからの肩の凝り

うまいもの情報集めてる小さな胃

スカートをはいた母さん美人だよ

お手玉は孫とわたしのコミュニケーション

折り返し点から時が加速する

安楽椅子に座ってからの物忘れ

書き初めに故郷の山津軽富士

里帰り小さな嘘を用意する

和歌山 坂部紀久子

和歌山 後藤 正子

羽曳野 吉川 寿美

佐賀 寺中三枝子

藤井寺 赤木 和子

米子 政岡日枝子

松原 佐藤 藤子

堺 桜沢あかり

大阪 鈴木 節子

広島 藤井 千菊

八尾 高杉 千歩

大阪 津守 柳伸

和歌山 西山 幸

大阪 古川美津枝

和歌山 山川 克子

和歌山 福井 桂香

吹田 茂見よ志子

大阪 西出 楓楽

大阪 本間満津子

埼玉 根岸 方子

和歌山 福士 トキ

山口三千子

堺 小西 小雪

西宮 秋元 てる

大阪 板東 倫子

女二人値切る勇氣も湧いてくる
 任地より黒豆ごまめのリクエスト
 冬のバラ花芯へ媚びる風ばかり
 寿くように正月五日の初雪よ
 吹き溜り落葉の私語が眠らせず
 悪筆が開き直っている賀状
 意地悪のできない年になりました
 木枯しにささえ一本持つて行かれ
 蛇の性抱いて男たり女たり
 かすみ草乙女の不安やわらげる
 年送り年が始まるエネルギー
 お言葉を返してからの風当り
 外は雪電話の声があたたかい
 いい事を一番に聞く耳そうじ
 七十の坂をよいしょと亡夫が押す
 今年の垢今年落して終い風呂
 変り身のはやさ女の涙かも
 美しく跳んで見ましよう兎年
 良寛の筆あと唄が洩れそうな
 日の当る刻を信じて冬すみれ
 狂いそう双手で握る神の鈴
 老醜に急かされ信仰思い立ち
 初日拝んで性善説を信じ
 体力がほしや柳友なつかしむ
 初詣で願い袋も小さくなり

西宮	西口いゝゑ	羽曳野	福田満洲子	米子	石垣 花子	八尾	宮崎シマ子	大阪	上江洌勝子	守口	結城 君子	島根	堀江 芳子	富田林	松本今日子	藤井寺	高田美代子	寝屋川	柴田英壬子	宝塚	丸山よし津	和歌山	桜井 千秀	西宮	奥田みつ子	高槻	笠嶋恵美子	島根	喜島 ノブ	堺	江辺 天鳳	和歌山	山田 久子	岡山	千原 理恵	米子	林 瑞枝	豊中	安藤寿美子	富山	舟渡 杏花	唐津	浜本 ちよ	熊本	永田 俊子	松原	北野 久子	広島	流 奈美子
----	-------	-----	-------	----	-------	----	-------	----	-------	----	-------	----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	----	-------	-----	-------	----	-------	----	-------	----	-------	---	-------	-----	-------	----	-------	----	------	----	-------	----	-------	----	-------	----	-------	----	-------	----	-------

あいまいな風は逃げ道心得る
 捨てられぬ古靴妻の歳月よ
 また一つ許し朝日に包まれる
 プライドがあるから平和な顔をする
 恩師より届く賀状の墨は冴え
 晴着の裾に恥じらいを少しおく
 漬物がいちばんうまいお正月
 創らずにおれぬ情性が毛糸編む
 合格へ御礼参りは母が行き
 そろそろとその齢ですというカルテ
 久々にならぶ雌雄の類染まり
 愛憎は一枚の紙の裏表
 春の野へ孫と花摘む刻がある

手探りながら真剣に三カ月目を迎えました。毎月たくさん
 さんの作品をお寄せ頂きましてありがとうございます。
 ご投句の束の重みに身の締まる思いで対峙させて頂いて
 います。小手先で作られたものでなく、省略された心の
 奥の深いものと願い、本来の川柳の味を忘れてはならな
 いと思います。ゴシックの句の表現には胸を打たれるも
 のがありました。



ハガキに雑詠3句。毎月10日締切
 投句先 〒544 大阪市生野区勝山南1―10

小出 智子

出雲	石倉美佐子	和歌山	木本 文子	和歌山	森 茜	米子	小村てい子	鳥取	西川 和子	寝屋川	稲葉 冬葉	大阪	神夏磯道子	西宮	林 はつ絵	寝屋川	太田 藍子	寝屋川	平松かすみ	富田林	片岡智恵子	姫路	釣 遊光	岡山	松本 元江
----	-------	-----	-------	-----	-----	----	-------	----	-------	-----	-------	----	-------	----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	----	------	----	-------

■ 同人アンケート

わたしが川柳を 始めた理由と 契機

担当・榎谷 寿馬

寝屋川市 宮尾 あいき

昭和三十五年十月二十九日、長男猛が二十九歳の若さで職場の事故で急死した。

その頃、亡夫は病臥中で、柱とも頼む息子の死に私は自分を見失った。一日中息子の事が目の前に浮んで、家事も手に付かぬ。これでは自分も駄目になる、気分転換に川柳を勉強しようと文秋さんの門を叩いた。文秋さんは初対面の私の願いを快く引き受けて下さって白柳さん、一栄さんの玉造句会へ、次に梅

里さんの大萬、南大阪川柳句会へ、最後に路郎先生の本社句会へ、その頃は南の白安寺だった。路郎先生に抜いて戴いた時の嬉しさは今でも忘れない。夢中になって息子の事もあまり思わぬようになった。日々に生き甲斐を感じるようになった。良い諸先生にめぐり合い、優しい柳友に出会い、七十六歳の現在も下手な川柳を作り続けている自分の人生を自分ながら幸せだと思っている。

川柳は私の夫 私の命

宝塚市 吉田 笑女

昭和四十三年に故郷の母を呼び寄せる。そして四十五年十月に老衰のために母は八十五年の暮を閉じた。

母亡き後の淋しさは埋めようもなく過ぎた。ある日宝塚市公報へ恵まれぬ老人へペンフレンド募集の記事を見付け、自分にも出来るような気になって申し込む。間もなく文通を申し込まれた。私は女性との文通を望んでいたが、そうとも言えず文通が続いた。

その内にその方は古くからの川柳作家と分った。私にも川柳をすすめられた。その気になって続ける内に川柳らしきものも作れるよ

うになる。昭和四十七年十二月川柳塔篠山支部の忘年句会へ始めて出席し、それから約三年、篠山へ通った。雨の日も雪の日も柳友に会いたくて、その後、家の事情で行かなくなり、知人に聞いた西宮北口川柳会へ入会して十余年、毎回来しい句会へ参加している。

西宮市 朝山 千世子

終戦後暫くして当西宮北口未亡人会に俳句会が生れ私も四、五年やっているうち同じ仲間の親戚でファウスト川柳社の同人で森田芳野さんという方に川柳を勧められ、神戸の句会に出席していましたが、三條東洋樹氏が別に時の川柳社を創立され私たちも時せんの方へ出席していました。俳句の方も続けて居りたまたま当方娘の縁談起こりまして婚約者の両親が俳人でしたが常識はずれの言動をされ人間として愛想がつかまして、俳句のグループから身を引いて居ました時、たまたまご近所の川柳家森田昆味さんに誘われお宅での句会に寄せて頂きまして牧人さんや伊升さんとも御一緒でした。その頃、川柳塔社の路郎實に牧人さんの「揚つても揚つても雲雀に空がある」の句が選ばれ祝賀句会にも出席させて

頂きました。昆味さんは御高齢でお宅での句会を止めたいとの事で現西宮中央公民館で川柳会発足の指導者として牧人さんをお願い致し、十年余で今日の繁栄となりました。これも偏に牧人さん没後、薫風、故多久志、現紫香の諸先生の御力添えのお蔭と感謝致して居る次第で御座います。

必殺!! 主人の言葉から

鳥取県 中 原 みさ子

熊本県生まれ大阪育ちの私が、ふとした縁で鳥取に嫁いで早や十一年目になります。

そんな八年前の暮に、私達の町にも川柳が普及し、主人(諷人)が姑の代理で参加してから我が家にも火が点いたことでした。

「お前も何か心に思ったことを五七五で創って見ろよ」が効いた五年前。何も知らないままに鳥取県川柳大会へ同行参加をし、そこに吹いている温かい風に触れ、浮世の風は冷たくも同好の趣味を持つ人々が、思いやりと絆を太く繋いでいる強さを知りました。

『どん底に母の笑顔は変わらない』が第二回鳥取県川柳協作品賞の準協会賞に入選したのを契機に、川柳でしか表現出来ない『喜怒哀楽』を私なりに心さらけ出し、私の川柳を綴

って行く気持ちが目覚めたのです。
未熟さを乗り越え、家族トリオの句集が発刊出来るよう頑張りたいと夢見る川柳人生です。

八尾市 宮 崎 シマ子

私が川柳を始めたのは、寝屋川にいる従兄(立床晴風)に勧められたからです。多産系で沢山いる従兄妹達の中で何か濃い結びつきがあるのか、親子程も歳の違う晴風と前から遊びに行ったり、又来てもらったりしていました。その時も秋の彼岸の一日を尋ねて行き従兄から川柳をやっている事を聞かされ、ねやがわの句報やら川柳塔を見せてもらいました。ねやがわの題をもらい川柳みたいなものを作って、遊びに行った礼状に添えて送りしましたら、折返し句会に出るようにと高田博泉様からのお誘いを受け、誘われるまま厚かましく出席、そして一句抜いて頂いたのが病みつきになりました。

以前から短詩文芸が好きで、よく読んでいたまには句を作り、自分なりに楽しんでいましたが、この頃は本当に老後が賑やかになり喜んでいきます。直接間接にいろいろお教え頂く先生方に感謝しながら、そして従兄といっ

までも仲よく川柳を続けられたらと願って、これからも勉強して行きたいと思っています。

和歌山市 内 芝 登志代

昭和四十四年六月に主人が死去した後、末っ子は大学へ、娘も嫁ぎました頃にやっと哀しみも薄らぎ、何か趣味を持たねばと、元々読んでいた書いたりが好きだったので、新聞の俳句欄に投句を始めてはつづつ勉強をしておりましたところへ同級生の太茂津さんが見えられて、垂井葵水さんと川柳の会を持っていくので入会しないかと奨められ、葵水さんとはPTAの役員連れでもあり、会場のホールも割合近く、喜んで入会させて頂きましたが葵水さんとは短かい柳縁で悲しいお訣れとなりました。

いまだに川柳とは何かとはつきりと解らないままに下手の横好きと申しましようか、いいお友達が沢山出来る嬉しさに歳と共に感覚がにぶくなる頭に鞭うって頑張っている私でございます。

和歌山市 後藤 正子

川柳が生活の一部となりつつある現在、あらためて『川柳をはじめた理由と契機』のテーマを考える時、想いばかりが脹らんで川柳をどれ程知り、どれ程の勉強を積んで来たかをふり返ると、少しも成長のない今を恥かしく思う。

昭和五十七年一月―高校受験の長男をハラハラと見守っていた私。子離れの意味も含めて何かを始めた、の『何か』が川柳でした。『川柳という海』に心を惹かれ夢中になって波打際を裸足で遊んでいた頃がなつかしく胸を熱くする。川柳を始めてまずウエイトをしたのは人との出会い、忘れ得ぬ想い出がいっぱい……今は良き指導者、すばらしい先輩、温かい柳友に恵まれながらも『川柳という海』の深さに戸惑いと怖れと、いっぱいの憧れを抱きながら懸命に歩いている。

川柳をはじめた契機を作ってくれた長男は今年成人を迎える。生後まもなく十五歳迄の命と言われた『先天性心臓病ファロー氏四徴症』幾つかの死を乗り越え、五歳の夏、根治手術成功、十五年の月日が過ぎた。そして今

二十歳の春―悔いなき人生を歩いてほしい輝いてほしいと願いながら、それぞれの想いを限りなく込めた『海』への夢を馳せている。

西宮市 西 口 いわゑ

振り返れば七年前、舅が病に伏し毎日が二十四時間勤務の看護婦のような明け暮れ、そんな折、近所の朝山千世子さんが「こんな会があるんですよ」と、北口川柳会の句報を見せて下さった。早速何の知識もないまま初めて句会に出席、五句も抜けた記憶は今も鮮明に残っている。それ以来五七五に心の拠り所が出来、父にもゆとりを持って接することが出来るようになった。その父を見送り、これから川柳に打込んでと思った途端、何も作れなくなってしまう矢先、西宮ローズカレッジが開校になり、薫風先生の教室で只今勉強中川柳の難しさを痛感している。でもお蔭ですばらしい柳友も沢山出来、下手ながら作句するといふ今迄とは違った時間を過すことが出来るようになった。川柳という到底究めることの不可能なものに関わり合ってしまった今、何故か苦しくても捨てられない不思議なもの芽生え、これからも続けて行きたい

と思います。

岡山県 山本 玉恵

或る日友人から川柳をしてみませんか、すすめられました。元々俳句やら短歌など好んで読んでおりましたので、すらすらと入らせて頂きました。只今では川柳は私の命です。川柳を始めまして間もなく、主人が他界致しまして一時は生きて行くことも出来るかしらと思う程になっておりました。

その時ああ川柳をもっと本気でしてみよう作れるかどうか判らないけれど、とに角悲しい事、苦しい事、淋しい事、何でも川柳にしてみようと思ひまして一生懸命になりました。今では恋人はと聞かれましたら、川柳ですと答えてしまふ程好きです。

思うような句の出来ないこともありませけれど、川柳と共に暮らして行けますことは、何という楽しいことでしょうか。私から川柳を取り去ってしまったら、きっと蟬の抜け殻のようにすき透って体中に何も無くなってしまうのではないのでしょうか、などと思ひながら、今日も句作りにいそしんでおります。

— 水 煙 抄 —

秀 句 鑑 賞

— 前月号から —

大 矢 十 郎

信頼があるから道はずせない

大 川 幸 子

人それぞれに、それなりの信頼が寄せられている。この信頼に応えることが生甲斐である。下五の「はずせない」としたところに、一層信頼感があり、人柄が伺える。ふたたびの愛へ素直に鈴を振る

寺 中 三 枝 子

一度の愛だったのか、作者以外に知る由もないが、「ふたたびの愛」としたところに、熱い愛の蘇りを感じさせる。懐しさと、嬉しさに素直に聞いた心の鈴は、さぞや満ち足りた音色であつたらう。

何事も約束事と母泣かず

上 田 柳 影

「何事も」から深い悲しみのみが連想される。これも約束事として諦め、悟り尽した気丈な母の姿であるが、心の中は如何ばかりであつたらう。

以心伝心きつと向こうも嫌ではる

河 瀬 芳 子

如何に遠く離れようと、長い無沙汰であろうとも、人間にのみ与えられた特技は「以心伝心」である。この句の場合、どちらかが冷たいものを感じさせたのだろう。「嫌ではる」としたところが非凡な着眼である。

土 橋 是 子

あらゆる会合に於て、この句の如く完全主義者がいて、会議を長びかせる。この論者に啞然として説得の証明も責任もとれぬまま、白けてゆくムードが目につかぶ。

領収証取つて良かった身の証し

北 川 一 進

金額は知らぬが、この領収証の場合は大きな役割があつた。単なる受取りのみならず、身の証明と、アリバイまで成立してくれたのである。ほつと胸を撫で降ろす安堵感がある。

愚痴に明け愚痴に暮れゆく老夫婦

鈴 木 良 征

愚痴といつても、決して不足ではなく語らないのです。二人っきりの淋しさから出る言葉は、子の事、孫の事、暑さ寒さに身の不調互いに助け合い、温め合つていいじやありませんか。爺さんの欠伸へ婆さん返事する。こんな暮しでいつまでもお元気で。

十二月区切りをつけた事ひとつ

田 中 輝 子

自分のこと、家庭のこと、何れにせよ十二月という月は、区切りをつけねばならぬ事が

ある。然し、そのこと自体は平凡な事であるが、この句、下五の「事ひとつ」から、長い間の因習を捨てた決断が伺える。

そしてここも羽根を休める場所でない

赤 木 和 子

女性とは斯くあるものか。そして「ここ」という上六がドラマめいてすばらしい。「羽根を休める場所でない」というしめくくりの目新しい着眼に感動させられる。それそれを郵便受けに気づかれる

大 西 文 次

誰しも、郵便受けを開ける時は、多少の心躍りはあるもの。恰も、硬貨を拾うように、あたりに目を配つたりして。中には、いい便りが、いい柳誌が入っていたことでしょう。敏感な郵便受けです。

世話やいて母すき焼きに手をつけず

椎 江 清 芳

日本の母の姿である。家庭への愛情と、女性としての謙虚さが滲み出ていて、温く、平和な家庭が伺える。「さあ、お母さんも一緒に」と、申し上げたい。

幸せな順に団地の灯が消える

渡 邊 伊 津 志

順々に団地の灯が消えてゆく。基盤の目の碁石のように。幸せな順であるかは別として平和な団地をじつと見守るきびしい川柳眼に敬服する。

頼り甲斐ある子になって遠く住み

山 脇 正 之

レジャー白書から

竹内 紫 鏡

これまで、名簿名鑑の類から積み上げた俳人・川柳人の年齢構成や男女の比を推定してみたが、国内の総数はつかみにくかった。ここでは視点を変えて、日本人の余暇利用の実態を調べた幅広い報告書の中の「文芸創作人」の集計に注目した。

(財)余暇開発センターが昨年四月に発行した「レジャー白書⁸⁶」(副題・レジャーも「女性の時代」)から、そのごく一部を紹介しよう。余暇の内容は次の四部門につき更に細分してある。

- ①スポーツ27種目(ジョギング、体操……)
- ②趣味・創作30種目(文芸の創作・庭いじり・音楽鑑賞・陶芸・編物など)
- ③娯楽19種目(囲碁・将棋……外食など)
- ④観光・行楽10種目(遊園地……海外旅行)

計八六種目について、男女別、年代別の参加率、年間参加回数および費用の平均値を多数の表にしている。

調査はアンケート方式で、三千人に質問し回収率八二%だったが、その二四七六人が答えた参加実績を集計したものである。十五歳以上の全国人口九五二〇万人に対して各参加率を掛けている。一番関心のある「文芸の創作」については、詩・小説・短歌・俳句といった内容ごとの集計がいにく無い。それら文芸活動の合計の参加率は調査対象者の七・二%であった。国全体では六九〇万人いるという推定である。参加率は、男性より女性がいやや高いが、この三、四年はそう変動していない。ただし、年代別の参加率は、十代が著しく高く、男女とも三十代が最低となり、六十代以上でまた盛んになっている。図1と図2は経年変化と年齢別の参加率を、筆者がグラフ化したもの。三十代は、男性は職業で、女性は育児で多忙な時期であらうし十代は、学生の入門者が多い時期であらう。なお、この調査は、質を問わず、年に一回以上参加すれば数に入れている(平均参加回数は約十八、費用は三六〇円)。

文芸活動への参加率六一・八%という数字は、余暇活動八六種目中四十位より後である。五十代より高齢層

図2 文芸の創作 昭和60年度の参加者の年齢別集計

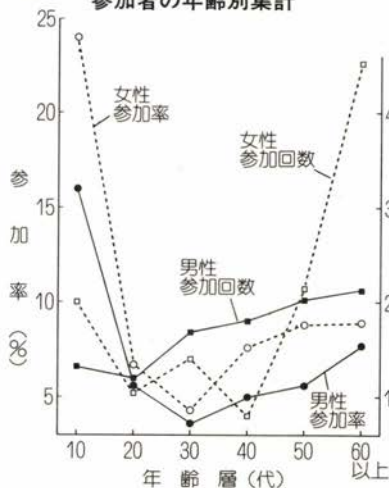
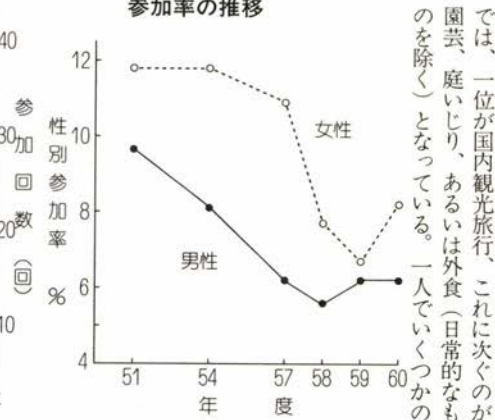


図1 文芸の創作活動への参加率の推移



では、一位が国内観光旅行、これに次ぐのが園芸・庭いじり、あるいは外食(日常的なものを除く)となっている。一人でいくつかの

では、一位が国内観光旅行、これに次ぐのが園芸、庭いじり、あるいは外食（日常的なものを除く）となっている。一人でいくつかの趣味をもつのが普通であるし、創作や鑑賞のために趣味は広いのが好都合であろう。

アンケート調査には、今後参加したい種目をも問うており、希望率で示してある。文芸は八・一％と増加傾向にある。それと、十年間の参加率の増減をみると、スポーツにも趣味娯楽にも流行があることが分かる。

余暇注動を測る指標として、参加率と平均活動回数とがあるが、それを見比べると、拡大化、大衆化、マニア化、衰退化の四つの位相に分類できる。図2で、十五―二十歳の参加率が大きく回数が少ないが、その方向に進む時が「大衆化」であり、その逆つまり参加率は減るが活動回数がふえる傾向を「マニア化」という。習熟化とも呼ぶ。拡大化というのは、率も回数も増大するもので、ブーム化ともいえる。気軽にレジャー活動に入ったばかり、という人の頭数がこの統計ではものを言っているようである。柳誌・俳誌に毎月投稿する人は「マニア化」の状態に近いわけだが、誰でも「新人」であった時期があるわけだから、十代の参加率が高い点と四十代の上昇傾向は注目したい。もちろん川柳は、酸いも甘いも噛みつくした人が理解するような作品を、豊かな人生経験に基づいて生み出すの

が本道であろうから、人生の二度目の参加率増加も大事である。

「お水とり」と「お水送り」

布施 幸子

「いつまでもお寒いことでございます」

「ほんまに。やっぱりお水とりが終らんと暖うなりまへんあ」

春を待つあいさつに登場する奈良東大寺二月堂の「お水とり」は、正式には十一面悔過法といい、本尊の十一面観音に罪をざんげし平和、豊作、幸福などを祈るきびしい行法である。この行法はそもそも人間界ならぬ天界、都卒天での行事だったという伝説がある。

私はまだ都卒天とやらへ旅行したことがない。が、洩れ聞くところによれば、だいぶ遠方にあるようだ。仏教の世界観による最高峰、八万由旬の高さを持つ須弥山のてっぺんから十万由旬の上方とか。由旬とは古代インドの長さの単位で、私流の怪しい計算では須弥山の高さ海拔百九十万キロ、その頂きから更に二百四十万キロ上空に都卒天が存在する。といったつかいもく見当もつかない。ともかくその都卒天には、金銀宝石で輝く御殿があり、内院には弥勒菩薩が説法なさっており、

外院では仏法の守護神の天衆が行に励んでいるらしい。

今から千二百年ほど昔のこと、はるばる都卒天へ行法の見学に出かけたお坊さんがいた。二月堂を開いた実忠和尚である。

「なんとノ聞きしにまさるすばらしい行法ですなあ。人間界へのみやげに頂戴できませんか。和尚は天衆に頼んだ」

「いいですとも」と言いたいけど、ちよつと無理でしょう」

天衆は答えた。だいいち十一面悔過法には生身の観音さまが必要であること。次に都卒天の一日は人間界の四百年にあたるから、天衆一日の修行を人間衆がおこなうには四百年の歳月が必要であること。それから……と天衆の説明に、私なら「やーめた」と諦めるところだが、実忠和尚はそうでなかった。

なにしろ都卒天まで一人でてくてく歩いて行った超能力、行動力の持主だから「成せば成る、成さねば成らぬ、何事も」の信念が鉄より固い。

「求めよ、さらば与えられん」という言葉がお経の中に、いや聖書の中にあるではないか。一心にお祈りすれば生身の観音さまがお越し下さるだろう。行法はスピードアップして走っておこなえば時間差が縮まる。がんばれば万事もうまくいくさ」

と考えた。そうして急いで人間界へ戻ると、難波津に行つて、観音さまの浄土へ向かい熱

心を祈りを捧げた。すると沖の方から金色のまばゆい仏さまが近寄って来られた。その金銅仏は人肌のぬくもりを持っておられ、正しく生身の十一面観音さまだった。

その観音さまを祀り、和尚はさつそく行法を実行し、以来毎年おこなわれてきたのがお水とりの行事である。

三月一日から二週間連続しておこなわれる荒行のうち、一般に親しまれ有名なのが十二日の行事である。夕暮れ、鐘を合図に本堂から練行衆に使いが出され、案内の童子が籠松明をかついで廻廊をまわる。火の粉が闇にこぼれて堂下の群衆にふりかかるが、厄除けになるというありがたい火の粉なのである。また、「ダツタン」の行法も行われ、大松明をふりかざした練行衆が内陣を駆けまわる荒行で、実忠和尚の工夫の一端がうかがわれる豪快な炎の祭りである。

いわゆる「お水取り」はダツタンの行の前におこなわれ、堂下の若狭井から仏さまへ供えるお水が汲みあげられるが、この水は奈良の水ではなくて、はるばる若狭から届けられた水だといわれている。そのいきさつはこうである。

実忠和尚は、十一面悔過法を始めるにあたり、八百よろずの神々に守護をお願いすることにした。そうして神さま方の名簿にあたる神名帳を作ってお名前をお呼びしたところ、みなさま二つ返事で集まって下さった。だが

なぜか遠敷明神だけお越し下さらない。大勢の中のとったお一人、だからこそ気になる場合もあるわけで、何となくすつきりせぬまま行が始まった。

この遠敷明神は、若狭の国を流れる遠敷川の上流に降臨された神さまである。その辺を「鶴の瀬」といい、鶴がたくさん住んでいて中には色白の鶴も混っていたようだ。白い鶴、黒い鶴が仲よく遊ぶ鶴の瀬の白い岩の上へ、ある日白雲の中から白馬に乗って降り立たれた青年の神、お名前を若狭彦と申し上げる。少し後にまた、同じ場所に同様にして女神が降りてこられた。お名前は若狭姫である。お二人は結婚して遠敷明神を名のり、いつまでも若く美しくあられた、という伝えが残っている。

ところが、遠敷明神の男神は釣りのキチ釣りを始めると一切を忘れてしまわれる。

奈良からお呼びがかかったときも釣りの最中だったから、奥さまに「あなた、早くお出かけ下さいな。実忠和尚や神々さまに悪いじやございませんか」と促されても、「うるさいなあ、わかってるよ」となかなかおみ腰が上がらなかったのだ。

そうこうするうち、二月堂では着々と行が進み、余すところあと二日という夜になった。「遠敷さんはとうとう来られなかったねえ」と神さま方が話しておられるところへ「ど

うも、どうも申しわけない」という声をして、遠敷明神があたふたと飛んで来られた。

「つい趣味に夢中になる性分ですてな。わが若狭にはおいしい魚がたくさんおりまして」とお国じまをひとくさり。

「それにわが若狭は水も飛びきり上等でな。

あ、そうじゃ、お詫びのしるしに「ご本尊へお供えする水を私にプレゼントさせて下さい」

帰ってから空きビンに詰めて宅急便で送ろう、などとおっしゃらなかったのはさすがである。遠敷明神は二月堂の石段をおりて行つて何やら呪文をつぶやかれた。すると前の石が二つに割れ、中から白と黒の二羽の鶴が飛び出したかと思うと、清水がこんこんと湧き出した。かの鶴の瀬の水であった。

以来、毎年三月二日に、若狭では遠敷明神の思召しに添って「お水送り」の行事をおこなう。若狭彦、若狭姫の神像を祀る神宮寺で法要のち、大勢の人たちが行列をとのえて鶴の瀬へ行く。持参した「送水文」を投げ入れると、急に水かさがへって瀬音が絶えるといわれ、遠敷川は「音無川」の別名も持っている。

送水文に従って、水たちは地底をひた走り奈良へ奈良へと流れてゆく。目ざすは二月堂の若狭井である。こうして届けられた遠敷川の名水が仏さまに供えられ、お水とりの行事が全て終れば、近畿一円の花の季節ももうそこまで来ている。



松岡三吉氏を悼む

川竹 松風

一月二十一日の朝、家族の方から電話で急逝を知らされた。その時、私は二、三度聞き返した位でただ啞然とした。肝臓障害で逝かれた松岡三吉（六十一歳）は五十六年川柳塔同人になり、現在川柳高知の一般吟の選者でもある。六十年五月入院され、十二月退院してから毎朝、奥さんと山道を散歩されてすっかり元気をとり戻し毎月の例会にも出席されていた。今年一月四日少体の具合が悪いと聞いたので十二日、私は見舞に行き約一時間位雑談をして帰った。その一週間後の訃報である。

二十二日の告別式には多くの弔電が寄せられ川柳高知並に帆傘川柳社から多数の柳人が参別してご冥福をお祈りした。

ほほえみの遺影悲しい野辺送り 松風

私の好きな三吉さんの句を掲げて、ありし日の名を偲びたい。安らかに眠り下さい。

低姿こんな無難な事はない

正月三日芋虫ごろごろしています

親馬鹿という幸せを子は知らず

里いもの味おふくろは達者かな

充電の一升ビンが減つてゆく

松岡三吉さんを悼む

赤川 菊野

三吉さんの急死の知らせを聞かされたのは一月二十一日の早朝の事でした。松風さんから沈んだ声でびくりしなやと前置きされて死を知らされたのです。あまり突然の事だったので一瞬耳を疑い何度も聞き返したものです。

一昨年結核で入院され一年余りで健康をとり戻され忘年会にはあんな元気なお姿を見せて下さったのに、もう此の世にいないなんて今もって夢を見ている思いです。

三吉さんにはお二人のお子さんがあり、今は二人とも結婚し、それぞれ独立され、定年後はご夫婦二人きりで悠々自適の生活を楽しんでおられました。これからが第二の人生という時だけにご家族のお気持をお察しすると言葉もありません。最近はお夫婦でジョギン

グを楽しんでおられたようです。その時の句でしよう

死んだら損とも思う散歩道

不断はとっても口数の少ないおとなしい方ですが、お酒が入ると唄も出るし、三吉さん独得の踊りで周囲を楽しませてくれました。またこんなこともありました。

仲秋の名月には桂浜で大町桂月の酒供養と川柳の会を行います。三吉さんは毎年出席され何時も賞をとっておられました。ある年の事、とっても酔っぱらわれ帰りのバスの中で寝込んでしまいバスが終点に着いても仲々起きる様子がありません。運転手もこままってしまい、バスを車庫に入れる時間もあるので、もう警察にお願いする外はないと言われるので私も仕方なく一人で帰って来ましたが、気になるので翌日お電話すると、その夜の内に息子さんが迎えに来られたとの事でした。そんなことも今は想い出になってしまいました。お酒のお好きだった三吉さんらしい句がたくさんありますが、その中から

とつくりが転んだように父が寝る

盃よりコップが似合う飲み仲間

大晦日夫婦けんかをしています

年金の暮し駆けつかなどはしない

飄々とした句の書ける方でした。高知の川柳界にとっても惜しい方を失いました。残念です。ご冥福をお祈り致します。合掌

1987年

新年おめでとつ会

1月15日・大成閣

大抵の方々は七日の本社句会で新年のご挨拶を済ませているのに、ついまた「おめでとつ」と言ってしまう。そんな改まった感じが正月らしく、句会とは違った愉しさである。心齋橋筋を東に入ったこの辺りは、近くにアメリカ村やフランス村があり、若者のタウンとして近年、随分変わってしまった。テント張りのウィークエンド・マーケットなどが出ていて結構、賑わっている。

柳宏子さんの司会で午後一時半開会。栗主幹があいさつ。柳太さん風邪のため代役の薫風編集長が、古川柳に見られる正月風景について話をされた。兼題「歌」「木」の披露で第一部終了。

司会が天笑さんになり、懇親宴は土居耕花さんの音頭による乾杯で始まる。プロ顔負けの上手から、そうでない人までバラエティ豊かなカラオケ大会は、篠山の可住、米朝さん

を中心とする「デカンショ節」の大合唱でクライマックスに達し、太茂津さん発声の万才三唱でめでたくおひらきとなった。閉会午後四時半。(史好記)

「歌」

河内 天笑選

小学校唱歌が風に乗ってくる
大和路も初春 万葉を口ずさむ
夕やけこやけ歌は国境こえてゆく
詩吟朗読 満天の星冴えわたる 笠鳴恵美子
一曲がヒット新人雲に乗る
新婚の歌うがよくな電話口
音痴とは思っていない父の歌
十八番です三味が合わしてくれてはる
相聞歌恋の相手にほど遠い
上手より下手に拍手の多いうた
新しい歌でも姑に負けている
故郷の小川唱歌のまま流れ
軍歌なら一番だけは知っている
ジャンケンに勝つても負けても歌ってる 英子
デュエットをしてから仲を疑われ 笠鳴恵美子
血の通う息子と歌う歌がない
かあさんの歌をつたと雪が降る
山の父山に宿す木挽歌
埋立ての浜に漂う貝の歌
バスツアー歌の上手な人ばかり
港町哀しい歌が吹き溜る
労働歌 構造不況は救えない

藻 介 一三三 藤子 千万子 光子 妻子 太茂津 鬼遊 天鳳 景子 三男 英子 史好 完司 妻子 いさむ 笛生 英子 洋敏

耳底に亡父の軍歌が生きている
君が代の歌で生き抜く北の島
音痴よし蛮声もよし反戦歌
替え歌を一つ覚えて従って行く
数え歌ゆつくり故郷匂わせる
ナツメロへ母は娘の顔となり
年末の歌かと第九尋ねる子

君が代を無理に歌わせようとする
ケ・セラ・セラ風が教えてくれた歌
語り継ぐ母の在所のはやりうた
防人のようにたぎりつ相聞歌
衣食足り黒人霊歌聴いている
傷ついた心に歌がしみ通る
ボランテアにお呼びがかかる妻の歌
歌うまくやくり上手の妻がいる
孫のギターでフォークソングをならいます
反対を押し切って出るのど自慢
父男には時効にならぬ歌がある
飽靴が鳴る歌をどこかへ置いてきた
因嫁入り歌一つそれから父黙る
満開の水仙春を合唱す

「木」

藤村

女選

桐植えて嫁ぐ日夢みる初節句
うつり香もほのかな母の桐ダンス
人も木も耐える季節をもつ掟
釘打たず巨木で組んだ古い寺
家建てる人と来ている植木市
金の成る木がメルヘンの園にある

美緒 美津枝 楓楽 登志実 和友

柳宏子 寿恵子 楓楽 耕花 女 千万子 光子 鬼遊 泰子 里子 年代 史好 射月芳 景子 勝子 藻介 てる 完司 耕花 天笑

凶と出たみくじだまって木に結ぶ
梅古木迎春の名で活けられる
明日会う約束リングの木の下で
縄のある樹に絶えぬお灯明
初風呂に木の香ただよう宿の桶
丸木橋渡れば祖母が待つている
枕木に疲れた声が落ちていた
もう母の手は作ることない木の芽あえ
大木になろうと少年村を出る
石も木も語らず戦さ遠くなり
あすならあすなろと児も木も育て
神木のトンドを囲む煩かむり
雪が舞う北山杉は寡黙なり
家守る与作の父は木を植える
木簡に天平の恋生き続け
已さんが住むという木に注連を張る
山の木に先祖の温い血が通う
木の芽吹く頃は少年鳥になる
名人の腕は木目にさからわす
香木をけずれば観音さまいます
背戸の桐簾笛で孫についてゆく
ひよし木が入り三役そろいぶみ
高い木に憧れを持つうちの孫
ひのき伐る太郎と次郎たつ舞台
拍子木のひびき凍てつく火の用心
神の木と言われ道路を迂回させ
よろこびも悲しみもある冬木立
止り木の雀は同じ趣味を持つ
新築の庭に根付いた故郷の木

三男 登志実 射月芳 景子 天鳳 君子 いさむ 冬葉 金太 史好 シマ子 千万里 笠嶋恵美子 射月芳 妻子 杜的 はつ絵 いさむ 藤子 安藤寿美子 君子 笑女 英子 諷人 千万子 三男 三男 いわゑ 池田寿美子 光子

大成閣のおあきさんと某主幹
「いつもお世話になります」



年輪の数だけけやきに艶がある
人間の業焼きつくす護摩木積む
背信の積木くずしに冬の刑
合格を願うて絵馬の木が香り
横風呂の肌から貰う母の愛
賑わいの木で頑固さに支えられ
お隣へ迷惑かけて木の葉散る
新春に嬉し木の香もマイホーム
床柱半世紀住む艶を撫で
銀杏並木御堂筋にも四季がある
(盆裁の松でいじめに堪えている
幽幸せな木で仏像となる余生
因檜の木の下に童話が落ちている
太陽の直下 木蔭に恋がある

泰子 美房 冬葉 さと美 英子 笛生 白浜子 柳宏子 維久子 萬的 萬生 楓子 芳子 女子

〈出席者〉

西尾菜・上田登志実・西出楓楽・橘高薫風・堀端三男・野村太茂津・垂井千寿子・塩満敏福本英子・平井照子・藤田泰子・田形美緒・中尾漢介・西川景子・池田寿美子・氏林洋敏河内天笑・河内月子・神谷凡九郎・江辺天鳳吉田笑女・藤村笑女・藤井二三・高杉鬼遊黒川紫香・土居耕花・朝山千世子・千原理恵山崎君子・大坂形花・西口いわゑ・小林妻子女奥田みつ子・矢田寿恵子・上原逸・河瀬芳子川元いさむ・春城武庫坊・春城年代・渡部さと美・高橋千万子・和田維久子・茂見よ志子古川美津枝・斎藤三十四・笠嶋恵美子・山田里子・稲葉冬葉・西田柳宏子・小林トメ子・宮口笛生・中原諷人・川島諷云児・遠山可住脇田米朝・秋元てる・松川杜的・辻白浜子・林はつ絵・小林由多香・新家完司・久保和久阿萬萬的・両川洋々・吉岡美房・岩本雀踊子藤岡花梢・堀江光子・谷垣史好・宮崎シマ子安藤寿美子・高須賀金太・宮園射月芳・佐藤藤子

吉田笑女さん(宝塚市)より
金一封拝受致しました。

川柳塔社

初歩教室

題——平行

阿 萬 萬 的

今月課題「平行」に対して音は同じではあるが意味が全く違う「平衡」を句にされている方が二、三見受けられました。

新人類平衡感覚何処へやら
子に中心持たれ平衡たもつて
天敵がいて平衡が保たれる
さて本当の平行に入るのですが、やはり気になるのは米ソの対立らしく、
平行線とどこまで続く核配備
人間が壊す地球の平行線
(核配備の平行神様怒りそう)

平行線更に遠く北の海
ソ連とは地の果てまでも平行線
(北方四島どこまで続くか平行線)
核持ち込みの論議平行線のまま
東欧の土産に米ソの接着剤
世の中をうつまく行くものでしょうか、政治というものは不可解なもので、
与野党の一致するのは歳費だけ

勝 美
た だ し
明 吉
喜 志
太 一 郎
昭 治

右左平行しているうちがよい やすお

(どこかで平行しているらしい右派と左派)

減税と課税相互に睨み合う 一 郎

(減税と課税平行線ひらく)

平行線だんだん罵声じみしてくる 保 夫

春闘、越年労使交渉にはつきものの…

平行線無理には曲げぬ余裕見せ てる

結論を出すには早い平行線

(ぎりぎりまでねばる気労使の平行線)

平行議論どこかで一致見つけたく ツヤ子

平行は半ば理解の相通じ しんじ

根廻しが平行線を折り曲げる 白 峰

(根回しという手 平行線曲げる)

平行のままで労使は晦日そば 鉄 治

だが男の平行線は酒と女でとけるらしく

押し問答平行線で酒にする 重 信

平行線のままの話で屋台酒 実 男

平行線酒が出てから歩み寄り 新 造

平行の議論女ですぐ終り 周 三

(平行の論手打ちの酒がいり)

恋には平行線はつきもののようでした

押せば引くゲームか平行線の恋 てる

コヒーは飲むが平行線まだ続き 豊 太

すれ違う言葉と愛も平行線 房 子

接点の無いまま走る電車道 白 峰

(接点の無いまま君と僕の道)

言い訳が平行線のままとなり 久 子

何時までも君子の交わり平行線 輝 月

どこまでも折目正しい平行線 信 子

(理性とは悲しや恋の平行線)

フラットクラブ平行のまま幕を閉じ

平行線破る小さな写真立て

だが恋の平行線も崩れる時があるらしく

情熱に平行線が崩れ行く

平行もいつか交ると賭けた恋

平行が崩れ不倫の名で呼ばれ

平行線ブライド認め合いながら

男にはブライドだけの平行線

(ブライドが邪魔して平行線の恋)

さて結婚してみると男と女の平行線にも

平行の絆守って共稼ぎ

平行線虫を殺してついで行く

平凡に生きて平行たもつ妻

(照る日曇る日平行線の妻がいて)

年をとり妻も負けん気平行し

(妻の座のゆとりと平行する強気)

離婚にもならずもつれた平行線

足早の我に追いつき妻平行に

(足早に妻追いついて歩を合せ)

別々にテレビ見ている平行線

ケセラセラ話の合わない夫婦です

考えが違ふ夫婦のウン十年

(少々はずれても夫婦の平行線)

趣味多忙平行線が狂い出す

夫婦だからつかず離れぬ旅がいい

聞き役が上手で平行保ってる

話まだ平行のまま鍋がこげ

平行線の議論へ妻がお茶を入れ

遊 光

た かし

輝 月

春 枝

兼 治 郎

芳 水

保 夫

慶 子

凡 太

太 郎

美 恵 子

重 信

喜 代 子

しんじ

博 子

昭 治

山 久

円 女

金 吾

実 男

信 子

(平行の絆に妻の熱いお茶)

五十路越しかけ声だけの平行線

平行路金婚までをあきもせず

点と線結び平行線歩く

(夫唱婦随平行線でつつがなく)

八十路向け手に手をとって趣味に生き

(老いの日々趣味の夫婦へ陽もぬく)

嫁と姑の中にも色々の平行線がありまして

平行線のお蔭で嫁ともめもせず

姑との平行線へ夫無口

孫できて平行線も交差する

なさぬ仲平行せぬよす気を使う

(距離置いてなさぬ仲です気を使う)

子供達の成長にも色々とき苦労があつて

学校と塾平行になつてゆき

教育と義務に挑むバイオニア

膳立てが過ぎて一本線が切れ

アメとムチ上手に使う棒グラフ

平行に仕事と遊び使い分け

しかし子供も成長して来ると

靖国の重みが違う祖父と孫

平行線結局親父が折れる破目

子と大人年は平行で知恵越され

(年の差は平行だけ追いつかれ)

子との距離今日の平行守りたく

(平行線の距離で見ている子の育ち)

接点を捜すの下手な似た親子

兄弟も平行線で仲がよし

(兄弟の絆平行線でよし)

恭昌
喜与志
太郎

明吉

円女

春枝

鉄治

千代女

兼治郎

志重

一房

泰子

勝美

正之

方子

泰子

一病が癒えず老化の平行線
息災と平行線で金が無い
どこまでも貧乏神と平行す

(貧乏神と平行それでも意地を持つ)

リハビリー平行棒がただ頼り

だが平行線も続く退屈なもの

平行線たどれば元の道に出る

平行線続けば他人が口を出し

平行を見れば気分が遠くなる

平行が続く刺激のない歩幅

平行線たどって痛みの多い日々

平行に歩いて左右の靴のへり

居眠りはしないさ平行保つのみ

(平行線たどりちよびり眠くなる)

人生というもののあらゆる処で平行は崩れて

平行の入社試験に七光り

(平行の筈の入社へ七光り)

均等法平行に進まん事もある

(均等法の条文通りとは行かず)

平行に世の中泳いで出世せず

(飲む量も平行互いに出世せず)

さて川柳人の眼は色々の方向に向きます。

平行線引いてあるのに垂む文字

平行に隣もブロック塀を積む

ふる里との距離を保つて盆と暮

平行に並んで球児涙する

平行棒手を貸してやるお下げ髪

平行する鉄路の錆へもつ哀詩

平行線今夜の月がついてくる

遊峰
章久
周三

博子

義男

慶子

東雲

克子

志重

三千子

久子

吟平

克子

東雲

悦子

はるお

美恵子

新造

サワ子

喧嘩風平行崩して糸を切る

魚類等の集団遊泳みな平行

(田形水槽魚群平行して泳ぎ)

繁栄の街平行に川汚れ

母の朱どっさりハウスの平行線

(平行線にズラリとハウスの苺畑)

夕映えに下界見ているツインビル

平行に歩かぬ蟻の持つ安堵

平行の飛行機雲へおびえた日

海と空平行の美へ船進み

平行の五線譜で第九奏でくれ

(五線譜の平行第九で年が暮れ)

白砂で蟹が画いた平行線

(干潟のどかに蟹が歩いた平行線)

平行に波がゴミ置く海岸線

黄土高原天に交わる平行線

(黄土高原視界を区切る平行線)

以上で終わりますが、添削の際、原句と意味

が多少変つてしまつたものもあります。ご了承願ひたいと思います。

◇

題「蝶」

3月10日締切(5月号発表)

ハガキに5句以内

「土」

4月10日締切(6月号発表)

宛先 千598

泉佐野市中庄一〇八一—九九

阿萬 萬的

繁男
正之
章久

よし津

遊光

よし津

サワ子

千代女

繁男

露芳

吟平

てる

芸

福本英子選

芸の無い男まんじゅう食べている 重人
玉乗りの少女に悲しい過去がある 寿恵子
やつと陽を浴び下積の芸実る 奈美子
芸の筋よい子月謝が遅れがち 清芳
ロボットが芸を盗みにやって来た 成人
墓所まで続く伝統芸の道 虹汀
笑わせるピエロの芸に泣いた過去 朴竜
芸の無い男で箸を離さない あき
一芸の奥に展がる天の道 はつ絵
肩書きをはずし一芸披露する 久子
とつとさの芸を他人に先き越され 正子
裏芸がうけて出世の中にある 山久
芸の道終着駅のない歩み 凡太
芸の無い男が宴の隅に居る ちよ
芸人の目に突き刺さる大欠伸 白峰
道楽の果て芸人の芸の幅 克子
杵の中だんだん無芸になる怖さ 森脇和子
芸ごとに老舗を捨てたはぐれ鳥 代仕男
父子の情入れてはならぬ芸の道 サワ子
腹芸も巧みになった宮仕え 緑良
芸仕込む犬と張り合う根くらべ 千秀
こつそりと稽古してきた隠し芸 保夫

馬の足にも芸人の自負がある 諷云児
妻子には見られたくない隠し芸 鉄治
芸ごとに凝つてのれんを書き替える 紀雄
窓際に座つて芸がうまくなる 保
芸で身を立てる女の帯の位置 京子
仕込まれて猿は貰いがうまくなる 枯梢
芸術の森でピエロが見る迷い 雄々
一芸に徹する男の心意気 隆積
宴会の芸で自虐の宮仕え 優
これというおはこないまま多種多芸 米朝
独楽の芸廻しつづける人間味 美穂子
母ちゃんを泣かせた芸だとは言わぬ 芳子
一芸に秀でて雨漏り気付かない 妻子
人形を逆さに抱いて猿の芸 静子
くやしいが飯の足しにはならぬ芸 弘朗
住
節高の十指無芸を恥とせず 文平
芸をする猿が悲しい目をしてる 雀踊子
捨てられた犬一つだけ芸ができ 明水
天の芸地の芸宇宙に四季がある 元江
芸の鬼まばたき一つ咳一つ 幸
人
津軽三味雪は下から舞い上る たず子
地
もう少し酔わねば出ない父の芸 可住
天
マジシャンの指が少うし病んでいる 宵明
軸
今日の芸終る君が代聞きながら

運

神原秀子報

渋柿の運命裸にされ吊られ 義美
人間の努力に運の神も負け ちよ
開運の札売る巫女の無表情 正敏
強運の暦で買ったはずれくじ 明美
運命を糸で支える下り蜘蛛 きよし
細い蔓いんな運がついている 実
泣きよりも笑い上戸が運がいい 夢酔
運 天に帰る御神火いぶる里 どんたく
もりもりのあんだに運が味方する 豊
運不運のりこえ来ました共白髪 ひとり
運勢が向いて人にも振りむかれ 有一郎
散る花に運命論者の詩がある 多賀子
運の来る樹を庭中に植えておく 三五島
水引に小さな運が詰めてあり たつみ
福運を信じる男のつかい耳 勝美
運強い虎を一匹飼つておく 島
遅刻して事故の車に乗り遅れ 満津子
円高へ社運の影が延びてゆく 明水
線一本引かれた地価の運不運 純子
塞翁が馬だよ父の苦笑い 虹汀
運のいい時の感謝は忘れられ 弘朗
運命と割り切れないでいる慕情 文平

軸　　軸

柳界展覧

集録・板尾岳人

★62年度川柳高知春季川柳大会

日・3月8日(日)AM10時30分

所・高知市文教会館

表彰・黒潮賞受賞者を表彰

宿題・友・電話・捨てる・

似る・区切り・大衆・

良心

席題一題 3句

投句料300円(切手可)

締切り3月5日

投句先〒780高知市大川筋一

一三二九 高知川柳社

★橘高薫風・寺尾俊平・時

実新子・同期の桜出版記念

句会

日・3月8日(日)12時30分

所・兵庫県私学会館4F

国鉄元町駅東口北へ50米

愛

橘高薫風選

兼題「道」

奥 豊介

門 寺尾俊平選

各2句・締切り13時

会費 二千元 投句拝辞

記念講演 俳人・文芸評論

家 坪内稔典氏「俳句から

みた川柳」

★「創」創立3周年記念川

柳大会

日・4月26日(日)AM10時

所・電気文化会館5F(名

古屋市中区伏見)

遠い大野風柳選・扉須

田尚美選・喜劇尾藤三柳

選・傘雨宮八重夫選・亀

渡辺和尾選・峠北川絢

一朗選・遊ぶ安井久子選

おんな定金冬二選・蝶

荒木秋栄選・剣神谷三八

朗選

★柳展望50号大会

日・8月2日(日)AM10時30分

所・セントラルホテルフク

オカ(福岡市中央区渡辺通

四丁目)

会費二千五百円

話の饗宴60分田口麦彦・

住田三結・助川助六

席題

兼題「道」

奥 豊介

門 寺尾俊平選

各2句・締切り13時

会費 二千元 投句拝辞

記念講演 俳人・文芸評論

家 坪内稔典氏「俳句から

みた川柳」

★「創」創立3周年記念川

柳大会

日・4月26日(日)AM10時

所・電気文化会館5F(名

古屋市中区伏見)

遠い大野風柳選・扉須

田尚美選・喜劇尾藤三柳

選・傘雨宮八重夫選・亀

渡辺和尾選・峠北川絢

一朗選・遊ぶ安井久子選

おんな定金冬二選・蝶

荒木秋栄選・剣神谷三八

朗選

★柳展望50号大会

日・8月2日(日)AM10時30分

所・セントラルホテルフク

オカ(福岡市中央区渡辺通

四丁目)

会費二千五百円

話の饗宴60分田口麦彦・

住田三結・助川助六

席題

兼題「道」

奥 豊介

門 寺尾俊平選

各2句・締切り13時

会費 二千元 投句拝辞

記念講演 俳人・文芸評論

家 坪内稔典氏「俳句から

みた川柳」

★「創」創立3周年記念川

柳大会

日・4月26日(日)AM10時

所・電気文化会館5F(名

古屋市中区伏見)

遠い大野風柳選・扉須

田尚美選・喜劇尾藤三柳

選・傘雨宮八重夫選・亀

渡辺和尾選・峠北川絢

一朗選・遊ぶ安井久子選

おんな定金冬二選・蝶

荒木秋栄選・剣神谷三八

朗選

★柳展望50号大会

日・8月2日(日)AM10時30分

所・セントラルホテルフク

オカ(福岡市中央区渡辺通

四丁目)

会費二千五百円

話の饗宴60分田口麦彦・

住田三結・助川助六

席題

兼題「道」

奥 豊介

門 寺尾俊平選

各2句・締切り13時

会費 二千元 投句拝辞

記念講演 俳人・文芸評論

家 坪内稔典氏「俳句から

みた川柳」

★「創」創立3周年記念川

柳大会

日・4月26日(日)AM10時

所・電気文化会館5F(名

古屋市中区伏見)

遠い大野風柳選・扉須

田尚美選・喜劇尾藤三柳

選・傘雨宮八重夫選・亀

渡辺和尾選・峠北川絢

一朗選・遊ぶ安井久子選

おんな定金冬二選・蝶

荒木秋栄選・剣神谷三八

朗選

★柳展望50号大会

日・8月2日(日)AM10時30分

所・セントラルホテルフク

オカ(福岡市中央区渡辺通

四丁目)

会費二千五百円

話の饗宴60分田口麦彦・

住田三結・助川助六

席題

出句先 下470-21愛知県知多郡東浦町森岡字下今池5-69

★第18回川上三太郎賞作品募集
雜誌5句(未発表句)

21cm×18cm変型版横綴上製
本241頁箱入り

定価九八〇円(下二五〇円)

■篠山町の文化賞(三宅剣龍賞)を本社同人遠山可住氏が篠山町教育委員会より受賞された(川柳部門)

★第3回川柳韻社誌上句会
種一(神谷三八朗・海地大破)手一(藤川良子・村井見也子)朱一(石川重尾・荒木秋栄)各題別紙2句

審査 佐藤正敏・河口弘・寺尾俊平・大野風柳
投句締切り4月20日着

作品集で知性と感性で人間を探る川柳句集でもある。

定価三千円

■61年度わかあゆ賞表彰わかあゆ賞

投句料千円
956新津局私書箱15号
柳都川柳社

▽出版紹介△
口句集「葦川」寺尾俊平著

申込み 700岡山市西大寺中3丁目17-19 寺尾俊平宛
口川柳を始める人のために

「新子の川柳入門」
(同準賞)

細木 歳栄

締切り5月10日 投句料千円
投句先 下915武生市松森町三四 川柳韻社

口句集「葦川」寺尾俊平著

申込み 700岡山市西大寺中3丁目17-19 寺尾俊平宛
口川柳を始める人のために

「新子の川柳入門」
(同準賞)

細木 歳栄

松本文子作品集「渡り鳥」

出版祝賀川柳会

日時 昭和62年3月29日(日) 午後1時

会場 出雲市生活センター2F

兼題 通称結婚式場(出雲市役所西隣)
故郷 繁々 ほのぼの 湖

席題 2題 各題2句

会費 二千元(祝賀宴共)
投句 参加料三百円 投句先 下六九三

出雲市松森下町二八四吉岡きみえ宛
前々日迄に届くよう

主催 いずも川柳会

松本文子作品集「渡り鳥」

B6判特製箱入り 一三八頁

序文/尼縁之助 跋文/山根皋人・堀江芳子

川柳篇(「追憶の詩」「望郷の詩」)

短歌篇 詩篇

頒価千円(送料一五〇円)

発行所 いずも川柳会

◇申込み先

島根県八束郡宍道町宍道三八五一二

松本文子

電話 0852(66)1981

故岩田美代さん(富田林市)

御遺族

夫 正男氏

長男 正美氏 より

次男 時哉氏

金一封を頂戴致しました。

(御香典返しとして)

サークル檸檬

堺川柳会

駒つなぎ川柳会

富柳会

川柳塔社

本社 二月句会

二月七日(土) 午後六時

メンズフアッションセンター

今月は都合で7階が会場 阿萬萬的氏のおはなしは、大和飛鳥にある飛鳥坐神社で二月の第一日曜に行なわれる天下の奇祭「おん田祭」について。この種の祭は他に愛知県の大泉神社、大和桜井のすきのお神社等にもあるが、昔は村人だけの厳肅な豊年万作を祈る儀式であったのが、近年は観光の対象となり、野次馬根性の人達であふれ、交通整理まで出る始末、と嘆かれる。

初出席は松田荘之助、菱木淳一、頭師隆、長江時子の四氏。

呼名賞は奥田みつ子、長江時子、松田荘之助の三氏。

今月の月間賞は正本水客氏が獲得。

(進行)柳宏子(受付)はつ絵・いわゑ

(記録)金太・健司・一二三

出席者―杜的・白溪子・諷云児・柳宏子・紫香・幸・春蘭・狸村・雀踊子・武庫坊・年

代・笛生・はつ絵・いわゑ・池田寿美子・一郎・佳秋・萬的・柳影・重人・白峰・太茂津水客・敏・勝美・英子・眉水・章久・庸佑・白兎・喜風・千賀子・凡九郎・隆二・あいき千代三・隆・律子・メ女・金太・悦郎・規不風・三十四・元紀・時子・栗・山久・作二郎東雲・三男・藤子・月子・史好・勝晴・幹齊楓楽・正坊・文秋・射月芳・泰子・一二三・度・英壬子・智子・柳伸・浩一郎・莊之助・淳一・吸江・美代子・みつ子・薫風・鬼遊・健司・頂留子・冬葉・美房・吐来・岳人・寿子・形水

席題「玄関」

前川 千賀子選

玄関で不意に家出がしたくなる
英子
玄関を出ると戦う貌になる
金太
玄関に一度とめた春の馬車
元紀
玄関の梅も吉報待っている
藤子
玄関ですでに気後れしてしまふ
藤子
ハンサムじゃないのと玄関から覗き
一二三
玄関のムードが違う月給日
雀踊子
丁重な挨拶玄関払いです
柳宏子
玄関のカニシヤボ去年のままの位置
杜的
玄関に家風が匂う師の色紙
千代三
玄関に人を疑う窓がある
幸
玄関に明治の沽券という草履
太茂津
とむらいの靴玄関を賑やかに
作二郎
料金も高うおますという玄関
柳宏子
玄関の敷居が高い昼の月
年代

玄関でそつと手渡す子の無心
佳秋
玄関の靴を叱って父帰る
美房
玄関に豆のころがる春立つ日
みつ子
玄関に敵も味方も出入する
岳人
玄関で待てば金魚が慰める
射月芳
妻の留守玄関ベルを切って置く
白峰
エイズ上陸海の玄関揺れ動く
壯之助
玄関の時計は少し進めとく
隆
棒グラフ玄関払い恐れない
淳一
玄関の靴のならびにスキがない
幹齊
玄関へ来て耳打ちをくり返す
水客
玄関で一枚撮るも旅のこと
笛生
玄関のイワシを猫に盗まれる
はつ絵
玄関に繋がれている今日の耳
寿子
玄関で筋書きどおりに衿を立て
武庫坊
玄関を出れば他人になる家裁
諷云児
玄関に塩を撒きたい鬼が来る
射月芳
玄関の花一輪に救われる
時子
天寿静かに父が玄関出る櫃
金太
玄関でつまずき哀しい風と逢う
みつ子
春の玄関風も気軽に抜けてゆく
正坊
玄関で穴場聞いている宿浴衣
鬼遊
人は人わたしはわたしドアチェーン
月子
振り出しに戻す話を玄関で
美房
玄関で笑ひ袋の口を閉め

席題「サービス」

久保田 元紀選

甘酒のサービスが付く梅見バス
壯之助
バレンタインちゃんとサービスしてあげる
律子

サービスのおまけの方が気に入られ
死ぬまでは妻にサービスするつもり
サービスの良い娘が何故か売れ残り
約束の時間に届けようこばれ

サービスはいらないおかみの片えくぼ
サービスがよいのはきつと月給日
サービスのように産れた四番目
サービスにべんぴ薬をくれました
スベシャルサービスエイズの心配まで貰い
サービス品ばかり探している女
サービスの裏がだんだんこわくなる
花屋のサービス小さな花をまけてくれ
サービスが良すぎる店で買いそびれ
アフターサービス終わった頃に出る故障
サービスで女の部屋の釘を打つ
サービスにもらった花はすぐ枯れる
自分へのサービス御自分で出来ますか
サービスの裏が読めないかたつむり
サービスの卵の皮をむいている
種あかしはサービス過剰だとおも
サービスはきつちり入れた領収書
妻のサービスさては魂胆あるらしい
サービスがよいので油断してしま
サービスはいけどあとが怖かった
金持ちにいつもサービスしておこ
ふつと息をつくぬくいおしぼり
サービスをしとこう誕生日が近い
サービスでおとぎ話をしてくれる
サービスは決してしない京の味

三十四 幹 英 三十四 あいき 淳一 楓 岳 萬 狸 庸 眉 隆 幸 女 凡九郎 諷云児 健 司 幸 智 子 眉 水 金 太 勝 晴 白 兎 美代子 岳 人 時 子

サービスのつもりか褒めてくれている
サービスの水は黙って持ってくる
上夜の煙草ヘライター二つでる
ドアを締めた手からサービスが消える

サービスって何されたことおまへんナ
サービスにともだちの絵が貼ってある
女神のサービスか春が一日早くなる
角を曲るたびにサービスにつき当る
サービスをみんなにしているチンドン屋

兼題「蜘蛛」

河内月子選

一本の糸飛び蜘蛛の起工式
鴨居から蜘蛛がプランコして見せる
蜘蛛程の用心をして綱渡り
蜘蛛の巣がネオンの陰に張ってある
朝の蜘蛛下がるパチンコへ行こう
年頃の蜘蛛が怪しい糸を吐き
飾られて花瓶の中に蜘蛛が棲む
夜の蜘蛛おんなひとりをおびやかす
憎まれる蜘蛛にも生きて行く権利
おひきとり下さい夜の女郎蜘蛛
相性の悪さをなげく夜の蜘蛛
夜の蜘蛛しんげんな母の顔にあう
生きたため張らねばならぬクモの糸
街の蜘蛛巣を張るとこはきめてある
数学の嫌いな蜘蛛の一大事
愛に飢え情けにもろい蜘蛛の糸
何気ない素振り蜘蛛は飛びかかる
朝は吉夕べは凶にされる蜘蛛

智 子 重 人 度 白 兎 凡九郎 作二郎 時 子 白 兎 元 紀 敏 荒 介 妻 子 耕 花 吐 来 泰 子 幸 雀踊子 年 代 柳 伸 水 客 健 司 重 人 健 司 壯之助 吸 江 あいき

京都塔の会15周年記念句会

日時 昭和62年3月1日(日)午後1時
会場 京都府立南労働セツルメント
京都市南区西九条東比永城町
(猪熊通り九条下る)

近鉄京都線、東寺下車西250m
電話075(691)1234

兼題 塔 疊 歩く二階 手づくり
席題 一題 各3句
会費 一、五〇〇円(記念句集呈)

投句は60円切手3枚同封
〒601 京都市南区西九条開ヶ町四一―一
松川杜的宛

主催 京都塔の会

六道の怖さを蜘蛛は知っている
嫌われる蜘蛛もさだめに生きている
夫の背中に毒蜘蛛がへばりつく
難物へ蜘蛛は自ら糸を切り
蜘蛛の巣にかかったような恋である
愛されたときから狂う蜘蛛の糸
戦い済んでまた果作りに励む蜘蛛
台風の前触れ蜘蛛は店仕舞
誘いこむ蜘蛛の迷路を抜けられぬ
とら縞の蜘蛛はとつても戦好き

元 紀 時 子 律 子 柳宏子 いわゑ 柳 伸 時 子 射月芳 壯之助 度

蜘蛛の巣も破れたまんま過疎進む
 かかるまで待とう気長な蜘蛛の糸
 蜘蛛の巣にかかり違反車しばらく
 貧しさは言うまい蜘蛛も糸を吐く
 気まぐれに張ってはいない蜘蛛の網
 蜘蛛の巣へ悲鳴をあげたのは忍者
 マイホーム蜘蛛は獲物 wait っている
 蜘蛛の巣にかかっているのは私だろう
 蜘蛛死んでいつもの朝がまぶしくなる
 蜘蛛の巣をからかに来る蝶つゝ気
 逃げ足がとつても早い街の蜘蛛
 女郎蜘蛛ジャスミンを穴に撒いておく
 エイズより僕には怖い女郎蜘蛛
 美しい蜘蛛なら網に掛かりたい
 哲学もお経も蜘蛛の巣は笑つ
 核ボタン蜘蛛の巣張つたままでよい
 蜘蛛の身になれば人間おそろしい
 ゴキブリを食べてくれている蜘蛛が好き

兼題「合唱」 宮園 射月芳選

悦郎 柳宏子
 緑良 笛生
 麗水 正坊
 雀踊子 白兔
 太茂津 隆二
 佳秋 律子
 三十四 鬼遊
 柳伸 金太
 萬的 作一郎
 水客

大合唱の中にわたしも居たのです
 家中で合唱しようバラが咲く
 山小屋の合唱星が一つ落ち
 合唱の輪は温かい風になる
 消費税反対ばくも合唱す
 二部合唱温い言葉と抱き合つて
 合唱の同期の桜酔うっている
 合唱の中にアヒルが居て困る
 コーラスのつばがひとり音痴がひとり
 合唱の少女の夢は歌手という
 合唱の中で口だけ動かそう
 コーラスが下手でたんぽを出る蛙
 讃美歌の合唱お山は雪となる
 丸木橋渡るとみんな歌い出す
 合唱に調子はずれが一人居る
 流水の合唱となる春の海
 コーラスの一人視線がよく動き
 コーラスに行く日の妻は跳ねている
 キャンプファイアーその歌声へ月も出る
 勝つて泣き敗けて泣いてる応援歌
 赤絨絨庶民の合唱きこえるか
 軍歌合唱今年は仲間がひとり減り
 第九合唱いくさに遠い群れとなる
 野良猫の合唱春はまだ遠し
 難民の合唱神に届かない
 目立ちたい男合唱などしない
 君が代合唱サムライにはならぬ
 ファミリーコーラス不協和音の父がいる
 合唱になって白けた宴終る

年 代
 はつ絵
 一三三
 金太
 鬼遊
 荒介
 重人
 元紀
 作二
 三十四
 幸
 佳秋
 萬的
 杜的
 白峰
 どんたく
 柳宏子
 隆
 萬的
 柳宏子
 金太
 白溪子
 鬼遊
 健司
 壯之助
 月子
 水客
 水子
 水客

川柳わかやま

二百号記念川柳大会

とき 昭和62年4月5日

ところ 紀の国会館 2F

兼題

「愛」

小出 智子選

「星」

中田たつお選

「花」

黒川 紫香選

「男」

森中恵美子選

「面」

田中 好啓選

「女」

橘高 薫風選

特別課題

(事前投句・3月10日〆切)

「これから」

野村太茂津選

出句締切 一時(各題2句)

席題 なし・投句拝辞

主催 川柳わかやま吟社

合唱のひとりは窓の雪を見る

教会の場合合唱に馴れている

あおられてすぐ合唱をする愚民

兼題「氷(凍)」

玉置 重人選

作二

作一

射月

芳

一番の電車が氷つた儘走る
石仏の笑顔の中へみぞれる
冷凍が幅を利かせる台所
歯車のかみ合わせの筆凍てる
氷糞を取り替えたのが緑だった
軽はずみな妥協はしないアイスバーン
義理という氷最初に解けはじめ
流水軋む街へ流れて来た女
氷河とけ私の時計が動き出す
首たてに振った氷とけてから
カイロ二つ入れて流水見えます
氷雨降る鬼も暖炉を恋しがる
流水が去るとオロシヤの舟が来る
待たされて氷はかけられだけになり
マンネリを破れ破れと氷雨降る
歓声へカチ割り売る手止めて観る
オンザロック価値観の違い持っている
背信へ胸の氷は溶けぬまま
人質の声が途切れて氷点下
氷山の角が見えるとマスコミ騒がしい
氷りつく言葉の背に聞いている
占いを信じ氷が解けはじめ
軒のつらら悲しみ色の朝になる
氷解けだして魚を売り急ぎ
お隣のベットも氷が要る患者
氷温室老いのくらしにもて余す
廃線の駅へとめどもなく氷雨
大胆なボーイズ見られた氷柱花
遠い記憶に凍土がある生き残り

笛生 麗水 吐来 吐来 英子 白兎 緑良 時子 悦郎 寿子 智子 いわゑ 武庫坊 藤子 太茂津 庸佑 水客 楓楽 淳一 寿美子 水客 史好 作二郎 白溪子 白溪子 英千子 一二三 杜的 太茂津

水割りの氷が帰れと急ぎたてる
スーパで美味しい氷売っている
氷解ける別れ話とおしゃべりに
旅の終りに氷のはぜる酒を飲む
氷屋は寒いと言った事がない
一貫目の氷の嵩をおもい出す
凍っても溶けても島は返らない
願望は絵馬に凍結されている
こおる物みんな氷つた朝の妻
つらから一滴ずつの春がくる
スナックの氷が嘘を聞き分ける
シベリヤの凍土に落として来た涙
兼題「子供」 野村 太茂津 選

佳秋 美代子 作二郎 作二郎 耕花 年代 美房 水客 笛生 月子 重人 岳人 美代子 美つ子 眉水 狸村 寿子 三男 みつ子 智子 射月芳 時子 度 智子 博子 新造

妥協案子供だましとも思う
子供の瞳大人のするさ許してす
親馬鹿の私に二男二女がいる
流れ星親に叛いた子がひとり
粉雪に子供心を取り戻す
半生を充ててくれた子が果立つ
手を放し目を放さない子の躰
膝に寝る子に雪は静かな音になる
誘拐魔あなたの子供思い出せ
善人のあとを子供が従いて行く
子供らが描けばマンガになる大人
鍵つ子の根性いじめはね返す
子供等の意見朝から雪が舞う
童謡を唄う子供にもう逢わぬ
傷ついた鳩を拾って来た子供
ちぎれ雲息子が恋をしらしい
梅一輪今日は長女の誕生日
逆縁の子供を乳房恋しがる
神さまが見える子供の眼の高さ
子供部屋静かに爆弾作ってる
恐ろしいはなしを子供部屋
子に残す足跡だから迷わない
疑問符がともも好きな子供たち
桃の花ふいに子供がはしくなる
子供の影と良寛さんになっている
木枯しへ子供の背を突き放す

水客 柳宏子 雀踊子 美代子 荒介 時子 三男 作二郎 淳一 耕花 幸 柳伸 金太 英子 浩一郎 いわゑ みつ子 壮之助 幸 栗 月子 吸江 幸 藤子 水客 太茂津 (清記・楓楽)

■2月号76P下段
「代表を狙う男に隙がない」の作者は寿子。



締切毎月25日。必ず原稿用紙使用のこと。
作品は雅号も含めて20字まで。

担当・清水健司

東大阪川柳同好会 齊藤三十四報

お目出度う傘寿を祝い杖おくる
まだ杖に無縁自慢の八十路
白い杖器用に人波縫って行く
握手する片手に核の仕込み杖
チャップリンの杖はいくら知っている
リハビリの杖を上げます妻の愛
人生の杖が時折りそっぽむく
導いてくれる目がある白い杖
どん底を支える妻の強い杖
先人の足あと踏んで追いつく子
足あとを消して砂丘の朝となる
足あとを消して父の墓につく
足あとと落葉が消して十二月
リハビリの散歩の杖となる絆
らく焼に似顔絵描いて京の旅
足あとに警察犬の鼻が冴え
足跡はふたりに明日の灯をさす
絨織に足あとついて去る労組
内職の妻をいたわる手の温み

打吹川柳会 奥谷 弘朗報

子に頼る将来ばかり二歩さがる
生きがいの子の将来にある期待
長寿国将来孤独に堪えること
子の末を案じて父は容赦せず
出来ぬ子に将来かけて苦勞する
もつぐに兵隊さんのトラテテ
素直な子将来農を継ぐだろう
将来を見込んで放す婿養子
将来の希望が孫の眼に宿り
一冊の本が将来きめさせる
この孫の将来などは考えず
将来にかけて田地を売払い
将来はともあれ今日をフルベス
将来を占う易の灯が暗い
将来を約束されたなまけぐせ
将来のことは知らない自動巻
将来を親のわだちに重ねて見
将来へ直線ばかり引きたがる
バラ色の将来ばかり言う保険

三幸川柳教室 桜井 千秀報

靴擦れて名所旧跡うわの空
履きなれた靴で足元狂わない
被災地を新調の長靴視察する
取込み中右往左往の靴ばかり
チャップリンの靴に哀愁詰まってる
鉄冷えが安全靴を脅かす
靴ちびだけ伸びている棒グラフ
肩書が付いて言訳許されず
許す気になって煙草に火をつける
許さねば自分の傷が深くなる
客席に許さぬはずの父がいる

雄々 佳女 孝美 玉亮 山二 宗光 高代 幸枝 梅朗 康子 道子 幸子 柳風 白峰 温子 かつみ 節子 とみお 弘朗 千秀報 千子 周子 幸子 千秀 靖子 文子 百合子 忠昭 当代 みね 智水庵

七十五長いドラマを書きました
動乱のドラマに仕掛人がいる
トップスター犬の演技に引っぱられ
野良猫も一匹分のドラマもち
十人十色日々を紡いでゆくドラマ
合鍵が洒落たふたりのドラマ見る
お人柄一字一句に滲み出る
ひと言に二言三言返す嫁
一八〇下が一〇五で要注意
二死満塁三番原は凡フライ
一筆啓上三日かかった御礼状
まだ本音聞かれぬままの十三夜
三味の音に時雨の古都をゆく二人

静岡川柳同好会 永倉 僕川報
音信がなければ金の有る証拠
バス停へ駆け行く二人他人です
買いたくて喉まで手が出金不足
果の中で餌待つ小鳥愛らしい
奥の手を隠す予感の懐手
写経する老いの煩惱一つ消え
手抜きした中途半端へ目が光る
柔らかに牛肉よいけど値が嫌い
句を詠むを生き甲斐としてまた呆けず
やけ酒をあおって帰る腹の虫
片想いパンダに振られた入園者
落葉舞う風が帽子を追いつ廻し
鍵掛けて大胆に脱ぐ試着室
皺などは書かない孫の思いやり

城北川柳会 神夏磯道子報
孫が来て自由に上るわしが腹
元且も二日もテレビで目が疲れ
重次 隆行 和子 愛子 玉枝 千枝子 鉄治 邦郎 孝子 桂香 庚子郎 僕川報 重次 隆行 和子 愛子 玉枝 千枝子 鉄治 邦郎 孝子 桂香 庚子郎 僕川報

孫の絵が笑いかけてる初便り
親の気のあせり息子の嫁探し
職場から似合った相手探し当て
独身の日々もてあます炬燵中
退屈をまぎらすテレビ目が疲れ
退屈もさせずほど娘が使い
母さんの長い買物待つしびれ
分った貴方の本音つっこすぎ
母にだけ本音を告げる里帰り
それから聞きたい膝が前に出る
口上手なかな本音読みとれぬ

南大阪川柳会

中川

退陣のレールは味方が敷きにくる
退陣と見せる企みだつてある
退陣は出来ぬ陛下のソフト帽
惜しまれてする退陣は花道か
頃を見て譲ろう花道まだ明い
学校に近くていつもすべりこみ
地の利だけ言えは結構なことやけど
病院の前でメロンがよく売れる
駅前に住んで一汽車乗にする
地の利よし駅まで五分で遅刻する
袖の下包み奥の手考える

ザ・エンドすべてを闇に包み込む
善悪もやさしく包む仏の手
包むから余計疑惑が深くなる
喜びが包み切れずに顔を出し
何もかも包んで母の胃が痛む
デパートで包む戦さの十二月
自画自賛丁度程よい兎小屋
適当に鬼にも仏にも飲ます

山人 雅紅 邦人 英峰 知代子 美恵子 静香 保恒 虞人 秀香 滋雀 勝美 善信 しんじ 憲祐 智恵子 凡九郎 曲手 新造 三恵子 柳伸 柳宏子 頂留子 庸佑 春蘭 寿美 雅風 章久 浩一郎

自画像へ適当な色ばかり塗る
眼が肥えて来て適当な婿がない
適当にしてよと女酔うて居る
適当に長生きさせろ葉漬け
適当な答弁首相心得る
お化粧を落とすと消えている關志
年の瀬の關志は妻に笑われる
勝ち越しへ焦る關志の勇み足
権力に負けぬ關志の旗をふり

翠洋会

中西兼治郎報

熱くしてくれとうどんへ風邪が来る
OKも速女三人翔ぶ相談
妻翔んでしまつてひもが手に残り
お金より元気がほしい青い顔
高松駅発車間際の立つどん
見た様な顔あいさつをどうしよう
幕あいのきつねうどんに涙ため
とべないで饒舌になる鳶の鳥
うどん屋で親身に話さいてくれ
跳んで出たうさぎこれから正念場
脱ぎ捨てて女遠くへとぶ構え
花の種とんであの娘の庭で咲く
流暢すぎるあいさつ心に届かない
とんでいる女の紅いイヤリング
とんでも私の子です宝です
梅一輪春のあいさつだと思ふ
代読の祝辞なんともそつ気なし
元気が金の切れ目でしょげている
飛んだことあるにわたりの羽である
東京の野暮は素うどん一つにも

川柳ねやがわ

高田 博泉報

楓楽 文秋 覚然坊 公一 綾珠 重人 外吉 喜風 慶三 兼治郎 美津枝 さと美 東雲 仙吉郎 満女 文子 君子 春子 良江 照子 為子 楓楽 光子 綾子 みつ子 登志美 鬼遊 薫風

近畿文字放送作品募集

題「酒」 橘高薫風選

3句 締切 3月15日

ハガキに明記の上、左記へご投句下さい

〒540 大阪市東区谷町2丁目36

大手前ウサミビル3階

近畿文字放送 川柳係

みおつくし鐘のひびきにある情
走馬灯渦をまきまき通りすぎ
旅なれば濃い口紅も気にならず
ジングルベル遠くに第九聞いている
お見合いに故郷へ帰れと急かされる
温泉地娯楽一番お湯二番
半分は捨てる葉の順を待つ
横綱もたまには負けて盛り上り
人妻と火を噴く山を見上げてる
野辺送り畔に小さな鐘ひびく
一病息災などと他人の無責任
実績の違い石垣崩れ出す
お見合いの実績だけは群を抜く
実績があるので無茶も通ります
錦着て見せたい故郷グムの底
忘年会きつしり女のカレンダー
まさみ なつめ 紀代 さかゑ 千鶴 吉峰 増造 権太 菜月 春吾 創手 曲手 勇太 藍子 波留吉 君子

晩鐘の音冬の山里凍らせる
実績は子供三人産んだだけ
電話一本札束がとんでくる
実績があつてときどき来るパート
帰省する今年最後になる列車
故郷の川は奇麗な儘で過疎
道成寺私も焼きたい人がある
七五三森の小人が鐘鳴らす
十二月タイミンク良く風邪を引き
父の座のシートベルトがきつ過ぎる
鐘鳴れば鐘つき堂に人がくる
危機一髪炬燵の上の置手紙
除夜の鐘妻は櫓を未だ解かず
飛鳥路を行けば飛鳥の鐘が鳴る
嫁はんきにきつう言われている息子
実績が伸びると舌が廻り出す
ほり炬燵に思い出がある二人です
鐘を打つへつぱり腰の音で鳴る
運命論主治医が持っている手術
ちいさめの幸せでよい鐘を撞く
極楽へ行ける程度の寄附をする
鐘の音へ宿の枕を裏返す
ポナスを数え直している炬燵
故郷は母の乳房が匂うところ
ワイキキの浜を夢見ている炬燵
風の子が炬燵に入り叱られる
望郷に泣いた都会の二十年
古都税のすったもんだへ鐘がなる
無人駅故郷は鍵の要らぬところ
減税と増税ふたつのクリスマス
実績を誰も言わない七光り

とし
あやめ
速水
かすみ
光子
章
シマ子
静江
てまり
良三
まさお
一笑
晴風
一途
冬葉
博泉
三郎
亜成
英壬子
吉之助
鉦平
三千子
三千子
鬼女
敬山
亜也子
亜鈍
小路
静歩
あいき

世間並みせわしい顔もする師走
廃線に故郷虚しい月が射す
近頃は寺まで実績などと言う
とんだばやし富柳会 池
今掃いた庭に隣の葉が落ちる
投げた石落ちて波紋の輪を広げ
地に落ちて洪柿やつたと安堵する
トランベツで泣けば夜空の星が落ち
どん底に落ちて心の奥を知り
句作りの苦勞もたのし老いの杖
初恋を語るには手が汚れすぎ
初恋の錆びついている薬指
一ランク落して無理のない余生
おっとりとした嫁きけば旧家の出
苦勞してすわった椅子でまた苦勞
栄枯盛衰旧家を語る鬼瓦
初恋は余韻のこして遠ざかり
柿熟れて落ちると母の冬が来る
風呂敷の紋に旧家が背伸びする
初恋はまだ桃色のままで古い
台所だけは改造してある旧家
あのころは苦勞でしたと笑う皺
西宮北口川柳会 奥田みつ子報

柳宏子
紫香
薰風
市雄
義雄
曲ん手
花子
静枝
文子
文次
文次
伊庭勇
田中勇
森子
美房
岳人
富久一
花梢
柳太
正坊
凡九郎
照子
いわゑ
笑女
はつ絵
求芽

第10回

鳥取県川柳大会

日時 昭和62年3月29日(日)9時開場
会場 倉吉市上井 長生閣
(国鉄倉吉駅前五十米)
電話〇八五八(26)二三二三

お話
兼題
「湖」
「光」
「許す」
「先輩」
「じゃべる」
「馬鹿」

席題
2題 各題2句 締切11時30分
千五百円(作品集・軽食呈)
会費 二千円
投句先 鳥取県倉吉市西福寺町七二七
下六八二

懇親会
会費 二千円

投句先 鳥取県倉吉市西福寺町七二七
下六八二

第10回鳥取県川柳大会
実行委員会宛

主催 鳥取県川柳作家協会

残り時間ゼロになるまで句帖持つ
初参り内緒のたのみたのみます
還曆をゼロと見たててまだ五歳
ゼロからの出発でした共白髪
毛皮コート私に遠いゼロの数
背後から彼が近づくコンパクト
書道展先生と僕の名を見て帰る
肩書がとれて出て来た人間味
他人行儀に冷たい冬の敷布団
増税をするしか知恵のない人間
ベースアップゼロ決議する不況風
燃えた日もあった鏡を拭いている
ためいきの数ほど聞くシクラメン
先様によろしくだけで足る誠意
人間味少しわかったユニホーム
男気がゼロにもとれと崖っ淵
振り向けば曲がりくねった足の跡
人間の弱さがカルテに書いてある
芸名は見栄坊と言う万才師
残しては逃げぬ私の小引出し
ライバルの人間臭さ好きになる
人間が好きで雑踏の中に居る
冬の陽を分け合っているゼロ地帯
人間は笑いを待って明日へ生き
人間に生まれ笑いからとまらない
占いを信じているから人間だ
通帳のゼロに浮かんだ母の顔
真面目だが人間としてつまらない
鏡よ鏡奇跡は遂におこらない
花道はないが平和な冬こたつ
奪われて捨てられゼロを生きて行く

和友 保藏 伊三郎 佳秋 光代 青珠 杜的 風云児 萬水 眉郎 柳影 惠美子 白溪子 米朝 春子 美智子 伊升 芳子 江美 月子 春蘭 嘉矩 武庫坊 君子 よし津 年代 園歩 正一

ほんととも嘘も裁いている鏡
三面鏡のひとつ不倫をそのかす
元旦の日記は他人に見せられる
おんぼろの人生なれど歌があり
さわがれた金貨もねむる箱の中
蜜柑切の鉄の音は父の汗
フアクシミリ年賀の兎跳んで出る
万歩計御苦労でしたと床の間に
ぬるま湯の中で酔うてる瘦せた鬼
うさぎとびしてみる今年の運だめし
千両役者花道長い方がいい
初明かり琴名曲に起こされる
振袖を見せたたくてゆく初詣で
にらみ鯛裏返しにして三ヶ日
さっぱりですわとレジの昼下がり
君が代論争戦後派戦前派
夢醒めて恋しさに泣く霜の朝
晶子漱石寛を愛してまだひとり
いつからか聞き上手になった話し下手
誰が来て落葉掃くのか無人駅
初鏡妻の化粧を待ってやる
五番目のスピーチだから気楽です
そのうちに着けばよいので走らない
カシミヤのマフラー夫へ選っている
人間に油断教えたのは兎
人間が信じられず猫といえる
罪深し鏡の奥に火がもえる
人材で人間くさい声を聞く
磨いたら光る子供と思うとく
素っ裸のわたし映してみる鏡
尼崎いくしま川柳会 上田 佳秋報

天樹 千秀 保 千 文夫 市雄 静江 善太郎 良征 山久 紫春 千世子 義美 陽露子 曲ん手 東洋男 博子 百万両 新造 俊子 三枝子 幽香 幽子 森生 みち子 房子 水客 紫香

耳掃除させて二人っきりの部屋
うぬぼれも愚痴も掃除機に吸わす
掃除する仕草が消えぬ嫁の忌
掃除する人夫が絵になる落葉径
心の隅の愛のかけらは掃除せぬ
キリストに似た髭落葉掃いている
桃色の空気を掬う銀の匙
なごやかな空気の中の玩具箱
夫婦仲円満なときは空気がす
色のない空気が旨い里の駅
無くなれば困る空気に感謝せず
酸欠の街から出れぬ不倖せ
故人との会話が長く沈んだ日
肝心なところがぼけてる会話
神様が来てから重くなる会話
片仮名の会話イヤリングが揺れる
垣根越しの会話ははずむ冬日和
クラス会会話も年をとっている
新幹線とめる威力のあるクラス
そっとしておきたい事を知りたがる
妻へ礼すなおに言えぬ喉仏
惜しくない命の筈が薬瓶
いんぎん無礼な男の靴をそっと踏む
ナナハンといのちを賭ける青い風
淡々と語る笑窪の一代記
返礼に困る過分な贈り物
寒い壁でゴッホのいのち灯をくれる
風呂呂上り戦傷の耳手入れる
淡い思慕つのと和服着たくなる
席開けてくれたお方もお年寄り
落葉焚き厄さんだつて芋が好き

みち子 かず子 玉子 白溪子 正一 作二郎 曲ん手 静夢 ときお 佳秋 保藏 梨枝 歌人 定征 晴郎 一子 君夫 文子 春子 かすみ 風云児 年代 杜的 園歩 はつ絵 伊三郎 和友 紫香 水声

膝抱いた男に秋が暮れてゆく
大はらい古希の感謝に坂のぼる

尼崎をはま川柳会

上田

佳秋報

貞吉

核実験するから地球怒りだす
三カ日せめて桐下駄でも履こう
日々好日仕舞い忘れた鬼の面
若水も水道という味気なさ
マークイン北海道は近くなる
生真面目な気性で半歩ずれている
虫くいの野菜をあけて喜ばれ
狭き門だからくぐってみたくなる
人間を秋の画廊でいつ戻す
ひっそりと民話の里の冬木立
吊り橋も手をつないだら渡れそう
寝不足の割にはスマートにもなれず
古稀となる愚図ぐず出来ぬ後がない
ひとりぼっちの炬燵でいつか寝てしまふ
新年や一陣の風期待する
第二の故郷年賀状がふえてゆく
子が三人なに怖がるものがない
幸せは賑やかに子の勢揃い
天辺の柿はカラスに残しとく
ハウスの少し過保護の味がする
信念のほかに私に何がある
ストレスを燃やす絵があり詩があり
愛つていいなやさしく写る冬景色
向い風ばかりでは無し子の病い
髪型を変えて冬陽の中にいる
ふたりで観ふたりで食へて満ちたりる
未来図を描いてみたしあかね雲
防音も良いがやっぱり木の香り
たと紙はちぎれかけても亡母の香よ
敵の塩貰つてからの失語症
ゆつくりとお食べと柿に種がある

中三恵子

静水

菁居

シゲヨ

笑俳

臣子

千恵子

西合

大陸

操子

博子

一路

清水

蘭幸

のばら

貞子

白狐

淑子

妙子

比呂子

太虚

康子

笑子

令子

敬子

房子

静風

栄恵

喜久恵

静住

奥谷弘朗句碑建立10周年

打吹川柳大会

日時 昭和62年4月29日(祝)

開場午前10時

会場 大山観光会館

電話 0859(52)2121

柳話

兼題と選者

絆

出会い

意気

あこがれ

誓い

各題2句

締切り11時30分

投票料五百円

(投句は4月20日迄)

会費 千円

席題 2題

干 682

倉吉市上灘町一一二

主催 打吹川柳会

調人報

とをしを 蟹 隆風 荒介 三千代 きみ子 喜与志 かつ乃 ふみ子 智恵子 長波 幸枝 武子 花子 汲香 完司 洋々 みさ子 けんじ 久三 昌三 房子 茂登子 はる枝 瑞枝 くに子 和子 孔美子 まり子 洋子

富惠 小鹿 諷人 日枝子 千代 諷人報

富 かつ 富
恵 乃 恵
き み
み 香
蟹 隆 風
石 花 菜
く に 子
長 波
智 恵 子
三 千 代
け ん じ
昌 三
は る お
完 司
諷 人
日 枝 子
美 佐 子
洋 ふ み 子
和 子
と し お
孔 美 子
花 子
盛 桜

悦良 ヒデ子 白汀報 とみ子 米朝 エキオ ひか平 千代子 ゆう也 文平 素水 法齊 テル くの 越山 金之助 可住 久子 田米朝報 千代 荒介 瑞枝 久子 みさ子 八重子 とみお 喜与志 武子 かずお 吞水

嫁ぐ娘の晴れ着へ涙また涙
 活きた魚急げと夜も走る
 秒読みで長距離電話にしがみつき
 手加減へそんなに甘えてくれるなよ
 手加減へうれし涙がこぼれたよ
 秒針に急がされ地球体めない
 逃げはせぬ天国急ぐことはない
 急ぐほどからんで困るもつれ糸
 手加減にしてもやっぱりきたツワリ
 手加減にこたえてくれた茄子の色
 沈黙は金というけど退屈すぎる
 ゲストわれどもどうもで事が足り
 大物は親が死んでも急がない

京都塔の会

松川

杜的報

翠星 聖子 英子 かつ子 笑子 歳栄 鈴江 清泉 民子 天痴人 白汀 孝江 白李 英子 紫香 栄 芳子 達子 幸 花代子 武庫坊 和友 水客 巨詩 美穂 飛鳥 陽露子

無駄足が隔てた壁を突き破る
 無駄足を許して帰る大晦日
 つまらない義理へ無駄足ばかり踏む
 木枯しが白紙の日記繰りこくる
 木枯しが長い私の迷った記
 木枯しが背を押された遍路路
 木枯しが斜めに抜ける夜店の灯
 メルヘンの兎は餅を搗いている
 白兎童話めくめて語りつぐ
 初兎誘いあわせて神詣で
 平和そのもの兎がまるくなつて寝る
 兎追いは山はシヤレた名の団地
 雪うさぎ兎の手に音の出る玩具
 豊中もくせい川柳会 田中 正坊報

葉子 年代 風云児 佳秋 白漢子 敏正 明代 笛珠 萬的 麗水 武庫坊 千歩 喜代子 房子 きく子 よし子 慶子 洋子 富子 美弥子 登志実 春子 寿美子 正坊 典子 福一 明

亀さんに負けたウサギの子孫です
 朝帰り馴染みの牛乳屋うす笑い
 流鏑馬の鞍に少年的を射る
 的がきれいで狙いが定まらぬ
 沈丁の赤き目を打つ寒さかな
 天辺で冬を病んでる木守柿
 初詣見知らぬ人に会釈され
 胸を張りなさいと妻に責められる
 目的へ休まず歩むかたつむり
 冬の嘘凍りついて離れない
 阿呆らしい輪とは貴方の事でっせ
 名画鑑賞画廊は裾が冷えて来る
 棟梁が削ると薄いカンナ屑
 聴障川柳 稲田 豊作報

博史 隆 登代子 眉子 つえ子 め女 山久 市雄 英子 曲手 花村 萬的 紫香 豊作 文古 行江 一眺 珍顔 八恵子 承平 進一 たみ 健太郎 町紅報 秀子 多賀子 瑞枝 昭二

身の廻り位掃除は私にも
大掃除あつさり捨てて又拾う
子の部屋を掃除するのに許可が要り
ファミコンの捕虜掃除器に追い出され
老いの冬四角い部屋を丸く掃く
大掃除隙間に落ちた木綿針
一日の労で濁した風呂洗う
角な庭丸く掃の目を入れる
大銀杏散つて掃の目が乱れ
掃除機に吸わせ一円馬鹿にされ
むらくも川柳会
長生きの秘訣をさぐる寿会
喜びへ足袋はきかえる大安日
喜びに笑顔こぼれる祝い膳
喜びが涙となつてこみ上げる
卒業の喜び校庭にこだまして
腰曲げて雪の重みに耐える竹
朱竹額掛けて良縁めぐまれる
裏庭に笹の色濃く竹茂る
喜びを屠蘇で分けあう共白髪
竹ひごの中で和をもつヤジロペー
嬉しさは米寿の母のふくよかさ
円高は養錢箱まで波をよせ
目標へ高い理想を持ちつつけ
花嫁の荷物は高く積み出す
寿と書く筆先をととのえる
風呂の中下手な歌でもよく聞え
放浪の歌人が描く人間味
米寿祝う顔に苦楽の皴刻む
盃を一気にあけて祝い唄
父と子の心をつなぐ竹トンボ

ノ プ 雪子 美功 慎枝 秀雄 吉枝 昭二 吉みえ 緑之助 明朗報 林蔵 みどり やす子 よし子 武衛 竹乃 鶏生 千里 百代 一憲 義良 文子 吉野 秀子 上杉 福子 翠星 正朗 芳子

孫ひ孫膝に長寿の若返る
子の掃り車の音でほつとる
夜の膳どの子が先に帰るやら
一目でも母に逢いたく孤児かえる
元氣よく帰りましたと孫の声
出稼ぎへ陽やけ笑顔の父帰る
Y.F.C 川柳会
人見
のみこんだ言葉の重み胃にもたれ
茜雲松の並木は墨絵めき
積木積み崩れることは考えず
鉢の木の煙目にしむ青しぐれ
障子こし枝先ゆるる風の向き
溶岩の間に若木めをふく三原山
赴任地の梅林を訪う老いひとり
川柳わかやま
おがんでも福などくれる神はない
苦勞する母は福耳持っている
星と話せば小さい福もやつて来る
小さいが半分あなに分ける福
福は内となり負けぬ音で閉め
福さん養錢箱へ福を溜め
福餅を拾つて大事に持ち帰り
さざ波と軽い契りをつ結ぶ風
結び目で判る荷物が今日届く
真結びの固さに亡父が住んでいる
直系を結ぶ仏の灯がゆれる
結び目をゆるめて欲しい奴
綿菓子糸では愛は結べない
結んで開いて神の裁きを待つ夫婦
結び目に女の意地を溜めている
母の手にいつも賑わう夢がある

明朗 雪路 幸子 峰雪 ふみ子 緑水 翠記 房子 豊平次 節子 紅葉 泰子 よし津 三男報 繁子 照子 狂虎 信子 豊太 千寿子 紀美女 正子 凡九郎 柳宏子 鬼遊 桂香 忠 英子 精良 緑良

賑わうて入った金貨も質に入れ
何の賑わいか煙草屋も首を出し
賑やかな街に音なく氷雨降る
賑やかな女湯が気になるタオル
賑わいが過ぎて淋しくなる財布
賑わった後の空しさ知るトップ
開店の賑わい冷めた眼も刺さる
宝恵かごへ賑わい一緒に乗ってくる
絵馬堂が賑わう願いひしめいて
ロケットが次代の社長の椅子に居る
次代にも飛んでくれるか赤とんぼ
しつかりと絆次代へ太く縋う
まっすぐに次代へ続くレール敷く
生き延びて次代さき取りしてやろう
美学には遠い次代の核ボタン
しこかねばならぬ此の子に負う次代
のんびりと次代が遺産食いつぶす
次代論じお酒たらふく飲んでいる
日本の次代たのむぞ呱呱の声
岸和田川柳会 植山 武助報 加代子 圭一 楽天 ゆづる さよ子 通彦 丹吉 富志子 射月芳

忠雄 道夫 恭子 克子 三枝子 隆積 光代 三男 太茂津 紀久子 紫香 裕美 武雄 寿子 信秋 雅子 正博 輝子 登志代 武助報 加代子 圭一 楽天 ゆづる さよ子 通彦 丹吉 富志子 射月芳

世の中を忙しくする頭脳
或さん福の倍増頼んます

嘲笑を土台に根性積み重ね

枯葉舞う話したい事あるように

落葉からささやきもれる夜の底

冬の芽の奥に聞こえる花の私語

露天風呂みんなどて行ける数になり

定退に多忙の日々がなつかしい

雑談の端に性格のぞかれる

手話の娘に神が味方の恋実る

もう早う嫁ってしまいと月に言う

高槻川柳卯の花

辻 白溪子報

花束を出す時少女の顔をする

陽だまりで本読む少女の髪艶

含羞んで少女が勇者に花贈る

姉さん六角唄う少女の赤い顔

大連れた少女が夕日に向い立つ

少年と少女の影が森を抜け

松ぼっくりおとなになりたくない少女

少女期をきつしり詰めた玉手箱

国鉄は重荷になって民営化

どの道も乾いて老いの荷が重い

二代目の水谷八重子へ荷が重い

家族には重荷にならぬ趣味に生き

孫の守り重荷となる手紙

親切がすぎて重荷になる手紙

親切もだんだん重荷になってくる

いつからか愛が重荷になってくる

武助

希久志

住生

ひで

春栄

一弥

狸村

浪速子

寿美子

白光子

甘平

操子

陽露子

杜的

越子

一郎

惠美子

年代

彰一

満喜

さと美

明子

栄子

暢子

幸枝

河瀬芳子

松川芳子

佳秋

名門の過去が重荷となる或る日

残飯を漁る浮浪者犬を連れ

何もかも残し幹事の膳が冷え

残されて平は小言を聞かされる

すき焼の残りで済ます昼の膳

残り布つなぎあわせて趣味に生き

二の重に残る連根の唐辛子

残り者同士縁で添い遂げる

居残り者の汐時知ってるラーメン屋

大猫が居るので残り気にしない

残ったら下さい古い札でいい

二次会へ残りカラオケ好きな下戸

言い負けてお好み焼きを押えつけ

おそくなる電話の向うクリスマス

好きに酒飲む三次会自分流

父にある量の飯屋の指定席

お馴染みのように幹事へ来る仲居

大根焚き湯気に今年を責められる

折れた矢を抱いてこっそり宵寝する

古時計昔の音で年を越す

柳枯れた街友だちが減ってゆく

いい事があつて寒さを忘れてる

川柳はびきの

田中

隆二報

ケイ子

忠宏

シメ子

ベ女

曲ん手

白李

逸

花代子

スミ子

陽露子

英子

志子

紫香

鬼遊

白溪子

種子

里子

森生

実男

とおる

静江

風云児

百合子

如洲

求芽

ケイ子

忠宏

シメ子

白枝

白隆

蛙声

パランスが狂った母の押車

十三夜やっぱり鬼の影を見る

旅立ちへ新婚の顔日本一

ボーナスは出ると銀行ひとり決め

同じ顔見せてはくれぬ秋の雲

約束の指に小さなねじり棒

あきらめて枕の下の風を聴く

暫くの別れを惜しむ靴磨く

風邪ぎみを診る先生も鼻すすり

孤児の顔四十年をたぐり寄せ

ひよつこの面が馴染んではずれない

紙風船突いてみよようか青い空

お守りもカードに変えて薄化粧

借金をして懐をあたたためる

火加減を忘れた恋が燃えつきる

生きて愛して土に還つた母の骨

小指には内緒内緒とコップ酒

温泉の効能話す長談義

八方美人の顔で味方も従いて来ず

勘違い指摘もできぬいい笑顔

あの世にて受取る保険欲しいもの

身に保険車に保険家保険

もう保険勧誘されぬ齢になり

聞き上手保険屋は顔を出している

核戦争地球の保険ない不安

ピンチにも動ぜぬ内の知恵袋

アメリカの米にピンチのコシヒカリ

柳柳藤井寺

清子

トミ子

隅谷義一

憲太郎

昭子

末一

寿美

満洲子

悦子

葉子

美代子

伴子

昇

みつる

隆二

比沙湖

優

繁男

胡村

弘子

重樹

淑子

キシ子

ダン吉

美子

眉水

和子報

須美

幸福を拾うつもり青い鳥
一人ずつ孫の歳聞くお正月

公約を忘れた報いきつと来る

百面相どれが素顔であつたやら

パンタ邸世話する人は兎小屋

ねらつた餌に一直線の鷹の爪

スキヤンダル素顔を見せぬ奴がいる

速いものでまた冬の絵を描いている

保証書がほしい拾った恋だけど

三百余票の多さに公約忘れ去り

ふる里の山の素顔にほだされる

平凡を倅せと知る身になりて

賛美歌とカラオケ混じる年の暮

紅葉も褪せて素顔の山ねむる

一筋に生きた素顔にある魅力

悪人が引いてもみくじ吉と出る

美女でなし素顔地でゆく委員長

フォーカスにかみつクレントの素顔

速報は一瞬みんなの息止める

夢のよな話に乗って着くなり

几帳面さ頼も定規の角に似て

御神火はマグマの化身か荒れ狂い

押す人も押される人も初詣

病床に亡妻を憶えば冬の月

万年青の美女の胸の残り火か

はじらいをみせた笑顔に魅せられる

朝の月眺めて浸る露天風呂

おねだりは孫の特許が高くつき

制服も素顔もロッカーに預けとく

一本の歯の神経に驚きぬ

速い球チャンスに神に賭けてみる

ときお

きよし

志洋

三郎

重樹

作秀

比呂志

美代子

かな女

清心

秋園

君枝

伴子

治子

正枝

本蔭棒

枯二

みのる

ふみ

正人

繁男

うめ

末美

和美

雅美

彩

初枝

ふゆ

昭子

喜道

約束は約束逆立ちで歩く

川柳大坂

トネルを抜きたいしつかり本を読む

孫も聞く祖父の訛りある童話

煙草の輪作って今日の所在なき

広島も西武も替わっている平和

サシニシ大阪で食う平和論

人並みにバタバタしてくる十二月

十二月だから噂は素通りし

戦後まだ終らぬ孤児の深いしわ

老人は決戦の字に肝冷やす

鏡みて今日の作戦練る女

目に余る政治へ世界の矢が怖い

湯豆腐の中でゆれている逸話

無茶苦茶に走ってみたい時がある

世の波を越えて五十路に白髪ふえ

火のふいた神のいかりかこの時世

孫が来て冷たい戦とけはじめ

バーゲンの人波わける手の早さ

減税の分だけチャッカリ売上税

荒波にびくともしない父のしわ

戦争に行かぬがいくさの傷を持ち

流れ弾いくさは人を狂わせる

砂文字を未練の波が消してゆく

老健法成立ギリギリ奥歯かむ

穴を出て走って見る気のろ兎

川柳泉尾

吉川

笑顔いまだに残る一周忌

金貨くじはずれてはと胸をなで

和子

重人

我勝

雅果

希久志

洛平

天醉

与呂志

一介

あすか

鉄心

喜醉

笑風

酔舟

喜楽

もとみ

一歩

哲流

柳弘

司

比呂志

金太

本蔭棒

敏

みつる

寿美報

清子

三世

トミ子

シマ子

グルメにもなれず大根きざんでる

無口でも夫寝言でよくしやべり

不況など知らぬデパート人人人

我が家にも元気でるすの夫あり

民営化決めた見切りの発車ベル

寿司作り待つ客の手に折りの寿司

娘の合格決まれば思わずなんばやろ

情炎の彩に絵筆が染められし

北風へあご引きしため立ち向う

補聴器が木枯しの音拾うてくる

木枯しは北海生れの暴れん坊

情熱は与謝野晶子を上回る

追憶に激しい恋の一ページ

ほんの少し狂うて激しさをほかす

ペンよペン溢れる思い伝えてよ

近況の一句を添えてペンを置く

めんめんと終りを知らぬ母のペン

川柳塔きやらほく

石垣

草や木の蔭で生命を育みし

草の根に弱い心を笑われる

草笛のどこまで追うて情け知る

雑草がつよく生きよと背をたたく

したたかな根とは見えない草もみじ

雑草の中み私野菊咲く

ひと冬を耐えて驚草母になる

深々とおぎしたがる冬の草

蛇いちごけもの道から抜け出せぬ

草も枯れはつきり見える向う岸

野良犬が爪の先程恩返す

弘子

広子

和子

光子

三千代

伴子

はつ子

美子

敏

白水

義一

シメ子

昭子

美代子

満州子

壽美

花子報

ふみ

千春

てい子

晶子

伊都

富美子

時子

日枝子

田鶴

花子

荒介

朗子

より子

爪を研ぐ事を忘れた檻の中
花屋の隅に小さな椅子を見つけたよ
まだ眠い椅子が逆立ちしてる朝
順がくるまで補助椅子で待つてゐる

堺川柳会

河内 月子報

どうしても鳥に鉄砲向けられぬ
ジェラシーが写真の顔が千切られる
糠よろこびさせて内示が取り消され
渡り鳥転勤辞令抱いて来る
もてあますわたしの余生何彩に
絵心があつて彼女のヌード画く
一弦琴乾いた耳が聞いている
よろこびを積んでタンポポ風に乗る
絵具皿何か足りない冬の雲
たまに出て嫌な噂を聞いてくる
聞き上手美味しい酒にしてくれる
モジリアニの女の首も余生だナァー
絵日記は我が家の生活晒け出し
絵馬堂に一つある娘の恋の絵馬
膝にくる猫を愛している余生
よろこびの席へ紫そつと着る
人形の手足千切つて子が育つ
肥満体踏絵のように乗る秤り
今年こそ翔んでみせたい傘寿なり
聞く耳が出来て大人になってゆく
聞き流すことをおぼえて丸くなる
ちぎられたベージュのあとがものなる
離れてもどこかで逢えるちぎれ雲
喜びを共にの夫婦くいだい
よろこびの頂点に立つ孤独感
としよりの年は鴉が指を折る

なみ 夕子 瑞枝 千代 隆積 博子 新造 曲手 寿美子 真柳 甘平 柳影 頂留子 凡子 花仔 夢成 季柳子 金三郎 素灯 草春 笑痴 紀美女 天鳳 楓 春香 雪梢 小風 雅久 山花 耕花

燃えつきるつもり余生は口にせず
マンネリの絵から抜け出すひとり旅
同じ絵を違う角度で見る夫婦
母のない子の画用紙に母が居る
よろこびもあとさきになる老夫婦
鳥を飼う人をやさしいとは言えぬ
いつからのことにしよつかで余生
ワープらをポツリポツリと打つ余生
自画像におもわれにきび二つ描く
無位無冠聞こえるものは風ばかり
名門の過去が重荷となる余生
寒雀お前もすこしダイエツト
猛獣の檻を出はいるする雀
人真似の好きなインコを遠ざける
よろこびの涙は何もかも許す
あなたの心を千切り絵から貰う
似顔絵が別嬪すぎて気に入らぬ
鴉のカアのどきが悪いといひです
美人画に飽きておかめと結婚す
だいでこつたつてゐるのは青い鳥

倉吉川柳会

渡辺

葬式が済むと目の色変り出し
出る度に負けがこんでるへボ力士
打たれてもよし出た杭になつてやろ
ライバルを迎え靴ひもしめなおす
この人の一句が論ひも年賀状
高齢化迎える世論背に聞く
春風のさそいに二階バスの旅
ご馳走が出るまで僕は帰らない
夫よりわたしの愛車自由利く
三億円積んだ車がまだ見えぬ

五月 五里 かりん 千万子 薫風 鬼遊 智的 萬子 景子 藻介 女 紫香 美緒 維久子 武庫坊 年子 天笑 千秋 碧水 柳苑 幸苑 車楽 満春 松女 明子 夕子 かつみ

年賀状これがわたしの人脈だ
年金で命の歯車廻してる
目と目が合つて一緒にくらしける
その中のいくつライバルから賀状
俺も車もそろそろ錆がういてきた
タンポポは他人を裁く目は持たぬ
目がなれて燭の向うに菩薩さま
独眼で見つけた花ははなさない
結婚をしたと賀状に連判状
金婚を迎えますます弾む毯
車から降りた途端の事故だった
気にかかる賀状一枚読み返す
一輪車風を味方にしていない
兎とし飛んで出たがるうちの嫁
フォーカスに出る心配がないパンが焼け
目の隈が濃い過ぎますよお母さん
穏やかに使者を迎える魔法瓶
均等法女の力が出る掟
目から火が出たのを僕も見たかった
立体的兎の年賀やつて来ず

熊本川柳会

有働

芳仙報

帰宅して小さく詫げる電話口
重心が美味しい話へよりたがる
出世坂一段毎にある踏絵
影踏みで遊んだ友が先に逝き
二の足を踏んでよかつたい話
新人類師の影踏んで返事する
行き先の違ったバスに父が乗る
虎の尾を踏まず虎の仔抱く平和
地球より重い生命を金にされ
電話口未だ生まれぬか生まれぬか

完司 寿朗 ゆり子 秋女 とみお 亜弥 やえ 雄々 次男 秋人 荒介 みなと 御前 石花菜 千代 独歩 はるお 苦句 一進 昭代 俊子 アヤ子 謹爾 満雄 市雄 方円 宵草 芳仙

3 月 各 地 句 会 案 内

	日 / 時 及 び 題	会 場 と 投 句 先
尼 崎 いくしま	6 日(金) 午後1時半より 卒業・名刺・自由吟	サンシビック尼崎 阪神尼崎下車南西徒歩3分 〒660 尼崎市昭和南通 8 丁目201 福田礼子 句会費 300円 投句料 60円切手 3 枚
川 柳 わかやま	8 日(日) 午後1 時より ケーキ・鉢・卒業	紀の国会館 2 F (県民文化会館西隣) 〒640 和歌山市駕町15 野村太茂津 句会費 300円 投句料 60円切手 3 枚
西宮北口	9 日(月) 午後1 時より 事故・騒ぐ・自由吟	西宮市中央公民館 阪急神戸線西宮北口駅南出口歩5分 〒661 尼崎市武庫之荘 5—25—17 春城年代 句会費 300円 投句料60円切手 4 枚
菜 の 花	10日(火) 夕 6 時より 庖丁・部屋・利息・縁	八尾神社境内西郷会館2階 近鉄大阪線八尾駅南西歩 5 分 〒581 八尾市弓削町南 2—141 飯田悦郎
川 柳 塔 まつえ	14日(土) 午後1時半より 進学・聞く・恩	慈雲寺 松江市和多見町 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅 句会費 300円 投句料 300円(60円切手可)
堺川柳会	14日(土) 午後1時半より 中古・小さい・違う・提灯	堺総合福祉会館 南海高野線堺東駅下車堺市役所西入ル 〒593 堺市堀上緑町 2—9—2 河内天笑
川 柳 ねやがわ	15日(日) 午後1 時より 出番・化粧・ラッパ・自由吟	寝屋川市立総合センター 4 階 寝屋川市駅下車京阪バス総合センター前下車 〒572 寝屋川市春日町 9—9 高田博泉 句会費 500円 投句料 60円切手 3 枚
もくせい 川 柳 会	16日(月) 午後1 時より 分割・てきぱき・くぐる・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急宝塚線曾根下車東南歩 5 分 〒561 豊中市島江町1—3,5—801 田中正坊
南 大 阪 川 柳 会	19日(木) 夕 6 時より 生きる・気候・思案・力添え	寺田町高松会館 国鉄環状線寺田町駅裏南100米 〒544 大阪市生野区生野西1—5—2 金井文秋 句会費 500円 投句料 180円(郵券可)
南海電鉄 川 柳 会	19日(木) 夕 6 時より 申 請・血 圧・貝	南海会館ビル内南海電鉄本社ビル地下食堂 〒542 大阪市南区難波 5 丁目1 番60号 南海電気鉄道(株)不動産管理部管理課 広井季雄 句会費 無料 投句料 60円切手 1 枚
高槻川柳 サークル 卯 の 花	19日(木) 午後1 時より 妥協・あこがれ・自由吟	高槻市民会館301号室 阪急電鉄高槻下車歩5分 〒569 高槻市桜ヶ丘北町 3—19 辻 白浜子 句会費 500円 投句料 200円(60円切手 3 枚と20円切手 1 枚)
富 柳 会	22日(日) 午前11時より 岩田美代追悼句会(表紙裏参照)	富田林市中央公民館 〒584 富田林市南大伴353 池 森子
駒つなぎ 川 柳 会	23日(月) 夕 6 時より 強烈・陽気・天才・ぎりぎり	寺田町高松会館 国鉄環状線寺田町駅南口下車 南へ1丁3 筋目左へ駅より歩3分 〒545 大阪市阿倍野区天王寺町北1—3—11 津守柳伸
川 柳 東 大 阪	28日(土) 夕 6 時より しごと・定年・出勤簿・年金	東大阪市社会教育センター 2 階 近鉄布施駅北へ5分 長堂小学校隣 〒579 東大阪市新池島町 1 丁目4-14 齊藤光利 句会費 500円 投句料 60円切手 3 枚

★特に記載なき場合 句会費 500円、投句料 300円(郵券可)、各題3句以内

原稿送り先(メ切・毎月20日 予め決定している場合は何ヵ月分でも結構です)

〒596 岸和田市荒木町 1—29—1 宮園射月芳

●募 集●

五月号発表表 (3月15日締切)

川柳塔 (10句) 西尾 葉選
水煙抄 (10句) 黒川 紫選
愛染帖 (3句) 橘 高 薫風選
課題吟 (各題5句以内)
「鯛」 高須賀 金太選
「胸」 舟木 与根一選
「走」 河井 庸佑選
★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。

六月号発表表 (4月15日締切)

川柳塔 (10句) 西尾 葉選
水煙抄 (10句) 黒川 紫選
愛染帖 (3句) 橘 高 薫風選
課題吟 (各題5句以内)
「海」 土橋 螢選
「脈」 二宮 山久選
「笛」 中内 朱坊選
★愛染帖・課題吟へは同人・誌友を限らず。
★用紙は川柳塔社柳箋を()使用ください。

3月の常任理事会は2日(月)

〒545

大阪市阿倍野区三好町二一〇一六
ウエムラ第2ビル202号室
発行所 川柳塔社
電話 (三六八) 一六九一四番
振替口座大阪 8133368番

定価 五百円 (送料50円)
半年分 三千二百円 (送料共)
一年分 六千三百円 (送料共)
昭和六十二年二月二十五日印刷
昭和六十二年三月一日発行

本社3月句会

日時 三月七日(土) 午後六時
会場 メンズファッションセンター3階
東区内本町一 電話 06・941・1918
地下鉄谷町4丁目下車(2番出口)交差点西南角
兼題 「雀」 板尾 岳人
「痛い」 藤井 一二三選
「大事」 塩満 敏選
「明日」 橘高 薫風選
席題 二題 当日発表 各題三句以内厳守
会費 五百円

★投句は柳箋(4cm×19cm)に一葉一句。
各葉毎に裏面に必ず氏名明記。
投句料 300円(60円切手5枚)同封のこと。

川柳塔社

4月の兼題 「両方」 「焼く」
「細胞」 「気合い」

本社4月句会は7日(火)

「夜市川柳」募集

第10回 「銀」 橘高 薫風選
3句・締切 3月末日

第11回 「ドレス」 中尾 藻介選
3句・締切 4月末日

投句先 〒593 堺市堀上緑町二一九一
河内天笑方

堺川柳会

編集後記

☆カルチャールの教室で連句の真似ごとを試み、拙句の「風花す雪子髪を梳くらしく」に協句を添えて貰った。「如月過ぎて思ひふくらむ」の句が出来た。まことに三月らしい。受験子は正念場を迎えるが、草木の芽も人の心も本格的にふくらむ明るさは、雛祭りの季にふさわしく、本誌も、女性特集号のようになった。☆三月八日、七月の大会の下見打ち合わせに有志六名で高野山普賢院へ。前管長森寛紹師の謁見を得、格別の知遇を頂戴した。八十九歳の御前様は、さし出した川柳塔を眼凝しで読まれたのに驚く。亡母と同年なのではしほし感概を催す。☆学園の頃よりの俳句歴は六十年、虚子のホトトギスで研鑽され、毎日俳壇の選者を担当されて二十年近い。☆川柳にもご理解頂けるものと、大会の当日が楽しみです。☆栗主幹と花の頃、再びお訪ねしたいと願っている。

☆普賢院は、芭蕉とも縁の深い寺で、境内には芭蕉堂があり、折からの雪解けのしずくを軒からしたたらせていた。即吟一句「雪解けのおわりはしずか芭蕉堂」☆婦途は装いも新たになった南大門へ回り、近く助け地蔵に手を合わせる。残雪を踏みしめての山道は清浄そのもので、重畳と見はるかす山波には、はや春霞が立ち込めていた。☆その夜、御前様から頂いた、森白象句集「仏法僧」と、人間いかに生き、いかに死ぬかを説いた一代記、「感謝のころ」を読み、金剛峯寺第四百六世座主の淡淡とした心境に打たれる。☆十一日（祝）は、前主幹中島生々庵先生の一周忌にぬかずき、ご加護を祈る。☆十四日にはサークル柳様の吟行会を奥嵯峨に持ち、大覚寺で岩田美代さんの冥福を祈って写経をした。☆七月五日の追悼川柳大会前日の行事をふくめての詳細は来月号に発表の予定です。

す。川柳塔社挙げての意義ある行事に、多数のご参加をお願いします。(薫) ☆新聞紙の真下の松の木皮で作った看板が家にある。それに「おしゃべり庵」と和紙に書いて貼ってある。もう六、七年も前のこと、おしゃべりをするのが目的で、こんな会合を持ったことがある。☆銭湯、理髪店、美容院、喫茶店など、庶民の社交場らしいものはあるが、おしゃべりが目的ではない。そこでの会話は、たてまえ論であって本音で話せない部分が多い。☆フランス革命もサロンの場がなければ起こらなかったと思われ。別に革命を企てる気はないが、同時代を生きてゆく人間同士が、おしゃべりを通じて、何を考え生活しているかぐらいのことを識っておきたい。▼また、人は人の出合いによって、人生は良くも悪くも変ってゆく。会っただけではわからない。お互い話して合ってこそ理解されるものである。

のである。▼われわれ川柳をやっている者には、句会後の二次会でおしゃべりをする機会はあるが顔ぶれは何時も変らず話題も限られてしまう。それはそれなりの効果があるといえ、何かもの足りない。▼酒の好きな人は酒を、食事をする人は弁当を、お茶の人はお菓子を持って三五集つて来る。川柳仲間絵の仲間、近所の人、夫婦もいる。そんな楽しいひとときを再現したいと願っている。(き)

☆私は、いま住んでいる町に引越して以来二十年以上、駅前の同じ床屋に通いつづけている。作家の村上春樹が「床屋は行きつけの店に限る」と何かの随筆に書いてあるが、全くその通りでドアを開け椅子に座るだけで何の説明もなくてもいい。よくおききと仕上げてもどれ。全く楽である。☆その店は、職人はいるけれども、私の調髪は主人、村上春樹) (史)

菊正宗

伝統の味を贈りものに……



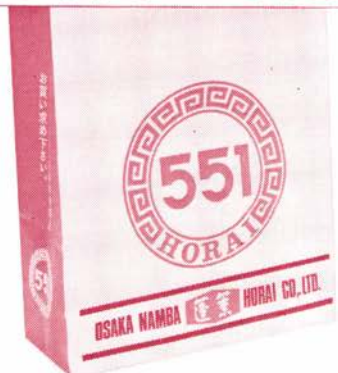
料理がいきる
 辛口の本格派

日本酒で乾杯!

神戸・灘
 菊正宗酒造株式会社

ボリュームたっぷり スタミナ満点!!

豚饅・焼売・焼餃子



なんば戎橋筋本店
 その他有名百貨店でどうぞ

TEL641-0551